月の影 影の海

下

十二國記

小野不由美



講談社文庫



月の影 影の海(下)

十二国記

小野不由美



講談社文庫

月の影 影の海(下)

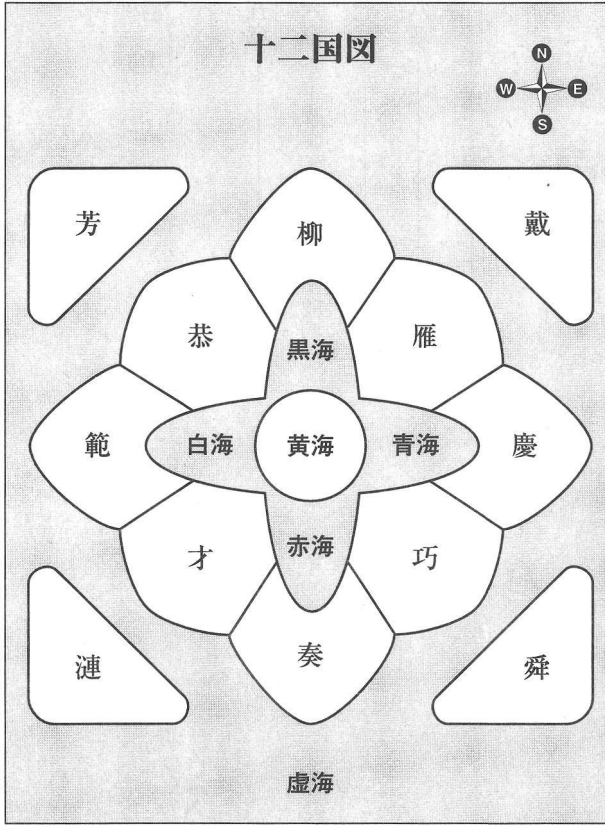
十二国記

小野不由美

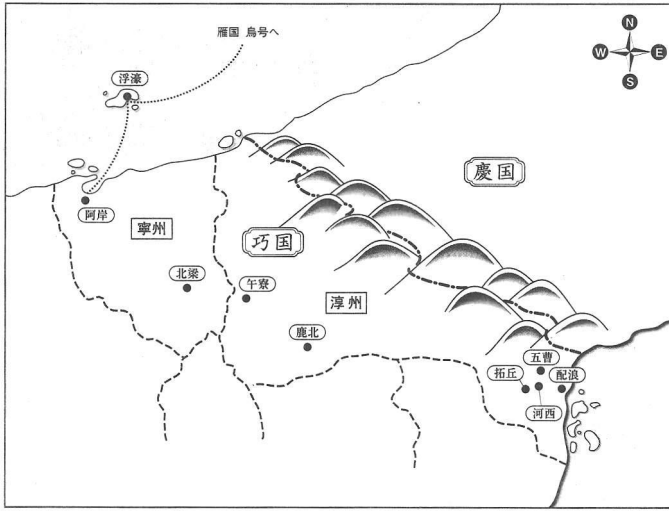
講談社

目次

五章 8
六章 82
七章 130
八章 197
解説 堺三保 246


十二国図
N
W
E
S
芳
柳
戴
恭
黒海
雁
範
白海
黄海
青海
慶
才
赤海
巧
漣
奏
舜
虚海

巧国北方図



月の影 影の海（下）

十二国記

五　章（承前）

1

細い糸を撒いたように雨は降る。

動くこともできず、泣くこともできず、ただぼんやりと水溜まりに頬を浸していると、突然背後でガサガサと下生えを掻き分ける音がした。身を隠したほうがいいのだろうとは思ったが、首を上げることさえできなかった。

村人か、獣か、妖魔か。いずれにしても選択肢が増えるだけで、結果が増えるわけではない。捕らわれるにしても襲われるにしても、このままここに倒れているにしても、辿り着く先はひとつなのだ。

霞む目を上げて物音のほうを見ると、そこにいたのは村人でも追っ手でもなかった。そうして人でもない。一頭の奇妙な獣だった。

姿はネズミに似ている。二本の後ろ肢で立ち上がって、髭をそよがせているさまは本当にネズミに似ていた。妙な感じがするのは、立ち上がったそのネズミが、子供の背丈ほどの大きさもあったからだった。たんなる獣のようにも見えないが、妖魔のようにも見えない。それで陽子はぼんやりとその不思議なネズミを眺めていた。

雨の中で緑の大きな葉を笠のように被っていた。透けるような緑を白く雨足が叩いて、その白い水滴が綺麗だと思った。

ネズミは、きょとんとしたように陽子のほうを見ているだけで、特に身構えるようすもない。少しネズミよりもぽってりとしていた。茶色と灰色の間の色をした毛皮はふかふかとして、いかにも触ると気持ちよさそうだった。毛並みについた水滴が何かの飾りのようだ。尻尾まで毛皮に覆われていたので、ネズミに似ているが、ネズミとは違う生き物なのかもしれない。

ネズミは何度か髭をそよがせて、それから二本足のまま、ほたほたと陽子のほうに近づいてきた。灰茶色の毛並みが屈みこむ。小さな前肢が陽子の肩に触った。

「だいじょうぶか？」

陽子は激しく瞬いた。子供の声に聞こえたが、訊いてきたのは間違いなくそのネズミだった。不思議そうな表情をして、ご丁寧に首までかしげる。

「どうした？　動けないのか？」

陽子はじっとネズミの顔を目線だけで見上げて、それから小さく頷いた。人ではなかったので、少し警戒を解いた。

「そら」

ネズミは小さな、本当に子供ほどしかない前肢を差し出した。

「がんばれ。すぐそこにおいらの家があるから」

ああ、と陽子は嘆息した。

それが助かったことに対する安堵なのか、失望なのかは自分でも分からなかった。

「ん？」

伸ばされた手を取ろうとしたが、指の先が動いただけだった。ネズミの手が伸びる。小さな温かい前肢が陽子の冷えた手を握った。

思いのほか力のある手に支えられ、小さな家に辿り着いてからあとのことを、陽子は覚えていない。

何度か目を覚まして何かを見たような気もするが、それが何だか思い出せるほど、はっきりと風景を摑むことはできなかった。

深い眠りと浅い眠りを交互にくりかえしてようやく目覚めると、陽子は粗末な家の中にいて、寝台に横になっていた。

ぼんやりと天井を見て、それから慌てて身体を起こす。とっさに寝台を飛び降りて、その場にへたりこんだ。陽子の足は全く使いものにならなかった。

狭い部屋の中には誰の姿もない。まだ目眩のする目でそれを確認すると、必死で這って寝台の周囲を検めた。家具らしい家具はほとんどない。かろうじて枕元に板を組み合わせただけの棚があって、その上に、畳んだ布、一振りの抜き身の剣と、真新しい紐が通された青い珠がきちんと揃えておいてあった。

陽子は力を抜く。何とか立ち上がって珠を首にかけ、剣と布を取り上げて寝台に戻った。布を巻いて剣を布団の中に引っぱりこむ。それでやっと安堵した。

その段になってようやく、陽子は自分が寝間着に着がえているのに気づいた。

あちこちの怪我も全部手当てされている。横たわった肩の下に湿ったものがあって、取り上げてみると、水に浸した布だった。起きあがったときに気づかぬまま落としたのだろう。それを額に載せると気持ちよかった。厚い布を重ねた布団を引っぱり上げ、珠を握って目を閉じる。安堵の深い息を吐いた。助かってしまうと、こんな貧しい命でも惜しい気がする。

「目が覚めたか？」

飛び起きて声のしたほうを振り返ると、灰茶の毛並みをした大きなネズミが立っていた。ドアを開けて部屋の中に入ってくる。片手にトレイのようなものを、もう片手には手桶を提げていた。

警戒心が頭をもたげた。人のように暮らし、人のように喋るかぎり、獣のように見えても油断はできない。

その姿を凝視する陽子の前で、監視する視線には気づかないようにネズミは暢気な足どりで歩く。テーブルにトレイを載せて、手桶を寝台の足元においた。

「熱はどうだ？」

小さな前肢が伸びる。とっさに身を竦めて陽子が逃げると、ネズミは髭をそよがせてすぐに寝台の上に落ちた布を拾い上げた。陽子がしっかり胸に抱いた布包みに気がついたはずだが、ネズミは何も言わなかった。布を手桶に放りこみ、陽子の顔を覗きこむ。

「気分はどうだ？　何か食えるか？」

陽子は首を横に振る。ネズミは小さく髭をそよがせてからテーブルの上から湯呑みを取り上げた。

「薬だ。飲めるか？」

陽子は再び首を横に振る。油断してはいけない。それは陽子の生命を危険に曝す。ネズミは首をかしげて、それから湯呑みを自分の口元に運んだ。目の前で少し飲んでみせる。

「たんなる薬だ。ちょいと苦いが、飲めないようなシロモノじゃねぇ。な？」

言って差し出された湯呑みを、それでも陽子は受け取らなかった。ネズミは困ったように耳の下の毛並みを掻く。

「――まあ、いいか。どんなものなら口に入れられる？　飲まず喰わずじゃ、身体が保たねえ。お茶なら飲めるか？　山羊の乳はどうだ？　それとも粥なら食べられるか？」

黙ったまま答えない陽子に、ネズミは困ったように溜息をついてみせた。

「お前は三日、眠ってた。どうにかする気なら、その間にしてらぁ。その」

ネズミは陽子が抱いた布の包みに鼻先を向ける。

「剣だって隠してるぞ。そういうことで、おいらをちょっとだけ信用しねえか？」

真っ黒な瞳に見つめられて、陽子はようよう抱きしめた剣を放す。膝の上においた。

「うん」

ネズミは満足そうな声で言って、手を伸ばす。今度は陽子も逃げなかった。小さな手先が額に触って、すぐに離れる。

「まだ少し熱があるけど、だいぶ下がったな。落ち着いて寝てろ。それとも何か欲しい物があるか？」

陽子は迷って口を開く。

「……水」

ネズミは小さな耳を何度か動かした。

「水な。――よかった、ちゃんと喋れんじゃねえか。すぐに湯冷ましを持ってくるから、起きてるんなら布団を被ってんだぞ」

陽子の頷くのも見ずに、ネズミはいそいそと部屋を出ていく。短い毛並みに覆われた尻尾がバランスを取るように揺れていた。

すぐにネズミは水差しと湯呑みと、小さな器を持って戻ってきた。

少し熱めの湯冷ましがおいしかった。湯呑みに何度かおかわりをもらって、それから陽子は器の中を覗きこむ。ぷんとアルコールの匂いがした。

「……これ、なに？」

「酒に漬けた桃を、砂糖で煮たのだ。それなら食えるだろ？」

陽子は頷き、それからネズミを見返す。

「……ありがとう」

ネズミは髭を高くそよがせる。頬の毛並みがふっくりと盛りあがり、目が少し細まって笑った表情に見えた。

「おいらはラクシュンってもんだ。お前は？」

陽子は迷い、それから名前だけを告げる。

「陽子」

「ヨウコかぁ。どういう字を書くんだ？」

「陽気の陽、子供の子」

「子供の子？」
ラクシュンは不思議そうに首を傾けてから、へえぇ、と呟いた。
「変わった名前だなぁ。どっから来たんだ？」
答えないのは、まずい気がして、陽子は迷い迷いしながら答える。
「慶国（けいこく）」
「慶国？　慶国のどこだ？」
それ以上は知らなかったので適当に答えた。
「配浪（はいろう）」
「そりゃ、どこだ？」
ラクシュンは少しだけ困惑したように陽子を見て、それから耳の下を掻いた。
「まあ、そんなことはどうでもいいか。とりあえず寝ろ。薬、飲めるか？」
今度は陽子は頷いた。
「ラクシュンはどういう字？」
ネズミはもう一度笑った。
「苦楽の楽に、俊敏の俊」

2

その部屋で一日を寝て過ごして、この家には楽俊しかいないようだと陽子は推測をつけた。

「尻尾がありゃあ、それでいいのかい。え？」

深夜、寝台の足元に蒼い猿の首がある。

「どうせ裏切るに決まっているサァ。違うかい？」

この部屋には寝台が二つあるが、楽俊はここで寝ない。ほかに寝室があるとも思えないが、どこでどうやって寝ているのか、陽子には分からない。

「出ていったほうがよくはねえかい？　でなければ、ひと思いに息の根を止めるんだよ、ナァ？」

陽子は返答しない。黙って聞いていれば、蒼猿は同じことを何度もくりかえした。

これは陽子の不安だ。それを言い暴くためにこの猿は来る。ふくらんだ不安を喰うために。——きっとそうなのだろうと思う。

するすると布団の上をすべって蒼猿が枕元までやってくる。小さな首が横臥している陽子の顔を覗きこむようにした。

「悪いことが起こる前に先手を打つんだ。そうしないと生き残れねえぜ。分かってるだろう？」

陽子は寝返りを打って天井を見上げる。

「……楽俊を信用してるわけじゃない」

「ヘェ？」

「この状態じゃ、動けないから仕方ない。せめて剣を握れるようになってからでないと、出ていってもみすみす化物の餌食になるだけだ」

さすがに右手の傷が深い。一日珠を当てていても、まだ握力が戻らない。

「奴はお前が海客だと気がついているかもしれねえぜ？　そう暢気に構えていていいのかい。いまにも役人が踏みこんでくるかもなァ？」

「だったら剣にものを言わせるだけだ。役人の四、五人程度が踏みこんできたって、切り抜けられる。それまでは利用させてもらう」

――ここには陽子の味方などいない。

だが、いまは切実に助けが必要だった。せめて剣を握れるようになるまで。もう少し体力が戻るまで。それまでは、安全な寝床と、食べ物と、薬が必要なのだ。

楽俊が敵なのか敵でないのか分からないが、少なくともネズミは陽子に必要なものを提供してくれる。敵であることがはっきりするまでこの状態を利用する。

「飯に毒は入ってないか？　薬は本当に薬なのかヨォ」
「用心はしてる」
「裏をかかれねえと言い切れるのかい」
蒼猿は陽子の不安を言い暴いていく。それにいちいち答えていくのは、自分に何かを言い聞かせる作業に似ていた。
「積極的にわたしに何かをする気があるなら、意識のない間に何でもできた。いま食事の中に毒なんか入れなくても、殺すチャンスはいくらでもあった」
「何かを待ってるのかもなァ？　援軍か何かをサァ」
「だったら、それまでに少しでも体力を蓄えておく」
「とりあえず信用させて、それから裏切る肚かもなァ」
「だったら、楽俊の意図が見えるまで信用したふりをしておく」
猿はいきなりきゃらきゃらと笑った。
「性根が座ってきたじゃねえか、え？」
「……悟った」
この世界に陽子の味方はいないのだということ。行く場所も、帰る場所もないのだということ。自分がいかに独りかということ。
それでも生きのびなければいけない。味方も、生きる場所もない命だからこそ、心底惜し

い。この世界の全てが陽子の死を願うなら、生きのびてみせる。もといた世界の全てが陽子の帰還を望まないなら、帰ってみせる。

諦めたくない。どうしても諦められない。

生きのびて、ケイキを捜し、必ずあちらに帰る。ケイキが敵でも味方でも関係ない。敵だというなら脅してでも、もといた世界に帰してもらう。

「帰ってどうする」

「それは、帰ってから考える」

「ひと思いに死んだほうがよくはねえかい」

「誰も惜しまない命だから、自分だけでも惜しんでやることにしたんだ」

「――あのネズミは裏切るぜ」

陽子は猿を見返した。

「わたしは楽俊を信じてないから、裏切りようがない」

もっと早く気づけばよかったのだ。陽子は海客だ。だから狩られる。海客には味方などいない。この世界のどこにも居場所などない。それさえちゃんと分かっていたら、達姐にも松山にも、うかうかと騙されたりしなかった。おめでたくも信用して裏切られることなどなかったのだ。信用したふりで相手を利用し、生きのびる方策を立てることができたはずなのに。

利用できるものは利用する。それのどこが悪い。達姐も松山も陽子を利用して小金を稼ごうとした。だったら、陽子が楽俊を利用して命をつなぐことに、何をはばかることがあるだろう。

「立派な悪党になれそうだなァ。エェ？」

「それも、いいかもしれない」

呟いて、陽子は手を振る。

「眠い。——帰れ」

猿は奇妙な顔をする。何か苦いものを堪えているような表情だった。そのまま後ろ頭を見せて、ふいと布団の下に沈みこむようにして姿を消した。

それを見守ってから、陽子は薄く笑う。

あれは陽子の、自分でも感じていなかったような不安まで言い暴いてくれるから、自分の気持ちを整理するのに役立つ。——利用できる。

「確かに、立派な悪党になれそうだ……」

軽い自嘲の笑みがもれる。

それでも、二度と他人に利用されるのだけはごめんだ。誰であろうと自分に危害は加えさせない。必ず、自分を守ってみせる。

「だから、あれでよかったんだ」

山道で出会った親子。陽子が親子に裏切られることがなかったのは、親子に裏切る隙を与えなかったからにほかならない。

――そしてその隙を、楽俊にも与えないことだ。

そうすれば生きのびることができる。

どうして陽子はこんな世界に来なければならなかったのか。なぜケイキは陽子を主と呼んだのか。敵とはどういう敵か。敵の目的は何で、なぜ陽子を狙うのか。あの女は――ケイキと同じ金の髪の、あの女は何者で、なぜ陽子を襲ったのか。

――妖魔は特定の誰かを狙ったりしない。

だったらなぜ、陽子が襲われたのだろう。黒い犬の死骸をあの女は抱いた。死を悼んでいるように見えた。だとしたら、あれはあの女の仲間だったのか。ケイキのまわりに妖魔がいたように、あの女のまわりにも妖魔がいて、それに陽子を襲わせたということだろうか。しかしながら、あの女もまた誰かに陽子を襲うよう命じられているようではなかったか。では、命じたのは誰だろう。ケイキもまた、誰かに命じられて陽子にかかわったのだろうか。分かることが何ひとつない。分からないままではいられない。だから、必ず誰かに答えてもらう。

無意識のうちに拳を握ると、伸びた爪が掌に食いこんだ。

陽子は手を挙げて自分の指先をしみじみと見る。

折れて欠けた爪は鋭利な形をしている。魔物の爪のようだった。

——虚海を渡れるのは妖魔か神仙だけ。

陽子は神でも仙人でもない。

——では妖魔か。

虚海の岸で赤い獣に変化していく夢を見た。あれは本当に夢だったのだろうか？

こちらに来る前、陽子は長い間、妖魔に襲われる夢を見ていた。そうして、その夢は現実になった。——だとしたら。

獣になる夢もまた、予知でないと言いきれるだろうか？

赤く変化した髪も、碧く変化した目も、全部獣に変化していく一段階だとしたら？　陽子は実は人間ではなく、妖魔だったのだとしたら。

それはひどく恐ろしいことに思え、同時にひどく愉しいことに思えた。

怒鳴ること、叫ぶこと、剣を振るい、他を威圧すること。そこには奇妙な高揚感が潜んでいる。陽子は生まれた世界で、声をあらげることもなく、他を睨むこともなく生きてきたし、そうすることを何かの罪悪のように思ってきた。それは本当は、自分でも分かっていたからではなかったろうか？

陽子自身の無意識が、陽子は妖魔であり、猛々しい獣であることを知っていて、それではあの世界で生きていけないことを分かっていて、無害な生き物のふりをしようとした結果で

はなかったか。

だからこそ、誰もが陽子を「得体が知れない」と言ったのかもしれない。

――そんなことを考えながら、眠りに落ちた。

3

家は田園地帯にありがちの、ごく小さな貧しい建物だった。こちらの住居はだいたい貧しい佇まいをしているが、その中にあってもこの家が侘しい部類に入ることが陽子にも分かる。

田圃の中にある家は普通、何軒かの家と集落を作っているものだが、この家は珍しく一軒家のようだった。山の斜面にある家の近くにほかの家は見えない。

ネズミの家だといえば小さな家を想像しそうだが、規模こそ小さいがサイズはごく普通の建物だった。建物だけでなく、家具から日用品から、全部が人間のサイズに合っているのが不思議な気が、陽子にはする。

「楽俊、ご両親は？」

ようやく起きて動くことができるようになって、陽子は楽俊を手伝って、竈の大きな鉄鍋に水を注しながら訊いてみた。桶を支える右手にはまだ包帯を巻いているけれども、その下

の傷はすでにほとんどふさがっている。
竈に薪を放りこんでいた楽俊は陽子を振り仰いだ。
「父ちゃんはいねえ。母ちゃんは出かけてる」
「旅行？　ずいぶん長いね。遠く？」
「いんや。近くの里まで。ちっと仕事があってな。一昨日には帰ってくるはずだったんだが、帰ってこねえとこを見ると、こき使われてるんだろ」
では、母親がすぐにも帰ってくるかもしれない、と陽子は心の中に刻んでおく。
「お母さんの仕事は？」
「冬の間は女中だな。普段は小作農。夏でも呼ばれりゃ、雑用をしに行く」
「そう……」
「陽子はどっかに行く途中だったのか？」
問われて陽子は少し考える。どこかに行こうとしたわけではない。ただ歩いていたのだとは言えなかった。
「……ケイキという人を知らない？」
楽俊は毛並みについた木屑を払った。
「人捜しか？　そいつは、この辺の人間か？」
「どこの人だかは分からない」

「気の毒だが、おいらにゃケイキなんて知り合いはいねえなぁ」
「そう。——ほかにすることは？」
「ない。病み上がりなんだから、座ってな」
言われるまま、陽子は怠い身体を椅子に預けた。
小さなダイニング・キッチンの床は剝き出しの土で、おかれたテーブルも椅子も、ぎしぎしいうような古い品物だった。
陽子が座った隣の椅子には布でくるんだ剣がおいてある。片時も離そうとしない陽子を、楽俊は別段、咎めなかった。それがどういう思考によるものかは分からない。
「陽子はどうして」
楽俊はつややかな毛並みの背中を見せたまま子供の声で訊いてきた。
「男のナリをしてるんだ？」
寝間着に着がえていたので、バレているだろうと思ってはいた。
「……ひとり旅は危険だから」
「そうか。そうだなぁ」
言って土瓶を持ってくる。何かを煎じたらしい芳香が狭い部屋にたゆたった。湯呑みをふたつ、テーブルの上に出してネズミは陽子を見上げた。
「どうしてその剣には鞘がねえんだ？」

「……なくした」

答えながら鞘をなくしたことをいまさらながら思い出した。虚海を渡るときに剣と鞘とを離してはいけないと言われたが、鞘をなくしたことが原因で何かの災難が降りかかってくる気配はない。やはりあれは、珠をなくしてはいけないという、そういう意味だったのだろう。

ふうん、と呟いて楽俊は椅子によじ登る。その動作は幼い子供に酷似している。

「どっかで鞘を誂えてやらねえと、せっかくの剣が傷むぜ」

「……うん。そうだな」

気のない声で答える陽子を、楽俊は真っ黒な目で見上げた。ちょっと小首をかしげる。

「陽子は配浪から来たって言ってたよな」

「……そう」

「それは慶国じゃなく、槇県の東のほうにある村のことじゃねえのか？」

そういえば、そんな場所だったかと、陽子はぼんやり思いながら黙っている。

「あのあたりで大きな蝕があったんだってな」

これにも陽子は黙っていた。

「海客が打ち上げられて、逃げたとか」

陽子は楽俊を睨む。無意識のうちに手が伸びて剣を摑んでいた。

「何の、話」
「十六、七の女で、紅い髪をしてる。剣を持ってるんで注意が必要、その剣には鞘がない。……陽子は髪を染めてるだろ」
柄を握って、視線をただ楽俊に注ぐ。ネズミの表情は読みとれない。そもそも人間よりは数段とぼしい。
「役所からそう連絡がきた」
「……それで」
「そんな怖い顔すんなって。突き出すつもりなら、役所の人間が来たときに突き出してらぁ。大枚の賞金もついてたことだしな」
陽子は布を解く。立ち上がって抜き身の剣を曝した。
「何が目的」
ネズミはただ真っ黒な目で陽子を見上げて、絹糸のような髭をそよがせる。
「短気な奴だなぁ」
「わたしを匿った目的はなに」
ネズミは、のほほんとした仕草で耳の下を掻いた。
「目的、って言われてもなぁ。行き倒れになりそうな奴をほっとけねえだろ。だから面倒見たし、面倒を見た以上、やっぱ役所に突き出す気にはなれねえじゃねえか」

そんな言葉を鵜呑みにはしない。たやすく人を信用すれば必ず後悔すると分かっている。

「海客は役所に送られる。そこで待ってるのは良くて軟禁だし、悪けりゃ首を刎ねられる。どっちかってぇと、陽子は後者だろうな」

「なぜ、そう思う」

「変な術を使うんだろう？　護送されるところを妖魔に襲わせて、そんで逃げたって話じゃねえか」

「あれはわたしがやらせたわけじゃない」

「だろうな」

ネズミはあっさり頷いた。

「妖魔がそうそう簡単に人に従うかい。陽子が呼んだんじゃなくて、陽子を狙ってきたんだろう。違うかい」

「……わたしには、分からない」

「それにしても陽子はやっぱり悪い海客だろうな。妖魔に狙われるような人間だからな」

「……それで」

「県庁に送られれば十中八九命がねえ。逃げるのは当然だが、どこへ逃げればいいのか分かってるのか？」

陽子は答えなかった。

「分かってねえんだろう。こんなところをうろついているようじゃな。――エンコクに行きな」

陽子はまじまじと楽俊の顔を見返した。ネズミの顔には何の表情もない。少なくとも陽子には読みとることができなかった。

「……どうして」

「人が殺されるのを見過ごしにできるかい」

言って楽俊は笑った。

「死刑が当然の悪党に同情するほどおいらだってお人好しじゃねえ。だが、海客だってだけで殺されちゃあ、堪らんだろ」

「悪い海客なんでしょう」

「役人はそう考えるだろうって話だ。海客に良いも悪いもあるもんかい。珍しいものは気味が悪いような気がするだけだろ」

「悪い海客は国を滅ぼすって」

「迷信だ」

あっさりと言った口調にかえって警戒心が湧いた。同じように迷信だと言った人がこの国にいた。それは人間の女だったけれども。

「それで？　そのエンコクとやらに行けば、助かるわけ」

「助かるさ。エンコクの王は海客を疎まない。あそこじゃ海客もほかの人間と同じように生活してる。海客に良いも悪いもない証拠だろ。だから、エンコクに行くのがいいと思う。――その物騒なもんをしまいな」

陽子は、ためらい、ためらい、とりあえず剣を下ろした。

「座んなよ。茶が冷めるぜ」

言われてようやく陽子は椅子に座る。楽俊の意図が分からない。海客であることがばれた以上、早々にここを出ていったほうがいいのだろうが、せめてエンコクについて詳しい情報が欲しい。

「このあたりの地理が分かるかい」

陽子は首を横に振った。楽俊は頷き、湯呑みを抱えて椅子を降りる。剣を握ったままの陽子の足元まできて、土間に屈みこんだ。

「ここは淳州安陽県、鹿北ってところだ」

楽俊は簡単な地図を土の上に描いていく。

「ここが虚海、槇県はここ。配浪ってのはこのあたりらしいから、陽子は西、つまり巧国の中央へ向かって歩いてきた按配になる。逃げるんなら巧国を出なきゃならないのに、これじゃ逆だ」

陽子は地図を複雑な気分で見下ろした。これを信じていいのか。地図のどこかに嘘がない

か。疑いながらも、食いいるように見つめる。これが今もっとも欲しい情報だった。
「西隣が寧州、街道沿いに入ったところが北梁県、さらに街道に沿って北西に向かうと阿岸てぇ街に出る。青海って内海に面した大きな港街だ」
楽俊の小さな指が略図と、驚くほど達者な文字を書いていった。
「阿岸からは青海の対岸に向けて船が出てる。対岸がエンコクだ」
雁国、と楽俊は書いた。「雁」と書いて「エン」と読むらしい。
「まず、北梁を目指せばいいんだな……」
だが、船が使えるだろうか。港を監視されていたら、みすみす網の中に飛びこむようなものだ。
「だいじょうぶだ」
陽子の独白を見透かしたように楽俊は笑う。
「楩県から巧国の外に出るには、まっすぐ北に行って山越えして慶国へ出るのがいちばん早い。役所の連中もまさかこんなところへは来ないだろうが、と言ってたしな。道を間違ったのが幸いしたんだ。手配書がまわっているが、赤毛の若い女、とある。その目立つ剣さえ何とかすりゃあ、そうそうばれやしねえだろうよ」
「……そう」
陽子は立ち上がった。

「ありがとう」
楽俊はキョトンと陽子を見上げる。
「おい。まさか今から出かける気かい」
「急ぎたいから。世話になってばかりで悪いけど」
楽俊もまた立ち上がる。
「待ちな。よくよく気の短い奴だなぁ」
「でも」
「雁国に行ってそれから、どうする。手あたり次第に人を捕まえて、ケイキって奴を尋ねて歩くのかい。船の乗り方は分かるのか、雁国に保護を求める方法は分かるのか？」
陽子は視線を逸らす。目的地が定まっただけでもこれまでの旅に比べれば格段に先行きが拓けたような気がしていたのに、それでもなお乗り越えなければならない困難がこんなにある。そうしてこれはおそらく、実際に直面する困難の何十分の一にも満たないのに違いない。
「何ごとにも準備ってもんがあらぁ。そう焦るな。ここで焦ったところで、あとになって行き詰まる。な？」
陽子は頭を下げた。心のどこかで罠を恐れる自分がいるが、とりあえずここでは楽俊を頼りにするしかないのだ。

「そんじゃ、飯にするか。とにかく体力をつけろよ。阿岸までは、どんなに急いでも一月以上はかかるんだからな」

陽子はもう一度頭を下げた。

少なくとも、体力が完全に戻るまで。それまでには楽俊の意図も分かるだろう。単におめでたいのか、それとも深い策略があってのことか。雁国に——阿岸に、行かねばならない。それを知られている以上、楽俊の真意だけは見届けないわけにいかないのだ。

4

「ずいぶん大きな蝕だったんだって？」

楽俊は昼食の後片づけをしながら言った。

「……配浪の長老はそう言ってた」

「槇県の東一帯は、今年の麦が全滅だとさ。かわいそうな話だ」

陽子はただ俯く。胸のどこかがわずかに痛んだ。

「陽子がしょげることはねえ。別に陽子のせいってわけじゃねえんだから」

「しょげてるわけじゃない」

竈の灰を掻き出しながら言った陽子の手を軽く叩いたのは、短い毛並みに覆われた尻尾だ

った。
「海客が来るから蝕が起こるわけじゃねえ。蝕が起こるから海客が来るんだ」
陽子は楽俊に言われたとおりに木箱の中に灰を落としこむ。燃え残った木屑を拾い上げて別の箱に入れた。
「訊いてもいいかな」
「何だ？」
「蝕って、なに？」
嵐のようなものだと配浪の長老に聞いたが、実際にどういうものだかはよく分からない。
「ああ、蝕も分からねえか。あっちには蝕がねえんだな」
「日蝕、とか月蝕ならあるけど」
「似たようなもんだ。別に太陽が欠けたり月が欠けたりはしねぇけどな。そうだな、嵐みたいなもんかな。嵐は空気が乱れるが、蝕は気が乱れる」
「雨が降って、風が吹いて？」
「そういうこともある。たんに嵐のように大風が吹く蝕もあるが、そういう蝕はたいしたことがないな。地震があったり雷が鳴ったり川が逆流したり、いきなり地面が沈んだりする。いろんな天変地異がいっしょくたにくると思えば間違いないかな。配浪じゃヨウチって湖の底が盛り上がって溢れたとよ。もう湖は跡形もねえそうだ」

陽子は灰を落とすために洗っていた手を止めた。
「そんなに激しい災害なの？」
「ものによるけどな。おいらたちは嵐よりは蝕が怖い。蝕は何が起こるか分からねえから」
「どうしてそんなことが」
楽俊は真剣な顔で、大仕事をする手つきでもってお茶を淹れている。
「蝕ってのは、あっちとこっちが重なって交じっちまうことを言うんだそうだ。本来なら別々のものが重なるから、災害になる。よくは分からねえけど、そういうことなんだと思うぜ」
「あっちとこっち……」
この家で出されるお茶は緑茶のような色をしている。それでもぜんぜん匂いが違う。味は口あたりのいいハーブティーに似ている。
「あっちというのは、虚海の向こうのことだな。こっちは、こっちだ。名前なんかねぇ」
陽子はただ頷いた。
「虚海は陸を取り巻いている。虚海の先には何もない」
「何も？」
「そう、何も。行けども行けども延々と虚海が続いていて果てがない。少なくともそう言われているな。物好きな奴が果てを見てこようってんで船を出したこともあったらしいが、帰

ってきた奴はいないそうだ」
「じゃ、こちらは大地が平らなんだ」
楽俊は椅子によじ登りながらきょとんと陽子を見た。
「地面が平らじゃなかったら、みんな困るじゃないか」
呆れたような声が少し笑えた。
「……こちらの世界はどういう形をしているんだろう」
楽俊は、テーブルの上にあった胡桃を手に取って置いた。
「世界のまん中にスウサンがある」
「スウサン？」
「崇高な山、と書くな。本当に崇高と呼ぶこともある。中岳とも中山ともいう。その四方に東西南北の山がある。東岳、とか東山とかいうが、東西南北それぞれを蓬山、華山、霍山、恒山と呼ぶのが普通だ。東岳は昔は泰山といった。北の国、戴国の王が名字を代から泰に改めたので泰王をはばかって蓬山と呼ぶようになったと聞いてるな。この五つの山が五山だ」
「へぇ……」
「この五山の周囲に黄海がある。海といっても、水のある海じゃねえ。荒れた岩山と砂漠、沼地と樹海だって話だ」
楽俊の指が描いていく文字を陽子は見守る。

「見たことはない？」
「あるわけがねえ。黄海の周囲をさらに東西南北の四金剛山が取り巻いている。金剛山の内側は、人の住む世界でねえ」
「そう……」
まるで何かで見た古い地図のような地形だ、と陽子は思った。
「金剛山の周囲の四方に四つの内海があって、さらに八方を八つの国が取り巻いてる。その周囲が虚海だ。陸にうんと近いところに四つ大きな島がある。この四つの国と金剛山の周囲の八つの国、全部で十二国」
陽子は幾何学的に配置された胡桃を見つめた。それは花のようにも見える。五山を中心に、花びらのように配置された国々。
「それ以外はない？」
「ないな。その外は虚海だけだ。ずーっと世界の果てまで何もない海が広がっている」
ただ、と楽俊は呟いた。
「虚海の東の果てには不思議な島があるという話もある。まぁ、一種の伝説だ。それを蓬莱国という。別名を日本ともいうな」
言って楽俊が書いたのは「倭」という文字だった。
「倭？　日本？」

実際に文字を書いてみせると「倭」のほうを示す。

陽子は少し唇を噛んだ。こんなふうにして、今まで翻訳されてきたわけか。

「海客は倭から来るという話だ」

今度はきちんと「倭」と聞こえた。陽子が言葉を知ってしまったので翻訳の必要がないということなのだろう。

「本当か嘘かは知らねえけど、海客の話を聞いてみると、どこかに倭という国があるのは確からしい。倭を捜して船を出した奴もいるが、やっぱり帰ってこなかったそうだ」

もしも本当に日本が虚海の彼方にあるものならば、船を東に漕ぎ出せば帰れる可能性がある。しかし、そんな手段では帰れるはずのないことを、月影を通ってやってきた陽子は知っていた。

「反対に、金剛山のどこかに崑崙という丘があるという言い伝えもある。そこは中国という。中国からは山客がやってくる」

言いながら、楽俊は「漢」という文字を書く。

「山客？　じゃあ、海客のほかにもこちらに混じりこんでしまう人間がいるんだ」

「いるな。海客は虚海の岸に辿り着き、山客は金剛山の麓に辿り着く。この国じゃ山客は多くねえが、どっちにしても追われるはめになるな」

「そうか……」

「漢も倭も、普通、人は行き来できねえ。それができるのは妖族と神仙だけだと言われてる。ただ、蝕が起こって、あっちから人が流されてくることがある。それが山客と海客」

「ふうん……」

「漢や倭じゃ、家は金銀玉でできている。国は豊かで農民でも王侯のような暮らしをするそうだ。人はみんな宙を駆けて一日に千里でも走る。赤ん坊でも妖魔を倒す不思議な力を持つそうだ。妖魔や神仙が神通力を持つのも、あちらへ行って深山の泉を飲むからだとさ」

言って楽俊は陽子を見る。陽子は苦笑しながら首を横に振った。

奇妙な話だ、と陽子は思う。もといた世界に帰って人に話せばおとぎ話と言われるだろう、この世界にもおとぎ話がある。

思って陽子は微かに笑った。

この異常な世界、とずっとそう思ってきたが、果たして異常なのは世界だろうか、陽子だろうか。

答えなら分かっている。だから海客は追われるのだと、そんなことをようやく思った。

5

「……巧国に流れ着いた海客はみんな死ぬことになるね。蝕と海客が切り離せないなら」

しばらくぼんやりと過去に幾多いただろう海客の運命について考えて、そうして陽子は口を開いた。

「そういうことになるなぁ。……陽子は、仕事は何だ？」

「学生」

そうか、と楽俊は何やら感慨深そうにする。

「海客の中には、こっちじゃ知られてない技術を持っていたり、知識を持っていたりする奴がいる。そういう人間は偉い人の保護を受けて生活できるんだがなぁ」

なるほど、と陽子は自嘲の笑いをもらす。陽子にはこの世界に何かをもたらせるほどの知識はない。

「……倭へ帰る方法を知らない？」

陽子が訊くと、楽俊は明らかに難しい顔をした。

「おいらは知らねえ。……これは言わねえほうがいいのかもしれねえけど」

言い淀んでから、

「多分、そんな方法はねえと思う」

「そんなはずない。来れたものなら、帰る方法だってきっとあるはず」

陽子の声に楽俊は髭を垂れる。きゅうぅ、と喉を鳴らした。

「人は虚海を渡れねえんだよ、陽子」

「実際に渡ってきた。だからわたしはここにいる」
「来ることはできても、行くことはできない。実際、海客にしても山客にしても、帰った話はついぞ聞かねぇ」
「そんなはず……ない」
帰れない、という言葉はどうあっても受け入れることができなかった。
「蝕は？　蝕を待てばいいんじゃない？　そうすれば、帰れる」
勢いこんだ陽子の言葉に、楽俊はしおしおと首を振る。
「いつ、どこで蝕が起こるかは、誰にも分からない。いや、分かる蝕もあるが、人はあちらに行くことができねえ」
そんなはずはない、と陽子はもう一度心の中でくりかえした。帰れないのならば、ケイキがそう言ったはずだ。彼は何も言わなかった。彼の態度のどこからも、二度と帰れないのだとは感じられなかった。
「わたしは倭から蠱雕に追われて逃げてきた……」
「蠱雕？　逃げてって、こっちへか？」
「そう。ケイキという人が」
「陽子が捜してる奴か？」
「そう。そのケイキが、わたしをこちらへ連れてきたんだ。正確に言うと、蠱雕たちがわた

しを狙っているから、身を守るためにはこちらへ来る必要があると言って」

陽子は言って楽俊を見る。

「ということは、身を守る必要がなくなったら戻れる、ってことじゃないの？　わたしがどうしても家に帰りたいのなら、ちゃんと送るって言った」

「莫迦な」

「ケイキは宙を飛べる獣を連れてた。楽俊みたいに話す獣。まっすぐに飛べば片道に一日、と言ってた。片道、ってことは帰りのことを考えた科白だと思う。少なくとも二度と帰れない旅に使う言葉じゃない。……違う？」

陽子が訴えるようにそう言っても、楽俊はしばらく口を開かなかった。

「――楽俊？」

「おいらにはよく分からねえ。……でも、おおごとが起こってるのは確かみてえだな」

「……そんなに、大層なこと？　わたしが言ったことは」

「大層なことだな。蠱雕なんて妖魔が出たらこっちじゃ大騒ぎだ。近くの里が空になることだってある。しかもその蠱雕は特定の誰かを狙っていたという。わざわざあちらへ、だ。そんな話は初めて聞いた。――そうしてケイキとかいう人間がお前をこちらへ連れてきたとか」

「うん」

「妖族も、たとえ神仙にしても、行き来できるのは自分の身体ひとつだと、おいらは聞いてる。ケイキというのが何者にしても、他人を連れて行き来した、なんて話は聞いたことがねえ。何が起こったのか、おいらにゃとうてい分からねえが、それが尋常のことでねえのだけは分かる」

楽俊は思い悩むように考えこんでから、真っ黒な眼を陽子に向けた。

「それでお前、どうしたい。何より身を守りたいか、それともまず帰りたいか」

「……帰りたい」

陽子が言うと、楽俊は頷く。

「そうだろうな。だが、おいらじゃその方策が分からねえ。これはどうあっても雁国へ行ったがいい」

「うん。それから？」

「役人や州侯の手に負えることとも思えねえ。雁国へ行って、延王の力を借りるしかねえと思う」

陽子はぽかんと楽俊が書いた文字を見つめた。

「延王……。王様？」

楽俊は頷いた。

「雁国の王は代々、延というんだ」

「でも、王様が力を貸してくれるの」
「分からねえ」
そんな、と陽子は声を上げそうになったが、かろうじて耐えた。
「分からねえが、このまま巧国にいるよりはましだ。巧国の主上に助力をお願いするよりも、まだ希望がある。延王はタイカだからな」
「タイカ？」
「胎、果。あちらの生まれのお方だよ。そういうことがごくたまにある。本当はこちらの人間なのに、間違ってあっちに生まれることがな」
陽子は目を見開いた。
「そんなことが？」
「ああ。本当にたまのことだ。といっても、間違ってあちらに生まれること自体がたまなのか、こちらに戻ってくることがたまなのかは、はっきりしねえけどな」
「……ふうん」
「こちらには三方有名な胎果がいる。雁国延王、延宰輔、戴国泰宰輔」
「宰輔」
「王の補佐をする相談役みたいなもんだな。このうち泰宰輔は亡くなったという話だ。泰王は行方知れず、国も乱れてとうてい近づけねえ。やはり雁国を訪ねるべきだろう」

陽子は少し呆然としていた。たくさんの知識を急速に詰めこまれたせいでもあり、あまりに急激に先の見通しが立ったせいかもしれない。

王を訪ねるというのは、首相や大統領を訪ねるに匹敵することだろう。そんなことが可能なのか、という思いと同時に、そんな大層なことに巻きこまれているのか、という戸惑いがある。そう考えこんだとき、表から足音が聞こえた。

6

表に出る板戸を開けて姿を見せたのは、中年の女だった。

「楽俊」

呼ばれてネズミは顔を上げる。

「母ちゃん」

髭をさわさわとそよがせた。

「妙なお客を拾っちまったぞ」

陽子はきょとんとせざるをえなかった。帰ってきた女は間違いなく人間に見える。彼女もまた驚いたように楽俊と陽子を見比べた。

「お客って。お前、この娘さん、どうしたんだい」

「林で拾った。こないだの槇県の蝕で、あっちから流されてきたんだと」
まあ、と呟いて、女は楽俊の顔を見る。硬い表情が顔を掠めた。
陽子は身構える。この女も槇県で逃げ出した海客の噂を聞いているだろうか。だとしたら、はたして楽俊のように陽子を匿ってくれるだろうか。
「……そりゃ、大変だったろうねえ」
息を詰めて見守る陽子に向かって女は笑った。そうして楽俊を振り返る。
「何だい、お前。だったら呼び戻してくれればよかったのに。娘さんの世話がお前にちゃんとできたのかい」
「ちゃんとできたさ」
「どうだかねえ」
笑ってから、女は笑みを含んだままの目で陽子を見やった。
「……ごめんなさいよ。あたしは用で出てたものだから。楽俊はちゃんとあなたの面倒を見れたのかしら」
「あ、……はい」
陽子は頷く。
「熱を出して身動きができなかったところを、助けていただきました。ありがとうございます」

あら、と女は目を丸くした。陽子のそばに駆けよってくる。
「もうだいじょうぶなのかい、起きて？」
「はい。本当にお世話になりました」
答えながら、陽子は油断なく女の表情を探る。
楽俊はまだいい。獣だから。女は信用できない。信用するのが怖い。
「そんなことならなおさら、母さんを呼べばよかったのに。気が利かないねえ」
女に言われて、楽俊は不満そうに鼻先を上げた。
「ちゃんと面倒見たさ。具合もすっかりよくなったし」
女は陽子の顔を覗きこむ。
「よかったこと。……起きていても辛くない？　まだ寝ていたほうがよくはないかい？」
「もう、だいじょうぶです」
「そう。ああ、こんな薄着で。——楽俊、着物を出しておあげよ」
慌てたように楽俊が隣の部屋に駆けこんだ。
「お茶もすっかり冷めてるじゃないか。ちょいとお待ちね。今、淹れなおしてあげようね」
玄関の戸をしっかりと内側から戸締まりして、バタバタと裏口から井戸端へ消える女を陽子は見送る。薄い上着のような着物を抱えて戻ってきた楽俊にそっと声をかけた。
「お母さん？」

「そうだ。父ちゃんはいない。うんと前に死んだからな」
楽俊の父親というのは、人間だったのだろうか、ネズミだったのだろうか。
「本当のお母さん？」
おそるおそる訊いてみると、楽俊は不思議そうにする。
「もちろん、本当の母ちゃんだ。母ちゃんがおいらをもいだんだからな」
「もいだ？」
楽俊は頷く。
「リボク――里の木――から、もいだんだ。おいらの入った木の実を」
そこまで言って楽俊は、はたと気がついたように、
「あっちじゃ子供は母親の腹に生るって本当か？」
「……うん。普通、そうだね」
「腹に木の実ができるのか？　そしたらどうやってもぐんだ？　腹の外にぶら下がってるのか？」
「もぐ、っていうのがよく分からない」
「木になったランカを取るんだ」
「ランカ？」
「卵の果実。このくらいの」

楽俊はひとかかえほどの大きさを示した。
「黄色い実で、中に子供が入ってる。それが里木の枝に生って、親が行ってもぐんだ。あっちじゃ卵果は生らないのか？」
陽子は軽く額を押さえた。これはおそろしく常識が違う。
「ちょっと違うみたい……」
楽俊は問いかけるように陽子を見る。陽子は苦笑した。
「あっちじゃ子供は母親のお腹の中にできる。母親が産むんだ」
楽俊は目を丸くした。
「鶏みたいに？」
「ちょっと違うけど、そういう感じかな」
「どうしてできるんだ？　腹の中に枝があるのか？　腹の中にある実をどうやってもぐんだ？」
「うーん……」
陽子がさらに頭を抱えたところで、母親が戻ってきた。
「さあさ。お茶を淹れようね。お腹はすいてないかい？」
楽俊の母親は息子から陽子の事情を聞きながら、手早く蒸しパンに似たお菓子を作ってく

れた。
「それでな」
と楽俊は小さな手に大きな蒸しパンの塊をかかえて言う。
「雁国に行ってみるのがいいんじゃねえか、って話をしていたところなんだ」
母親は頷く。
「そうだね。それがいいだろうね」
「そういうわけで、おいらは陽子をカンキュウまで送ってくる。着るものを持たせてやってくんな」
楽俊が言うと、母親は目に見えて強張った顔をした。
「そんな、……お前」
「心配するこたねえよ。ちょっとひとっぱしりしてくらぁ。なぁに、土地に不慣れな客人を送ってくるだけだ。母ちゃんはしっかり者だから、ひとりでもだいじょうぶだな？」
母親は少しの間楽俊を見つめて、それから頷いた。
「あいよ。——気をつけて」
「楽俊」
陽子は言葉を挟んだ。
「気持ちはありがたいけど、そこまで迷惑はかけられない。道なら聞いたから何とかなると

思う」

同行者は怖いのだ、とはさすがに言えなかった。

「さっきの地図を何かに書いてもらえるかな。手間を取らせて悪いけど」

「陽子。雁国に入るだけならともかく、王を訪ねるとなれば、お前だけじゃ無理だ。たとえ道は分かっても、王宮のあるカンキュウまでは三ヵ月以上はかかる道のりだ。その間、食う物はどうする。宿はどうする？　銭は持ってるのか？」

陽子は押し黙る。

「とてもひとりだけじゃ行かせられねぇ。お前はこちらのことを、何にも分からないんじゃねえか」

陽子は考えこむ。長い間迷って、それから頷いた。

「……ありがとう」

言いながら視野の端で剣の包みを捉えていた。

確かに楽俊には同行してもらったほうがいい。この母子は一見、陽子を助けてくれようとしているように見えるが、それが本当だとは限らない。敵か味方か分からないが、行く先を知られている以上、分からないまま放置しておくことはできない。陽子がここを出て即座に役所に訴え出られたら、阿岸で待っているのは船ではなく罠なのだから。

連れていけばこの女に対しての人質になる。万が一、楽俊が自分にとって危険な存在にな

れば、剣にものをいわせればすむことだ。

——そう考え、ひどく自分が情けない生き物になった気がした。

7

楽俊の家を出たのはそれから五日後のことだった。

親子は陽子の味方であるかのように振る舞いぬいたし、陽子もとりあえずゆっくり休むことができた。「この親子だって何を考えてるか分かったもんじゃない」というのが蒼猿の言い分ではあったし、それは陽子も承知していることではあったが。

楽俊の母親は旅の準備を何から何まで整えてくれた。達姐の家よりも貧しそうに見えるのに、粗末なものとはいえ陽子の着がえにいたるまで準備してくれる。陽子には大きな男物だったので、楽俊の死んだ父親のものかもしれない。

それはかえって陽子の中に警戒心を呼び起こした。ただの善意でここまでしてくれるとは思えなかった。楽俊はまだいい。見かけだけでも人ではないから。母親のほうを信頼する勇気が陽子にはない。

「どうしてわたしを助けてくれるの」

堪りかねてそう訊いたのは、楽俊の家を出てようやく建物が見えなくなったころだった。

楽俊は小さな前肢で髭の先を弄る。
「だって、お前。陽子ひとりじゃ、とうてい関弓まで行けねえだろう」
「道を教えれば、それで充分だとは思わない？」
「なぁに。関弓見物も悪くねえ。あそこはなかなか面白いところだと聞くからな。何でも、あちら風なんだと。王があちらの人じゃしかたねえけど」
「倭風？　漢風？」
「倭風。延王は倭から戻ってきたんだ」
「それだけ？」
楽俊は陽子を振り仰いだ。
「陽子はそんなにおいらが信用できねえのか」
「……親切すぎると思わない？」
背中に大きな布包みを背負ったネズミは、カリコリと胸の毛並みを掻いた。
「ご覧のとおり、おいらはハンジュウだ」
「……ハンジュウ？」
「半分、獣。ここ巧国の王は半獣がお好きでない。海客も嫌いだ。あの方は変わったことがお嫌いなんだ」
陽子はただ頷く。

「だいたい、巧国に海客は多くねえ。海客はほとんど東側の国に流れ着くし、それで言えば多いんだろうが、実際の数はたかが知れてらあ」
「どのくらい？」
「さてなぁ。三年にひとりいるかいないか、ってとこだな」
「そう……」
それは思ったよりも数が多い。
「海客が流れ着くのは何といっても慶国が多い。東の端になるからな。次が雁国、巧国はその次だ。巧国じゃ、半獣も多くねえ。これはどうした加減かは知らねえ」
「ほかの国は多い？」
「多いな。少なくとも巧国ほど少なくねえ。このあたりじゃ半獣はおいらだけだ。主上は悪い王じゃねえんだろうが、少しばかり好き嫌いが激しい。海客の扱いも厳しいし、半獣の扱いも冷たい」
言ってから楽俊は髭を弾いた。
「おいらは自慢じゃねえが、この辺でいちばん頭がいいんだ」
陽子は意図を量りかねて、楽俊を見つめる。
「利発だし目端が利くし、気立てもいい」
陽子は少しだけ笑う。

「……なるほど」

「それでもおいらは一人前じゃねえ。いつまで経っても半人前だ。半分しか人間じゃねえからな。この姿で生まれたときにそう決まっちまった。だけどこんなの、おいらのせいじゃねえ」

陽子は小さく頷く。言わんとしていることは漠然と分かったが、それでも警戒心が解けない。

「海客だってそうだろう。だから、海客が海客だってだけで、殺されるのは我慢できねえんだ」

「そう」

楽俊は今度は大きな耳の下の毛並みを掻いた。

「ジョウショウって分かるか？　上庠――郡の学校だ。上庠の成績は一番だった。選士ってのに選ばれて少学へも推薦された。少学ってのは淳州の学校だ。これに行けたら、ちょっとした地方官になれる」

「郡は県の上？」

「郷の上だな。州には郡が幾つかある。幾つかは州によって違うけどな。郡は五万戸、四郷、郷は一万二千五百戸、五県」

「……ふうん」

五万戸、という数字はピンとこなかった。

「本当は上庠だって行けねえんだ。それを母ちゃんが一生懸命頼んで入れてくれた。成績がよければもっと上の学校へ行けて、そしたら役人になれる。おいらは半人前だから田圃をもらえねえけど、田圃がなくてもちゃんと生活できるようになる。けどな、少学には半獣は入れねえんだとさ」

「……そう」

「母ちゃんはおいらを上庠に入れるために自分の田圃も家も売っ払っちまった」

「じゃ、今は？」

「今は小作だ。近所の金持ちの自地を雇われて耕してる」

「自地」

「お上がくれるのが公地。許可をもらって開墾したのが自地だ。もっとも、働いてるのは母ちゃんだけで、おいらは働いてない。働きたくても働けねえんだ。半獣は雇ってもらえねえ。税金が余計にかかるからな」

陽子は首をかしげた。

「なぜ？」

「半獣には熊や牛みたいな連中もいる。そういう連中は人並み以上に力があるから、だと。要は主上が半獣を嫌いだってことなんだけどな」

「ひどい話だな……」

「海客ほどじゃねえけどな。何も、捕まえろだの殺せだの言うわけじゃねえんだから。だけどおいらは人の頭数に入らねえ。それで田圃も貰えなけりゃ、職を見つけることもできねえ。母ちゃんはひとりでおいらとふたりの生活を支えてる。だからウチは貧乏なんだ」

「……そう」

「おいら、職が欲しいよ」

言って楽俊は首に提げた財布を示した。

「これは母ちゃんがおいらを雁国の少学へ入れようってんで貯めてくれた金だ。雁国じゃ、半獣だって一番上の大学まで行けて、国の偉い役人にだってなれる。ちゃんと一人前に認めてもらえて、田圃だって貰えるし、戸籍にも正丁って載る。陽子を連れていって頼んだら、雁国で職が貰えるんじゃねえかと、実は思った」

ではやはり、全くの善意ではないのだ、と陽子は皮肉な気分で思った。悪意ではないのかもしれないが、善意だと思うことはできない。

「……なるほど」

その声が明らかに棘を含んでいたのだろう、楽俊は立ち止まった。少しの間陽子を見たが、それだけで何も言わなかった。

陽子もまたそれ以上は何も言わなかった。人は誰もが自分のために生きている。慈善でさ

え、突き詰めれば自分のためでしかない。だから楽俊の言葉は恨めしく思うようなことではないのだ。

ああ、と陽子は思う。人は結局、自分のために生きるものだから、裏切りがあるのだ。誰であろうと他人のために生きることなどできるはずがないのだから。

8

その日、夕方になって辿り着いたのは郭洛という街だった。河西ほどもある大きな街だ。前にもこちらの人間に連れられて旅をしたが、今度の旅はあのときに比べると格段に貧しい旅になった。食事は屋台ですませ、宿は最低のところを取った。一泊が五十銭で大部屋を衝立で仕切って使う。それでも路銀は楽俊のおごりだから、陽子に不満の言いようがあろうはずがない。

楽俊は陽子を弟だと言い通した。人間の女が母親で問題ないものなら、陽子が弟でも構わないのかもしれない。実際、それを疑われたことはなかった。

当初は造作のない旅だった。楽俊は道中、いろんなことを話してくれた。

「四大、四州、四極で十二国」

「四大？」

陽子は、ほとほと歩いてくる楽俊を振り返る。

「そうだ。慶東国、奏南国、範西国、柳北国で四大国。別に大きいわけじゃねえんだが、こう呼ぶな。四州国が、雁州国、恭州国、才州国。それからここ――巧州国。でもって四極国が、戴、舜、芳、漣」

「戴極国、舜極国、芳極国、漣極国？」

「そうだ。それぞれに王がいて国を統治する。巧国なら塙王だな。王宮は喜州傲霜にあって、翠篁宮っていう」

「傲霜？　街？」

そうだ、と言って楽俊は左手に見える山を示した。

こちらは土地に起伏が多い。左手の彼方には高い丘陵地帯が見え、さらにその向こうに高く険しい山地が薄く見えた。

「あの山のさらにずっと向こうだ。天まで届く山があって、それが傲霜山。山の頂上に翠篁宮があって、麓の一帯が傲霜という街だな」

「へえ……」

「王はそこから国土を統治するんだ。州侯を任じ、天下に法律を発布して、民に国土を分配する」

「州侯は何をするわけ？」
「州侯は各州を実際に統治するのが仕事だな。州の土地、人民、軍を管理する。法律を整備して、戸籍を整える。税を徴収し、災異に備えて軍を整える」
「実際にということは、王は実際に統治するわけじゃないんだ」
「王は統治の指標を示すのが仕事だな」
よく分からないが、アメリカのような制度になっているのかしら、と思う。
「王は法律を制定する。これを地綱というんだ。州侯も法律を作れるけど、地綱に逆らうことはできねえ。その地綱も施予綱を犯して定めることはできない」
「セヨ――なに？」
「天が王に対して与えた、このようにして国を治めよという決まりだな。この世界を天幕にたとえるなら、世界を支える太い綱だ。だから天綱とも太綱ともいう。王といえども、これだけは守らなきゃいけねえんだ。太綱に触れないかぎり、王は自分の国を好きに動かしていい」
「……へぇ。その太綱は誰が決めたの。まさか本当に神様でもないでしょう」
さあ、と楽俊は笑う。
「大昔、天帝は九州四夷、併せて十三州を滅ぼし、五人の神と十二人の人とを残してすべてを卵に返したそうだ。その中央に五山を作り、西王母を主に据え、五山を取り巻く一州を黄

海と変じ、五人の神を龍王として五海の王に封じたとか」
「神話だね」
「そういうことだな。そうして、十二人の人にそれぞれ木の枝を手渡した。枝には三つの実が生り、一匹の蛇が巻きついていた。この蛇が解けて空を持ち上げた。それぞれの実が落ちて土地と国と玉座を作った。残った枝は変じて筆になったそうだ」
陽子の知るいろんなタイプの神話とはずいぶん違う。
「この蛇が太綱を、土地は戸籍を、国は律を、玉座は仁道――すなわち宰輔を、筆は歴史を意味するんだとさ」
言ってから楽俊は髭を弾く。
「そのころ、おいらはまだ生まれてなかったから、真偽のほどは知らねえけどな」
「……なるほど」
中国の神話も子供向けの本でずっと昔に読んだはずだが、内容はほとんど記憶にない。それでも、これとはずいぶん違った内容だったことは確かだ。
「じゃあ、天帝がいちばん偉い神様？」
「さて、そういうことになるかなぁ」
「願いごとは誰にするわけ？　天帝でしょう？」
願いごと、と楽俊は首を傾ける。

「――そうだな、子宝を願うなら、天帝に願うけど」
「ほかは？　たとえば、豊作とか」
「さぁて、豊作を願うなら堯帝かなぁ。そう言って堯帝を祀る連中もいるなぁ。そういうふうに言うなら水害を逃れるのは禹帝だとか、妖魔を逃れるのは黄帝とか」
「いろいろいる？」
「うん。いろいろ祀る連中もいるな、確かに」
「普通はしないの？」
「しねえなぁ。作物なんてのは、天気がよくてちゃんと世話をしてりゃ豊作になる。天気がいいか悪いかは、天の気の具合のもんだ。泣いても笑っても降るときには降るし、旱るときは旱る。願ったところで仕方ねえもん」
陽子は少しきょとんとする。
「でも、洪水になったらみんな困るでしょ？」
「洪水にならないように、王が治水をするんだろ？」
「冷害とか」
「そういうときに飢饉にならないよう、王が穀物を管理するんじゃねえか」
――よく分からない。
分からないが、何かがひどく陽子の知る人間とは違うのは分かった。

「じゃあ、試験に合格するよう願ったり、お金が貯まるように願ったりもしないんだ」
陽子が言うと、今度は楽俊がきょとんとした。
「そんなのは本人がどれだけ努力したかの問題だろう？　お願いしてどうすんだ？」
「それは……そうだね」
「試験なんてのは勉強すれば受かるし、金なんてのは稼げば貯まる。いったい何をお願いするんだ？」
さあ、と苦笑してから、陽子はふいに笑みを凍らせた。
――そういうことか。
ここには神頼みも運もない。だから、海客を売って小金を稼ぐチャンスがあれば、無駄にしない、というわけだ。
「……なるほど」
呟いた言葉には、我ながら冷たいものが潜んでいた。それに気がついたのか、楽俊が陽子を見上げて、それからしょげたように髭を落とした。
自分で自慢するだけあって、楽俊は博識で頭の回転も速い。確かにこれほど利発で、それでも半獣だというだけで一生を母親の荷物にならなければならないのだとしたら、それは辛いことかもしれなかった。

楽俊は、陽子のことや日本の事情についても訊きたがったが、陽子はあえて何も話さなかった。

そして——襲撃を受けたのは、十六日目のことだった。

9

それは夕刻近く、その夜の宿泊地である午寮の街が見えたところだった。

街道を急ぐ旅人は門の前で雑踏を作る。陽子もまたその中に混じって、足を速めていた。門までの距離は五百メートルばかり。急かすように門の中から太鼓の音が聞こえ始めた。それが鳴り終わったら閉門の刻限である。

誰もがさらに足を速める。門へ駆けこもうとする人々が人込みを作る。その中の誰かが、あ、と声を上げたのが始まりだった。

声につられたように、ひとりふたりと背後の空を見上げた。雑踏のあちこちで動きが止まる。それを怪訝に思った陽子が振り返ったときにはすでに、飛来してくる巨鳥のシルエットが鮮明だった。

巨鳥。鷲のような。角がある。八羽。

「蠱雕！」

悲鳴を皮切りに人波が午寮の街に向かって殺到し始める。陽子もまた楽俊と一緒に走り始めたが、蠱雕のほうが速いのは明らかだった。

殺到する人々を見捨てて、大きな門扉が閉じ始める。

――莫迦な。

中にいる自分たちだけでも蠱雕から身を守ろうという肚だろうが、空を飛ぶ魔物に門を閉ざして何の意味がある。

「――待ってくれ！」

「待って!!」

悲鳴がうずまく。陽子はとっさに楽俊を押して人波から飛び出した。

門に遠かったことが幸いした。門前では、自分だけでもと駆け出した人々が前の者を掻き分け押し倒し、踏みにじって、阿鼻叫喚のありさま。

人波から少し離れ、街へ向かって駆けながら、陽子は薄く笑う。

――ここは神頼みをしない国だ。

妖魔に襲われても、神に縋ったりはしないのだ。だから、前の人間を引き倒しても先を急ぐ。旅人を見捨てても門を閉める。

妖魔に襲われるか否かは本人の用心深さがものをいうのか？　襲われて助かるか否かは、

本人の力量がものをいうのか？

「……莫迦が」

——だとしたら、この連中は無力すぎる。

赤ん坊が泣き叫ぶような声が間近でして、陽子はその場に踏み留まった。間近を駆ける楽俊が陽子を振り返って声を上げた。

「陽子！　無理だ！」

「楽俊は街へ」

飛来してくる蠱雕との距離は、すでにその胸毛にある斑紋が見てとれるほどの距離しかなかった。その姿を睨んだまま楽俊に門を示し、剣に巻いた布を腕を振って解く。

慣れた感触が肌を伝う。すでにジョウユウの感触は陽子となじんで違和感がない。

余裕の笑みが浮かんだ。

——無理じゃない。

蠱雕など楽なものだ。数はわずかに八羽、陽子の剣はどんな厚い肉でも貫きとおす。と、なれば、敵の身体が大きいのは狙いやすくてありがたいばかりだ。しかも、鳥は滑空するので間合いが取りやすい。

久々に敵に出会って、笑っている自分が興味深かった。

すでに傷は癒え、体力も充分、敵には負けない絶対の自信がある。ただ逃げるしかない人

人の声を——海客である陽子を狩っているはずの人々の悲鳴を背中で聞くのは、奇妙に誇らしく、愉しい。

生臭い風を巻いて急降下してくる蠱雕の群れに剣を構えた。身内で血潮が沸騰して、荒れ狂う海の音がする。

——獣だ。

——わたしは、間違いなく妖魔だ。

だから、敵に出会って、これほど嬉しい。

殺戮が始まった。それは蠱雕にとっても殺戮だったが、人にとっても殺戮だった。

下降してきた一羽を落とし、二羽を落とし、半数を仕留めたときには街道は血の河になっていた。

墜落するように下降してきた五羽目の首を刎ねて六羽目を避けると、陽子を爪にかけそびれた鳥は、遠く背後にいた旅人を血祭りに上げて上昇していく。

陽子は着実に仕事をこなしていった。

血の臭いも骨肉を断つ感触も、とっくの昔になじんでいたし、人の死体を見て心を動かされるほどの繊細さなど残っていない。

確実に敵を避けて敵を倒すこと、返り血をできるだけ避けること、陽子が気を遣うのはそ

れだけだった。

七羽を落として陽子は空を見上げる。八羽目が降りてこない。上空を旋回し、何かを迷っているふうだった。

急速に暮れ始めた空は、錆びた鉄の色。そこに黒く妖鳥の影がよぎる。

たとえジョウユウの力を借りても、空までは追っていけない。

「――降りてこい」

陽子は呟く。

ここへ、陽子の爪のとどく範囲へ降りてこい。

旋回する影を睨みながら、視野の端で周囲を探る。

日の光のあるうちに敵が現れたからには、あの女も必ずいるはず。――あの、金の髪の女。その金の色がどこかに見えないか。

近くにいれば捕まえる。今の陽子にはそれができる。捕まえたら目的を必ず訊く。言わないのなら片腕を落としてでも言わせてみせる。

そう思考する自分に驚愕する。

まるで獣の本性が現れたかのような、この獰猛さはどうだろう。それとも、たんに血に酔っているのか……。

頭上の影がふいに動きの角度を変えた。降りてくる、と見てとって柄を握る手に力をこめる。振り上げる間もなく、鳥はさらにもう一度角度を変えて、ふたたび宙を旋回する体勢にもどった。

「降りてこい！」

――妖魔のくせに命が惜しいか。

今日まで人を襲っておいて！

陽子は剣を振り上げる。足元に落ちた蠱雕の死体に突き刺した。

「来ないなら、仲間の死体を切り刻むが、いいか！」

まるでその声が理解されたかのようだった。

旋回していた蠱雕がいきなり落下してくる。矢のように降ってくる鋭い鉤爪を死体から引き抜いた剣で一閃、剣花を散らして払い落とし、そのまま足を突き通す。

鳥が奇声を上げて羽搏いた。風圧にあおられ、一緒に浮き上がりそうになる足を踏みしめて、抜いた剣を胴に向かって突き上げる。刺さった手応えを感じるや否や、横飛びに退いて剣を引くと、一瞬前までいた場所に鮮血が飛沫いた。

あとは造作もなかった。翼に力を失って墜落した鳥に、二撃三撃をくりだし、首を斬り落として止めを刺す。大きく剣を振って血糊を払ったとき、陽子の周囲に動くものはなかった。

道に倒れたのは蠱雕ばかりではなかった。累々と道に人が横たわっている。呻き声が聞こえるので全部が死んだわけではなさそうだった。

無感動にそれを見ながら手近に転がった蠱雕の首で剣を拭い、それでようやく陽子は思い出した。

——自分には連れがいなかったか。

「……楽俊？」

午寮の街までを見わたすと、城門が開くのが見えた。細く開いた城門の間から衛士が飛び出してくるのが小さく見える。

自分の足元から城門までの間を再度見わたし、陽子は離れたところに倒れた獣を見つけた。灰茶の毛並みは血を吸って赤黒く変色している。

「楽俊……」

駆けよりそうになって改めて城門を見た。外に飛び出した衛士や人々が口々に何かを叫んでいるが、意味は聞き取れない。

楽俊と門とを見比べる。

楽俊の怪我がどの程度か見てとれる距離ではないが、毛並みを汚した血糊は近くに転がった蠱雕のものばかりではないだろう。

陽子は首から提げた珠を握りこんだ。これが誰にでも効能があるのか、それとも剣のように陽子にしか反応しないのか、それは分からない。しかしもしも、相手を選ばないものならこれは楽俊を助けるだろう。

そう思いながら、珠を握ったまま動けなかった。

駆けよって怪我の具合を確かめ、ひどいようなら珠の力が及ぶか、試してみる。——そうすることが楽俊にとってはいちばんいいのに違いない。

だが、珠を当てているうちに衛士たちがやってくる。それだけの距離しかない。

倒れた人々の間で、たったひとり立っている陽子は目立っているはずだ。遠くから見守っていれば、蠱雕が陽子を狙っていたことも、それを倒したのが陽子であることも分かるはずだ。不審に思われないはずがない。

鞘のない剣がある。少し調べれば髪を染めていることは簡単に分かる。海客であることはすぐにばれるだろう。

しかし、ここで逃げたら。

倒れたまま動かない毛並みを見た。

楽俊は自分を見捨てて逃げた陽子のことを訴えはしないだろうか。

剣を包んだ細い荷物、染めた髪の色、男物の服、雁国へ行こうと阿岸を目指していること。そんなものがばれれば、陽子を捕らえようとした網は一気に引き絞られてしまう。だか

らといって倒れた楽俊をかかえて逃げる腕力などありはしない。
楽俊の安全を考えるなら戻るべきだ。
そして、陽子の安全を考えるなら。
鼓動が大きく打った。
——駆け戻って楽俊に止めを刺す……。
そんな、と身内で声がした。それを誰かが叱咤する。
迷っている時間はない。楽俊が余計なことを喋れば、陽子に生きのびる道はない。
戻ることはできない。それはみすみす命を捨てることだ。楽俊をこのまま捨てておくこともできない。それもまた、同じくらい危険だ。だったら。
戻って最善の行為を行ない、可能なら楽俊の財布を持ってくる。そうすれば陽子は完全にこの窮地から逃れることができる。その時間はある。それだけの時間ならば。
大きく開いた城門からどっと人が流れ出してきた。駆けよってくる人波を見て反射的に陽子はその場を退っていた。
いったん動き出すと、止まらなかった。
陽子は身を翻す。背後には街道から駆けつけた旅人が迫っていた。その人込みに紛れ、陽子はその場を駆け出した。

10

――きっとだいじょうぶだ。……きっと。

言い聞かせ、言い聞かせして日の暮れた街道を小走りに歩いた。

完全に暗くなって人通りが絶えてからは、なりふり構わずに走った。午寮から離れ、分岐路で曲がり、今朝旅立った街も午寮の街も引き離していく。

充分に離れても陽子の足は止まらない。急いでいないと、何かが背後から追いかけてくる気がした。

だいじょうぶだ、と自分に言い聞かせる。

たとえ楽俊が陽子のことを訴えて出ても、写真すらないこの国で、自分を捕まえられるとは思えない。ましてや、楽俊は自分を匿ったのだから、罰をおそれて彼を見捨てて逃げた海客のことを喋ったりはしないはずだ。

自分に強く言い聞かせて、陽子は足を止めた。

胸の中に深い穴が空いた気がした。

いま考えるべきことは、そんなことではないのではないか。

楽俊は無事だったのだろうか。陽子の目には深い傷には見えなかったが、本当に深手ではなかったのだろうか。

戻るべきだ、と身内で声がする。

戻って、せめて楽俊の安否を確かめてから逃げるべきだ。

危険だ、と誰かが言う。たとえ戻っても、陽子に何ができるわけでもない。

珠がある、と誰かが叫ぶ。

珠があっても、それが楽俊の怪我に役立つとはかぎらない。ましてや、楽俊はすでに死んでいるかもしれない。戻れば捕まる。捕まるだけ無駄だ。捕まれば命がない。

――そこまで命が惜しいのか。

――惜しくないはずがない。

――命の恩人を見捨てて。

――本当に恩人だったとは限らない。

――助けてくれた事実は変わらない。楽俊は匿ってくれた。

――下心があってのことだ。善意ではない。そんな人間はいつでも裏切る。

――善意でない人間なら見捨ててもいいのか。本当にそんなことをしてもいいのか。

あそこにあれだけの怪我人がいて、ましてやその中に知り合いがいて、それを見捨ててしまっていいのか。せめて救助に手を貸すのが本当ではないのか。そうすれば死なずにすんだ

命が、あそこにはあったのではないのか。
――そんな綺麗事をこの国で言っても始まらない。貧乏籤を引くのが落ちだ。
――綺麗事ではない。
人として当然のことだろう。そんなことさえ忘れたのか。
――いまさらお前が人の道を言うのか。
いまさら、お前が。
いまさら！
「戻って止めを刺す」
耳障りな声が聞こえて陽子は飛び上がった。道のすぐ脇の草叢に蒼猿の首が見えた。
「――そう思ったんじゃなかったのかい」
「……あ……」
陽子は蒼猿を凝視する。全身が震えた。
「止めを刺すつもりだったんだろう、えェ？　そのお前が、いまさら人の道を言うのかい。お前が！　いまさらよォ」
猿は狂ったように哄笑した。
「……違う」
「違わねえなァ。お前は確かにそう思ったのサァ」

「そんなこと、するつもりはなかった」
「つもりだったさ」
「実際、しなかった。わたしには、できない！」
きゃらきゃらと猿は嗤う。
「そりゃあ、人殺しが怖かったからだろうが。殺したかったが、殺す勇気がなかっただけじゃねえのかヨォ」
高笑いして猿は陽子を楽しげに見た。
「頼もしくなったじゃねえか。だいじょうぶだ。次は殺せる」
「違う！」
叫びを無視して蒼い猿は笑う。甲高い音が容赦なく耳に刺さった。
「――わたし、戻る」
「どうせ戻ってもとっくに死んでるサァ」
「そんなの、分からない」
「死んでるさ。戻って捕まって殺されるだけ無駄だヨォ」
「それでも、戻る」
「ヘエェ、戻ったらお前の罪が消えるのかい」
返しかけた踵が止まった。

「戻るがいいサァ。戻って死体を見て泣いてくりゃぁいい。そうしたらお前が殺そうと思ったことも帳消しになるだろうヨォ」

きゃらきゃらと笑う顔を呆然と見据える。

これは自分だ。浅ましい自分の声だ。これは全く、自分の本音にほかならない。

「――きっと裏切られたに決まっている。その前でよかったじゃないか」

「……うるさい」

「今ごろ衛士がこっちに向かってるかもしれねえぜ？　あのネズミに訴えられてヨォ」

「黙れ！」

柄を握って剣を振るった。草叢を切って葉先だけが散る。

「死んでりゃいいなァ。止めを刺しておけば完璧だったのによォ。まだまだ甘いよ、お前はサァ」

「やかましい！」

「今度はやるんだ。次にあんなことがあったらよ、間違いなく止めを刺すんだぜ」

「ふざけるなぁっ！」

音をたてて葉先が散った。

――止めを刺してどうする。見捨てただけでもこんなに心に重いのに、殺してそれでどうやって生きていくのだ。命がありさえすればいいのか。どんな醜い生き物に成り下がって

も、ただ生きていられればいいのか。

「……殺さなくてよかった……」

早まらずに、魔がささずに、それを実行に移さないでよかった。

猿は高らかに嘲笑する。

「生かしておいて、訴えられていいのかい。えェ？」

「楽俊は、訴えていいんだ！」

ようやく胸に詰まったものが涙になって浮かんだ。

「楽俊にはその権利がある。もちろん、わたしを訴え出ていいんだ！」

「甘い、甘い」

なぜ人を信じることができなかったのだろう。

鵜呑みにしろと言っているわけではない。それでもあのネズミを信じることが、陽子にはできていいはずだった。

「そんな甘いことを言ってるからサァ、裏切られていいカモにされるのサァ」

「裏切られてもいいんだ」

「甘いなァ」

きゃらきゃらと夜を裂いて猿は笑う。

「本当かい？　本当にそれでいいのかい。カモにされるほど莫迦でいいのかヨォ」

「裏切られてもいいんだ。裏切った相手が卑怯になるだけで、わたしの何が傷つくわけでもない。裏切って卑怯者になるよりずっといい」

「卑怯になったが勝ちサァ。ここは鬼の国だからなァ。お前に誰も親切にしたりしないんだぜ。親切な人間なんか、いないんだからヨォ」

「そんなの、わたしに関係ない！」

追い詰められて誰も親切にしてくれないから、だから人を拒絶していいのか。善意を示してくれた相手を見捨てることの理由になるのか。絶対の善意でなければ、信じることができないのか。人からこれ以上ないほど優しくされるのでなければ、人に優しくすることができないのか。

「……そうじゃないだろう」

陽子自身が人を信じることと、人が陽子を裏切ることは何の関係もないはずだ。陽子自身が優しいことと他者が陽子に優しいことは、何の関係もないはずなのに。

ひとりでひとりで、この広い世界にたったひとりで、助けてくれる人も、慰めてくれる人も、誰ひとりとしていなくても。それでも陽子が他者を信じず卑怯に振る舞い、見捨てて逃げ、ましてや他者を害することの理由になどなるはずがないのに。

猿がヒステリックに笑った。ただ突き刺さる声で笑い続ける。

「……強くなりたい……」

柄を固く握りしめた。
世界も他人も関係がない。胸を張って生きることができるように、強くなりたい。
猿が突然に笑いをやめた。
「お前は死ぬんだ。家にも帰れず、誰にも振り向かれず、騙されて裏切られて、お前は死ぬんだ」
「死なない」
ここで死んだら愚かで卑怯なままだ。死ぬことを受け入れることは、そんな自分を許容することだ。生きる価値もない命だと烙印を押すことはたやすいが、そんな逃避は許さない。
「死ぬんだ。飢えて疲れて首を刎ねられて死ぬんだ」
渾身の力をこめて剣を払った。草叢を斬り裂いた切っ先は空気までを斬って、強い手応えを返した。散った葉先の間に猿の首が跳ぶ。地に落ち、血糊を撒いて転々ところがった。
「ぜったいに、負けない……」
涙が止まらなかった。

硬い袖で顔を拭って、歩き出した陽子の足元には金の光が落ちていた。
陽子はしばらくその意味を取りかねて、呆然とそれを見つめる。
土の色を変えた血溜まりの中、蒼猿の首があるはずの場所にそれはあった。

もうずいぶんと昔になくしたはずの。
――鞘、だった。

六章

1

「あの、これくらいの」
陽子は旅人を捉まえて、子供ほどの背丈を示す。
「ネズミの姿をした人を知りませんか」
老婆は陽子を胡散くさそうに見た。
「何だえ？　半獣かい」
「はい。昨日、門前で怪我をしたと聞いたんですが」
「ああ――。蠱雕の」
言って老婆は背後を振り返る。遠く午寮の街が見えた。
「さてね。昨日怪我をした連中なら、役所にいるはずだがね。役所で手当てを受けてるよ」

朝から何度も聞いた返答だった。

夜明けを待って午寮の街に戻ったが、おそろしいほど城門の警戒は厳重で街の中に入ることはとうていできない。役所に行ってみればいい、とそう思っても、肝心の役所に近づくことができないのだ。

「役所には行ってみたのかえ」

「はい……。いないようだったので」

「だったら、裏だろうよ」

老婆は言って、歩み去る。午寮の街の裏手には死体が並べてある。それを遠目には見たがそこもやはり警戒が厳重で、死者の列の中に楽俊がいるかどうか確認できるほどの距離には近づくことができなかった。

大きな荷物を背負って去っていく老婆を見送り、陽子は午寮からやってくる次の旅人を捉まえる。

「あの――」

声をかけた旅人は男と女の二人組で、男は足に布を巻いて杖をついていた。

「すみませんが」

老婆に訊いたのと同じことをくりかえす陽子を、ふたりは胡散くさげに見る。

「昨日、怪我をしたと聞いて――」

「お前」
男が唐突に陽子を指さした。
「お前、まさか昨日の――」
全部を聞かず、陽子は身を翻す。
「おい。ちょっと、待て！」
声を上げる男には構わず、足早に旅人の間を縫ってその場を立ち去る。
男のあの怪我は、おそらく昨日のものだろう。そして、男は陽子を覚えていた――。
今朝からこうやって逃げるのは何度目か。そのたびに門前に衛士の姿が増えて、ますます街に近づけなくなる。

午寮を離れ、山に入ってほとぼりが冷めるのを待った。こんなことをしていては、いずれ捕まる。分かっていても午寮の街を離れられない。
――消息を訊いてどうする。
楽俊の無事を確かめたからといって、陽子が昨日彼を見捨てて逃げたことのつぐないになるわけではない。それはすでに犯した罪で、もうとりかえしはつかない。
ましてや、無事だと聞いたからといって、詫びるために街の中に入っていけるわけでもない。街へ入れば衛士に捕まる。そうして、それは畢竟、陽子の死を意味するのだ。

――どうしていいのか、分からない。

いたずらに汚い命を惜しんでいるような気がする。その反面、あっさり投げ出すのは何かが違う気がしてならない。

決心がつかないから、午寮を離れてしまうことができない。

迷って迷って、何度目かに午寮の門前に戻った。幾人かの旅人を捉まえて同じ質問をくりかえし、同じような返答を得た。

いよいよ途方にくれたときだった。

「――あんた」

背後からかけられた声に、陽子はとっさに逃げようとする。身を翻しながら振り返って、自分のほうを複雑な顔で見ている母子を見つけた。

「――あんた、バクロウの近くで会った……」

陽子は足を止め、しばらく呆然とする。いつか山道で会った親子だった。水飴の行商らしく、大きな荷物を背負っていたが、その荷物はいまも親子の背中にある。

「よかったこと。無事だったんだね」

母親はそう言って微笑った。ひどく複雑そうな表情だった。女の子は母親よりももっと複雑そうな表情で陽子を見上げている。

「怪我はもういいのかい？」
陽子は迷い、それから頷いた。頷いて深く頭を下げる。
「――あのときは、ありがとうございました」
助けてくれようとする手を振り解いて山に入った。言葉だけの礼は言ったが、心底感謝をしなかった相手。
「本当に、よかった。あれからどうしたろうと、気になっていたんだ」
母親は笑った。こんどは屈託のない笑顔だった。
「ギョクヨウ、ほらね。無事だったでしょう」
自分に擦りよるようにする女の子を見下ろす。女の子はまだ複雑そうな顔で陽子を上目づかいに見上げていた。陽子はちょっと微笑ってみる。そうして、自分が長いこと笑わなかったのに思いいたった。顔の筋肉は強張って、少しも笑えた気がしなかった。
ギョクヨウはちょっと瞬きをして、それからすねたような表情で母親の背後に隠れようとする。陽子は屈みこんだ。
――この親子があのとき水と水飴を与えてくれなかったら、その夜をのりきれたかどうか分からない。
こんどはもう少し、ましに微笑えた。
「いつかは、お水と飴をどうもありがとう」

女の子は陽子と母親を見比べるようにして、それからちょっと笑った。笑った自分がおかしかったのか、すぐに複雑な顔に戻ったものの、やがてくすくすと笑いだした。子供特有の笑顔が、ひどく愛しくて泣きたかった。

「本当に、ありがとう。ちゃんとお礼を言えなくてごめんね」

ギョクヨウは満面に笑みを浮かべてから、

「……痛かったの？」

そう訊いてきた。

「え？」

「お兄ちゃんは、怪我が痛いからきげんが悪かったの？」

「――うん。そう。ごめん」

「もう、痛くない？」

「うん。治った」

ひきつれた痕を残して治った傷を見せる。その傷の治りが早すぎることに、はたして親子が気づいたかどうか。

ギョクヨウは母親を見上げて、治ったって、と言う。母親は目を細めて娘を見下ろした。

「よかったこと。バクロウに着いてから捜しに戻ろうとしたんだけどね、里に着いたらもう閉門の刻限でね。近ごろの衛士は腰抜けだから、夜には出てくれやしない。――尋ね人か

い？」

陽子は頷く。

「あたしたちも午寮へ行くところさ。一緒に行くかい？」

これには首を横に振るしかなかった。母親は、そう、とだけ言った。

「――さ、ギョクヨウ。宿に行こうね」

言って娘の手をとって、それから彼女は陽子を見る。

「何て人だい？　半獣なんだね？」

陽子は彼女を見返した。

「役所か裏にいるんだろう？　何て人だい？」

「――楽俊、といいます」

「このあたりにいておくれね。ちょいと見てこよう」

ごく軽く言って、母親は荷物を背負いなおす。陽子は深く頭を下げた。

「……ありがとうございます」

女は夕刻近くに、ひとりで戻ってきた。楽俊らしい者は、怪我人の中にも死者の中にもいなかった、とだけ言って午寮に駆け戻っていった。彼女が陽子の身の上を理解していたのかどうか、それは分からない。

2

確認してもらって諦めがついた。

陽子の知らない間に、午寮の街を出たのか。それとも、女が見落としたのか。

それを確かめる方法はない。

街道から午寮の街に向かって頭を下げた。これは何かの罰だろうと、そう納得するしかなかった。ここで全部を投げ出してしまうことだけは、どうしてもできなかった。

夜に歩いて昼には眠る。再びその生活が始まった。こうして旅をすることが多いから、陽子はこの国の夜ばかりを覚えている。

財布は楽俊が持っていたので陽子には所持金がない。妖魔と戦って過ごす夜も、飢えて草叢で眠る朝も、あまりにおなじみのことだから、不満を感じたりはしない。目的のある旅だからいい。阿岸へ行って、雁国へ渡る。船に乗るには料金が必要だろうから、それだけは何か方法を考えなくてはならなかった。

拓丘で海客の老人に荷物を盗られてから、逆算してみると陽子は一月以上、街道をさまよっていたらしい。飲まず喰わずで珠の力を借りて、それが限界。それが分かっているから、

これまでのどの旅よりもましだろう。

蒼猿はもう現れない。鞘が戻って、剣の幻もなりを潜めた。わずかに水音がして鞘と柄の隙間から光がもれることがあったが、あえて鞘から抜いて幻を見ようとは思わなかった。その代わりに黙々と歩く。ひたすら先を急いだ。

――あさましいこったな。そんなに命が惜しいかよォ。

歩きながら、胸の内に蒼猿の声を聞く。

あれはそもそも陽子自身の不安だから、蒼猿の姿はなくても声は明瞭だった。

――惜しいな。

『恩人を見捨てるような命でもか』

「少なくともいまは、自分の命を惜しむことにする。そう決めた」

『いっそ役所に自首して出て、すっぱり全部つぐなっちゃどうだい？』

「雁国に着いたら考える」

きゃらきゃらと、その笑い声まで聞こえる気がした。

『要はてめえの命が惜しいだけかよォ』

「そう。狩られているから、いまは何より命が惜しい。狩られる心配がなくなって、自分の命がまるごと自分のものになってから、どういう生き方をするのか考える。反省もつぐないも、そこで考えようと思ってる」

――ただ、生きのびることだけ。今は。

『妖魔を殺して、人を剣で脅しながらか』

「いまは仕方ないと思うことにする。あれこれ迷わずに、とにかく早く雁国に着くことを考える。雁国に着けば少なくとも、追っ手に向かって剣を向けずにすむから」

『雁国に着けば、それで全部丸くおさまるのかい？』

「そうはいかないだろうけど。ケイキも捜さなくちゃならないし、帰る方法も探さなくちゃならない。考えることもたくさんある」

『ケイキが味方だとまだ信じてるのか？　エェ？』

「会えばどちらか、分かる。会うまでは考えない」

『ケイキに会ったところで、帰れねえぜ』

「帰れないことがはっきりするまで、諦めない」

『そんなに帰りたいか？　誰も待っちゃいねえのにヨォ』

「それでも、帰る……」

陽子は故国で人の顔色を窺って生きていた。誰からも嫌われずにすむよう、誰にも気に入られるよう。人と対立することが怖かった。叱られることが恐ろしかった。今から思えば、何をそんなに怯えていたのだろうと、そう思う。

ひょっとしたら臆病だったのではなく、たんに怠惰だったのかもしれない。陽子にとって

は、自分の意見を考えるより他人の言うままになっているほうが楽だった。他と対立してまで何かを守るより、とりあえず周囲に合わせて波風を立てないほうが楽だった。他人の都合にうまく合わせて「いい子」を演じているほうが、自己を探して他としのぎを削りながら生きていくよりも楽だったのだ。

卑怯で怠惰な生き方をした。だからもう一度帰れればいいと思う。帰ったら、陽子はもっと違った生き方ができる。努力するチャンスを与えられたい。

——そんなことを静かに考えながら歩いた。

雨が増えた。そういう季節なのかもしれなかった。雨の日に野宿は苦しいから、廬に立ち寄って宿を乞うことを覚えた。

納屋の隅を貸してくれる者もいたし、代金を請求する者もいた。衛士を呼ばれたことも、廬の連中が集まってきて叩き出されそうになったこともある。反対につましいながらも食事を与えてくれた人もいた。

そうするうちに、労働力を提供して宿を借りることを学んだ。

泊めてもらう代わりに、翌日その家で働く。仕事の内容は様々だった。田圃の手伝い、家の掃除、雑用、家畜の世話、家畜小屋の掃除。墓掘り、などという仕事もあった。

仕事によっては何日か留まって小金を稼いだ。

仕事をしながら転々と廬を渡り歩き、トラブルになれば剣を使って逃げる。衛士を呼ばれればしばらくはどこの廬でも警戒が厳重だったので、ほとぼりがさめるまで野営で耐えた。妖魔の襲撃はたびたびあったし、徐々にその数も増えつつあったが敵と戦うことは特に気にならなかった。

歩く街道の背後に、陽子を追ってくるとおぼしき衛士たちの姿が見えたのは、そんな旅をひと月も続けたころだった。

廬に立ち寄って人と接触すれば陽子が歩いた痕跡を残すことになる。足跡を残すようなものなので、自分が追われているならばきっと追いつかれるだろうという自覚はあったから、特にうろたえはしない。

山に逃げこみ、追っ手を振り切ったが、そののちには街道でたびたび衛士を見かけるようになった。

阿岸を封鎖されるのだけは怖かったので、阿岸に近づいてからは宿を我慢した。街道からも外れて人の目に触れないよう細心の注意を払って山の中をひたすら歩く。

楽俊は阿岸までは一月かかると言っていたが、実際に港が見えたときには二月が経過していた。

3

阿岸の門前で陽子は旅人を捉まえた。

阿岸の街はなだらかな丘陵地帯を下ったところにあった。丘を下る街道からは阿岸の港が一望できる。

青海と呼ばれる海は本当に青かった。岸に向かって打ち寄せる波が白い。青い透明な海と、阿岸の海岸を抱きこむように延びた半島と、その内海に浮かんだ白い帆と。半島の向こうには真一文字に水平線が見える。地面が平らなら不思議な話だ。

阿岸の門前ではいくつもの街道が交錯している。街は大きく、出入りする人もまた多かった。雑踏に紛れこみ、気のよさそうな人物に声をかける。

「すいませんが、雁国に出る船の乗り方を教えてください」

初老の男は丁寧にその方法を教えてくれる。船の乗り方とその料金を訊いた。雁国までの船賃は道中に貯めた小金でかろうじて足りた。

「船はいつ出ているんですか？」

「五日に一便だね。今だと三日待たなきゃならないよ」

「あの」

出航の時間までを正確に訊く。ここで失敗し港を封鎖されたら全部が無駄になる。必要なことをできるだけ訊いて、陽子は頭を下げた。

「そうですか。ありがとうございました」

いったん阿岸を去って、二日を山の中で過ごした。船は朝に出る。前日にもう一度阿岸の門前に立った。

城門の警戒は厳しい。街で一晩を過ごさなければならないから、どうあっても疑われるわけにはいかない。陽子は布で巻いた剣を見た。いまはきちんと鞘がある。それでも帯刀した旅人は多くなかったから、目立つことは避けられない。

これさえなければ、そのぶん危険が減る。ずいぶんと考えて巧国に捨てていこうかとも思ったが、できたらそれはしたくなかった。陽子が妖魔に追われているのなら、これは絶対に必要なものだ。城門の衛士にしても、何も剣の有無だけで警戒をしているわけではないだろうから、捨てることにそれほどの意味があるとは思えない。

山で草を刈って剣に巻きつけ、荷物と一緒に布で巻いて一見して剣とは分からない包みを作る。それを抱き、夕刻の街道にうずくまってチャンスを待った。

道に座りこんですぐ、男が声をかけてきた。

「坊主、どうした」

中年の男がひとりだった。

「何でもない。ちょっと足が痛んだだけ」
男は胡散くさげな顔をして阿岸の門へ急いで行った。
それを見送り、なおもしゃがみこんで待つ。三度目に声をかけられて、目的の相手を捉らえた。
「どうしたね？」
子供ふたりを連れた夫婦者だった。
「何だか……気分が悪くなって……」
陽子が顔を伏せて言うと、女が身体に手をかける。
「だいじょうぶかい？」
陽子はただ首を振った。ここでこの夫婦の同情を引くことができなかったら、剣をここに捨てて行き、なおかつ危険を冒さなくてはならない。緊張で自然に冷や汗が浮かぶ。
「だいじょうぶかい？　阿岸は目の前だ。あそこまで歩けるかい？」
訊かれて陽子は小さく頷く。男のほうが陽子に肩を差し出した。
「そら、摑まれ。もうちょっとだからな。頑張れよ」
はい、と頷いて片手を男の肩にかける。立ち上がるときに故意に荷物を取り落とした。拾おうとする陽子の手を女が制す。陽子の代わりに拾ってくれてから、子供を振り返った。
「お前たち、もっておあげ。軽いからね」

言われて荷物を渡された兄妹は大真面目に頷いた。
「歩けるかね？　衛士に来てもらおうか」
言われて陽子は首を振る。
「すみません。だいじょうぶです。連れが先に中に入って宿を取っていますから」
「そうか」
男は笑った。
「連れがいるんだな。それはよかった」
陽子は頷き、ごく軽く男の肩に縋って歩く。肩を貸した男には遠慮しているように見えるよう、周囲の人間には軽く甘えているように見えるよう。
門が近づいた。城門の脇に立った数人の衛士が急ぎ足で流れこむ人々を検分している。前を通り過ぎた。視線は感じたが呼び止められなかった。門を過ぎ、少しの間歩いてから、ようやく陽子は息を吐いた。そっと振り返ると、城門は衛士の顔が見分けられないほど離れている。
――よかった。
胸の中で安堵の息をついてから、陽子は男に縋った手を離す。
「ありがとうございました。楽になりました」
「だいじょうぶかい？　宿まで行こうか？」

「いえ。もう、だいじょうぶです。本当に、ありがとうございました」
深く頭を下げた。嘘をついてすみません、という言葉は胸の中にしまっておく。
夫婦は顔を見合わせてから、気をつけて、と言ってくれた。

この街にも難民がひしめいていた。宿の従業員に怪しまれるのが怖くて、城壁の下の空いたところに座って夜を過ごした。
ようやく迎えた朝、陽子は街の通りを歩いて港へ向かう。街の奥が海に向かって開かれていてそこに粗末な桟橋があり、一隻の、陽子の目には小さな、港に停泊したほかの船に比べれば大きな帆船が繋がれていた。
「あれだ……」
胸に迫る思いで桟橋に近づきかけ、陽子は足を止めた。船に乗りこむ旅人の列を検分している衛士の姿があった。
一瞬、目の前が暗くなる。衛士たちは乗客の荷物を開けて中を覗きこんでいた。
できることなら剣は捨てたくない。物陰まで近づいて、それ以上近づくことができない。
陽子はじっと乗客と衛士の姿を見つめた。
——剣を捨てるか。
身を守る手段を失うが、このまま巧国に残るよりいい。思って、ほど遠くないところの水

面を見たが、どうしてもその決心がつかない。これはケイキに繋がるものだ。これを失うことはケイキとの繋がりを半分断つこと——ひいては故国との繋がりを断つことを意味するような気がする。

——どうする。

迷って迷って、それでも決心がつかない。

陽子は港を見わたした。剣を捨てずに雁国へ渡る方法はないか。幾艘かの小さな帆船が停泊している。それを奪っていけないか。

——帆船の操り方なんて知らない。

青海は内海だと聞いた。だとしたら、どれだけの日数がかかるか想像もつかないが、海岸沿いに歩いて雁国へ行けないか。

目眩がするほど迷っているときに、突然高い太鼓の音が響いた。

はっと顔を上げて見わたすと、音の出所は船の甲板で、それが出航の合図だと分かった。乗船する旅人の列もすでに切れている。衛士が所在なげに立っていた。

——間に合わない。

今から走っても衛士に捕まる。荷物を解いて剣を取り出す時間はない。荷物ごと剣を捨てても、手ぶらで船に乗りこんでは怪しまれはしないか。狼狽するからいっそう動けない。棒を呑んだように立ち尽くして、陽子は船が帆を上げるのを見ていた。

船にかかっていた渡り板が外された。ようやく陽子は物陰を飛び出した。船が微かにすべり出して、衛士がその場で見送る。走り出したが近づくことができなかった。

陽子は呆然と船を見送る。白い帆が目に焼きついた。

――今なら海に飛びこんで。

埒もない考えが頭を駆け巡ったが、身動きはできなかった。

――あれに乗れば雁国なのに。

荷物を抱いてただ目を見開いて船が出ていくのを見送ることしかできない。逃がしたものはあまりに大きく、その衝撃から立ち直ることができなかった。

「どうした、乗り遅れたのかい」

胴間声がかかって、陽子ははっと我に返った。

杭を打ち、土を突き固めた岸壁の下に小さな船が見えた。四人ほどの男が甲板で働いている。中のひとりが陽子を見上げていた。

陽子は硬い表情で頷く。次の船は五日あとまでない。この五日が運命を決するだろう。

「跳べるか、坊主。乗りな」

一瞬、意味を把握できずに陽子は船乗りを見た。

「急ぐんだろう。違うのかい」

陽子は頷いた。船員は岸の杭に結びつけたロープの端を握っている。

「そいつを外して飛び降りてきな。フゴウで追いつける。乗せてやるから働けよ」

船員が言うと、ほかの船員が軽く笑った。陽子は力をこめて頷く。足元の杭に巻かれたロープを外し、それを握ったまま甲板に飛び降りた。

船は阿岸の北にある浮濠という島まで荷物を運ぶ貨物船だった。浮濠は巧国の北端、阿岸から一昼夜がかかるそこからは雁国まで寄港する場所はない。

陽子には修学旅行のフェリーを除いて、船に乗った経験がなかった。まして、帆船に乗ったのは生まれて初めての経験である。

わけが分からないまま、船員に言いつけられるたびに物を取ったり片づけたり、コマネズミのように働かされた。沖合いに出て船の操舵が落ち着くと、鍋を磨けだの食事を作れだの次から次へと雑用を言いつけられる。あげくの果てには、年嵩の船員の脚までさすらされたが、事情を問う声に陽子が生返事を返していると、無口な坊主だと笑って、それ以上は詮索しないでおいてくれたのがありがたかった。

船は一昼夜、休みなしに海上を走り続けて翌朝浮濠の港に入った。

港には一足先に着いた雁国行きの船が静かに停泊していた。船員たちはギリギリまで陽子をこき使ったあげく、接岸せずに停泊している旅客船の横に船を着けてくれた。旅客船の船

員に声をかけ、陽子を乗せるよう口を利いてくれる。旅客船から下ろされた棒に縋って船を移ると、小さな包みを投げてよこした。

「饅頭だ。中で喰いな」

陽子を船に乗せてくれた船員がそう言って手を振る。包みを抱いて陽子も手を振った。

「ありがとう」

「お疲れさん。気をつけてな」

賑やかに笑って防舷物――それを下ろしたのは陽子だった――を引き上げる男たちが、陽子が巧国で出会った最後の人たちになった。

4

青海と呼ばれる内海は対岸が見えないほど広く、甲板に立てば潮の匂いがしてごく普通の海と変わりがなかった。浮濠を出発した帆船は明るい青の海を渡り、まっすぐに対岸の烏号を目指す。浮濠から二泊三日の船旅だった。

最初に見えた雁国の岸は、巧国の岸と何ら変わるところがないように見えた。

船が近づくにつれ、差異が分かる。整備された港と、その背後に控えた巨大な街。烏号の

街は、これまで陽子が巧国で見た、どんな街よりも大きかった。その景観は、ビルがないことを除けば、陽子が故国で見た都市の景色といくらも違わない。甲板に集まった旅人たちの何割かが烏号を見るのが初めてなのだろう、陽子と同じように目を見張っているのが印象深かった。

烏号の街は港を一辺に据えてコの字型に城壁を巡らせてあった。街は正面の山に向かってゆるやかに駆け上がり、建物に施された極彩色の装飾が遠目に混じり合って、落ち着いた薔薇色を醸し出している。街の外周や中程には、石造りらしい抜きんでて高い建物が見える。そのひとつは明らかに時計台で、眺めわたす陽子の目を見開かせた。

港自体も、阿岸とは比べものにならないほど整備されていた。

停泊した船の数も、阿岸とは比較にならない。港には活気があふれている。マストが林立し、白や薄い赤茶の帆がたたまれてアクセントをつけた風景は美しかった。辛い国を抜け出して辿り着いた陽子には、これ以上明るい光景はないように見えた。

船を降りると、そこは喧噪のただ中だった。忙しげに働く男たち、どんな仕事をしているのか走りまわる子供たち、物売りの声や人々の声や、そんなもののすべてに浮き足立つようなリズムがある。

船から降りながら、陽子は雑踏を見わたす。人を明るい気分にさせる街だと思う。流れる

人の誰もが生気のある顔をして、多分それは陽子も同様なのだろう。
埠頭に降り立った陽子に声がかけられたのはそのときだった。
「陽子？」
かけられるはずのない声に驚いて振り返って、陽子はそこに灰茶の毛並みを見つけた。細い髭が午の陽射しを受けて銀に光って見えた。
「……楽俊」
ネズミは人込みを掻き分けて陽子の傍にやってきた。戸惑うばかりの陽子の手を小さなピンク色の手が握る。
「よかった、無事に着いたんだな」
「……どうして」
「阿岸から船に乗りゃあ、必ず烏号に着く。待ってたんだ」
「わたしを？」
楽俊は頷いた。動けない陽子の手を引く。
「阿岸でしばらく待ってたんだが、あんまり姿が見えねえんで先に渡ったのかと思ってな。ところがどうやら着いた様子がねえだろ。それで船が着くたんびに覗いてりゃ見つかるんじゃねえかと思ったんだ。それにしても遅いんで、どうにかなっちまったのかと思ったぞ」
ネズミはそう言って陽子を見上げて笑う。

「なぜ、わたしを」
楽俊は背中を丸めて頭を下げた。
「おいらがうかつだった。銭を陽子に渡すか、せめて半分、持たせておきゃあ、よかったんだ。ここまで来るのは大変だったろう。すまなかったな」
「わたしは……楽俊を見捨てて逃げた人間なんだよ？」
「それもおいらの落ち度だ。まったくだらしがねえなぁ」
ネズミはそう言って苦笑する。
「もちろん逃げてよかったんだ。衛士が来て捕まったらどうする。逃げろって言って財布を渡してやれりゃあよかったんだが、すこんと意識を失っちまったもんで」
「……楽俊……」
「陽子はあれからどうなったんだろうと気になってた。無事でよかった」
「わたしは、やむにやまれず見捨てたわけじゃない」
「そうかい？」
「そうだ。誰かと旅をするのが怖かった。誰も信じるもんかと思ってた。こちらには敵しかいないんだと思ってた。だから」
楽俊は髭をそよがせる。
「おいらは今も敵なのかい」

陽子は首を横に振る。
「だったらいい。さあ、行こう」
「わたしは楽俊を裏切ったのに、恨めしいと思わないの」
「陽子を莫迦だとは思うが、別に恨む気にはなれねえなぁ」
「わたしは、止めを刺しに戻ろうかと思った」
手を引いて歩きかけた楽俊の足が止まった。
「おいらはなぁ、陽子」
「……うん」
「実を言うと、おいて行かれたと分かったときにゃ、ちょっとだけガックリきたさ。ちょっとだけな。陽子がおいらを信じてねえのは分かってた。おいらが何かするんじゃねえかって、始終びくびくしてたのもな。でもそのうち分かってもらえるだろうと思ってたんだ。だからおいて行かれたとき、分かってもらえなかったんだなぁと思って、ちょいとだけ気落ちした。けど、分かってもらえたんならいいんだ」
「よくないだろう。もうわたしなんかに、構わなければいいのに」
「そんなのおいらの勝手だ。おいらは陽子に信じてもらいたかった。だから信じてもらえりゃ嬉しいし、信じてもらえなかったら寂しい。それはおいらの問題。おいらを信じるのも信じないのも陽子の勝手だ。おいらを信じて陽子は得をするかもしれねえし、損をするかもし

れねえ。けどそれは陽子の問題だな」
　陽子は俯く。
「楽俊は……すごい……」
「おいおい。どうした、急に」
「わたしはすぐにすねたのに。味方なんかいないんだ、って」
「陽子」
　小さな手が陽子の腕を引っぱった。
「わたしは本当に、いたらない……」
「それは違う」
「違わない」
「違うぞ、陽子。おいらは別に見ず知らずの土地に流されて、追いかけまわされたわけじゃねえ」
　陽子は自分を見上げてくる楽俊の顔を、しばらくじっと眺めた。楽俊は笑う。
「お前はよく頑張ったよ、陽子。いい感じになったな」
「え？」
「船から降りてきたとき、すぐに分かった。何だか目が素通りできねえんだもん」
「――わたしが？」

「うん。――さ、行こう」
「行こうって、どこへ？」
「県正のところだ。海客だって届けを出しておけば、どうやら便宜を図ってくれるらしい。上の人を訪ねるんなら手紙を書いてくれるとよ。陽子がなかなか着かないもんで、あちこちをうろうろしてな。役所にも行ってみたんだ。そうしたらそこでそんなふうに言ってたぜ」
「すごい……」
何だか次々に扉が開いていく気が陽子には、した。

5

「賑やかな街……」
人出は多く、店先では呼び込みをするのでいっそう賑やかだった。
「驚いたろ」
「うん」
「雁国が豊かだって話は聞いていたけどな、実際に鳥号を見るとびっくりするな」
陽子は頷いた。通りは広く街の規模も大きい。周囲に巡らした城壁は、その厚みが十メートルはあって、街の内側では城壁を刳ってそこで商店が営まれている。それはちょうどガー

ド下の風景に似ていた。

建物は木造の三階建て。天井は高く、どの窓にも必ずガラスが入っている。ところどころに煉瓦や石を使った高い大きな建物もあって、たんに中国風では終わらない奇妙な雰囲気を作っていた。

道は石で舗装してある。道の両脇には下水溝も見える。公園があって広場がある。どれも巧国では見かけなかったものばかりだ。

「自分が、すごい田舎者になった気がするな」

陽子が周囲を見まわしながら言うと、楽俊は笑う。

「おいらもそう思った。もっとも、おいらは本当に田舎者なんだけどな」

「城壁が何重にもあるんだね」

「うん？」

陽子は楽俊に町並みのあちこちに見える高い壁を示してみせる。

「――ああ。正確には街の外側の壁を郭壁、内側の壁を城壁ってんだ。巧国じゃ城壁のある街はめったにねえけどな。でも、ありゃあ郭壁だろうなぁ。街を大きくしていった名残じゃねえかな」

「……へぇ」

城壁の下や広場には慶国からの難民が住んでいたが、同じような体裁の小綺麗なテントが

並んでいて、あまり荒んだ印象はない。街から支給されたテントなのだろうと、これも楽俊の言である。

「ここは州都？」

「いんや。郷都だ」

「郷は州のひとつ下？」

「いんや。ふたつ下だな。二十五戸の里から始まって、族、党、県、郷、郡、州と大きくなる。郡は五万戸の組織だ」

「一州は何郡？」

「場所によって違うな」

「ここで郷都ということは、郡都や州都はもっと大きいことになるね」

郡や州は役所の名前で、郡の役所がある街が郡都、郡城という言い方もする。郡の五万戸は行政区分上の話で、別に五万戸がそこに住んでいるわけではないらしい。それでも里よりも族里が、郷都よりも郡都、郡都よりも州都のほうが街の規模が大きいのが普通だった。

「雁国と巧国と、どうしてこんなに違うんだろう」

楽俊は苦笑した。

「主上の格の違いだろうよ」

「格の違い？」

振り返ると楽俊は頷く。
「今の延王は希代の名君と言われているからな。治世はもう五百年だかになるはずだ。やっと五十年かそこらの塙王とはわけが違う」
陽子は瞬いた。
「五……百年？」
「奏国の宗王に次いで長い。治世が長ければ長いほど良い王だということだ。奏国も豊かな国らしいぞ」
「ひとりの王様が……五百年？」
「もちろん、そうだ。王は神だ。人でねえ。天はその王の器量に見合っただけ国を任せる。だからできた王ほど治世が長い」
「へえぇ……」
「王が替わるとどうしても国が乱れるから、良い王を持った国は豊かになるな。特に延王はいろんな改革をやらかした辣腕家だ。名君というなら宗王も名君だが、奏国は安穏としていて、雁国は活気があると言われてる」
「確かに、活気があるね」
「だろう。——ああ、そこが郷だ」
楽俊が示した建物は煉瓦でできた大きな建物だった。壁や軒を飾る意匠こそ中国風だが、

これは洋風建築と呼んでもさしつかえないだろう。内装も外観と同様に洋風と中華風が混沌としていた。

そこを出た陽子が真っ先に言った一言はこうだった。

「すごいな」

楽俊も頷く。

「本当だ。巧国が海客に厳しいのは分かっちゃいたが、雁国とこうも差があるとは思わなかった」

陽子も頷いて役所でもらった木の札をかざしてみる。表には朱印と「貞州白郡首陽郷烏号官許」の墨書、裏には陽子の名前が書かれたそれが身分証明書だった。

郷庁でひとりの役人に引き合わされた陽子は名前を訊かれ、故国での住所や職業などの通り一遍の質問をされ、驚いたことに郵便番号と市外局番を訊かれてこの札を渡された。

「ときに陽子、えぇと、郵便番号と市外局番ってのは何だ？」

楽俊はそれを訊いてきた役人にも同じ質問をしたが、役人にもよく分かっていないようだった。彼は決まりなんです、と答えて一冊の本を開いた。和綴のその本をこっそり横から覗きこむと、木版刷りの文字で数字が羅列してあるのが見えた。役人はそれで確認をしてからこの札をくれたのだ。

「郵便番号っていうのは、手紙を出すときに使う住所につけられた番号。市外局番っていうのは、電話をかけるときに使う番号」
「デンワ？」
「声を遠くに伝えて直接話す道具、かな」
「そんなものが倭にはあるのか。でも、何でそんなことを訊くんだ？」
楽俊は髭をそよがせた。
「倭の人間じゃないと分からないからじゃないかな。間違いなく海客かどうか確認したんだよ。そうでないと、偽海客が増えることになるかもしれない」
陽子は笑って札を示してみせた。
「そりゃ、そうだなぁ」
この札は陽子の身分を証明してくれるが、三年間しか使えない。三年の間に今後の生き方を決めて、正式に戸籍を取得する場所を決めなければならないらしい。
その代わり保護される三年間は、公共の学校や病院は無料で使える。そればかりでなく、こちらでは界身と呼ぶ銀行に持っていけば一定額の生活費まで与えられるらしい。
「すごい国だね」
「全くだ」
巧国がいかに貧しく、雁国がいかに豊かか。それ以外にもこの札は教える。

延王は決して難しい相手ではないだろう。延王に助力を願えと楽俊は言ったが、そんなことが可能なものかどうかは疑問だった。いまでも疑問なことには変わりはないが、かといって頭ごなしに拒絶され、あるいは処罰されるようなことがないことは信じられる気がした。

6

楽俊が言っていたように街には獣が多く混じっていた。雑踏の中に二足で歩く獣が混じっている様子はどこか微笑ましい。中には人間のように服を着ている獣までいて、それでいっそう笑みがもれた。

楽俊は陽子を待って、港で働いていたらしい。入港した船の手入れを手伝う仕事だったようだが、それをさも嬉しそうに語って聞かせた。

初めて得た仕事を、楽俊は陽子に会ったのを機に辞めた。仕事に切りがつくまで烏号にいてもいいんだよ、と言うと、人を待ってる間働きたいと最初からそう言ってあったのだから構わないのだと言う。

船が入った翌日には烏号を出て関弓に向けて出発した。陽子には高額でないとはいえ決して少なくはない額の給付金があったので、余裕のある旅になった。昼間に街道を歩き、夜に

は街に入って宿を取る。雁国の街はどこも大きく、同じ料金の宿でも設備は巧国のそれより数段よかった。夕刻には街に入り、宿を取って夜の街を見物する。特に楽俊は店頭を覗いてまわるのが好きだった。

穏やかな旅になった。もはや陽子を追ってくる者はない。衛士の姿を見るたびに怯える必要はないのだという事実に慣れるのには時間がかかった。夜に街の外へ出ることはなかったのでよく分からないが、人の話を聞くかぎり、夜道を歩いても妖魔と出合うことはほとんどないようだった。

そんな旅の最中、陽子が湯を使う間に散歩に出ていた楽俊が、海客の噂を拾ってきたのは烏号を出て十一日目、関弓までの道のりをようやく三分の一過ぎたころだった。

もう雁国にいるのだから、少しは華やかな恰好をすればいいのに、と楽俊に言われながら、陽子は相変わらず男物の服――袍というらしい――で過ごしている。そのほうが気楽なので、いったん慣れると丈の長い女物の着物を着る気になれなかった。

すると当然のように少年だと思われるので、雁国の宿には風呂があったが入りづらい。共同のサウナのような風呂らしいが、部屋で湯を使って我慢するしかなかった。路銀に余裕があるので宿はちゃんと部屋を取っている。それでも何となくもったいない気がしてひと部屋ですませているので、風呂のたびに部屋から追い出される楽俊には迷惑な話かもしれない。

盥で湯を使って髪を洗った。こちらの世界に紛れこんでいくらも経たないころ、達姐に髪を染めてもらってから、ずいぶんと月日が流れた。髪もそれだけ伸びている。達姐が庭先の草の根で染めてくれたのを、見よう見まねで同じような草を探し、試行錯誤で染めてきたが草の種類だか染め方だかが違うらしく、後から染めた部分は洗う度に色が薄くなってしまう。いまではもとの赤と大差なかったが、そんな奇妙な色の髪にも、もう慣れた。相変わらず鏡を見るのは妙な気がしたが、正視に堪えないというほどでもない。いまさらのようにこちらになじみつつある自分を確認しながら身体を洗って服を着がえた。

そこへ楽俊が戻ってきて、海客の噂を披露したのだった。

「この先の芳陵って郷城に海客がいるらしいぜ」

陽子は一瞬だけ目を上げ、すぐに伏せた。

「……そう」

会いたいとは思わなかった。会いたくないとも思わないが、会って同胞に落胆するのはかえって辛い。

「壁落人、てえ人だそうだ」

「壁、落人？」

「ああ。庠序の先生らしいな」

では、あの老人ではないのだ、と陽子は思った。よく考えてみるまでもなく、あの老人の

はずがないのだけれど、それは少しだけ陽子を安堵させた。
「会いに行くだろう？」
楽俊は疑いのない目で陽子を見る。
「行ったほうがいいんだろうな」
「行くんだろう？」
「そうだね……」

翌日、関弓までの道を逸れて芳陵へ向かい、学校を訪ねた。
県には序学がおかれ、郷には庠学がおかれる。この雁国では、さらに上の上庠を目指す者が進む庠学とは別に、庠序という学校がおかれているらしかった。訪ねる壁という人物はその庠序の教師で、学校の一郭に住んでいる。突然訪ねたりはしないのが礼儀だと、楽俊は言う。前もって手紙を送り、正式の手順を踏んで面会を求めた。
落人からの返答が宿に届いたのはさらにその翌日の朝、返答の手紙を持ってきた使いに連れられて学校へ行く。
芳陵の学校は城壁の中にあって典型的な中国風の建築、広い庭を擁して学校というよりは富裕な家のような佇まいをしていた。
四阿風の小さな建物に導かれて待っていると、そこに姿を現したのが落人だった。

「どうもお待たせしました。わたしが壁です」
年齢はよく分からない。三十から五十の間だろうとは思う。若いようでもあり、年輩のようでもあった。皺のないのっぺりとした顔に柔らかな笑みを浮かべている。あの松山誠三という老人とはずいぶん雰囲気が違う、とそう思った。
「お手紙をくださったのは？」
楽俊が答える。
「おいら……いや、わたしです。お時間をいただきましてありがとうございました」
落人はやんわりと笑った。
「どうぞ、お楽に」
「はあ……」
軽く耳の下を掻いてから、楽俊は陽子を振り返る。
「こいつは、海客なんです」
楽俊の科白に、彼はあっさり反応を返した。
「ああ、なるほど。しかし、彼女は海客には見えませんね」
陽子のほうを見る。
「……そうでしょうか」
彼は微笑った。

「少なくとも日本ではそんな髪の色は見かけなかった」
「あ……」
問うような目の色に、陽子は事情を説明する。どうしてだかは分からないが、こちらに来たらこんなふうになっていたこと。髪の色ばかりでなく、顔や身体つきや声まで変わっているようだということ。聞き終わって落人は、頷いた。
「では、あなたは胎果でしょう」
「わたしが？　胎果？」
陽子は目を見開いた。
「蝕によって、あちらとこちらが交じり合う。人が来て、卵果がゆく」
「よく分かりません」
「蝕に巻きこまれて、人がこちらにやってくる。それとは反対に卵果があちらに流れていくことがあるのです。卵果は胎児のようなものです。あちらで母親の胎内に流れ着く。そうして生まれた者を胎果と言います」
「わたしが……それだと？」
落人は頷いた。
「胎果は本来こちらの生き物です。いま見えているその姿が、あなたが本来天帝から与えられた姿だ」

「でも、あっちにいるときは……」
「その姿で倭に生まれたら大騒ぎになるでしょう。あなたはご両親に似ていたはずだ」
「はい。父方の祖母に似てると言われてました」
「それはいわば、殻のようなものです。あちらに生まれてもさしつかえないよう、胎内でかぶせられた殻のようなもの。胎果はそのように姿が歪むと聞いたことがあります」
それは陽子にとってすぐには納得できない言葉だった。
自分がそもそも異邦人だったのだと言われて、どうしてすんなり納得できるだろう。
ただ、やはり、と思った自分がいたのも確かだった。
自分はあちらの人間ではなかった。だから、あちらに居場所がなかった。——そう思うことはひどく何かを慰めた。慰められると同時に、悲しかった。

7

陽子はしばらくぼんやりと自分と世界について考え、それからふと落人を見た。
「先生も胎果なのですか」
訊くと彼は首を横に振って笑う。
「わたしはたんなる海客です。故郷は静岡ですよ。東大に行きましてね。こっちに来たのは

二十二のときです。安田講堂から出ようとして、机の下をくぐってみたらこちらだった」
「安田……？」
「ああ、ご存じないか。大騒ぎだったが歴史に残るほどではなかったのかな」
「わたしは、ものを知らないので……」
「わたしもです。昭和四十四年一月十七日でした。夜になったばかりだったな。それ以後のことは、何ひとつ知りません」
「……わたしが生まれる前のことです」
落人は苦笑した。
「もうそんなに経ちますか。わたしは長いことこちらにいたな」
「それからずっとこちらに？」
「そうです。着いたのは慶国でした。慶国から雁国を転々として、ここに落ち着いたのが六年前です。ここでは処世……生活科学のようなものを教えています」
笑ってからひとつ首を振った。
「そんな話には意味がない。――何をお聞きになりたいのです？」
陽子はまっすぐにただひとつの問いを発する。
「帰る方法はあるでしょうか」
落人は少し間をおき、声を落とした。

「……人は虚海を越えることができないのです。こちらとあちらには一方通行の道しかない。来るだけです。行くことはできない」

陽子は息をついた。

「……そうですか」

そんなに衝撃は受けなかった。

「お力になれず、申しわけない」

「いいえ。……もうひとつ、不思議に思っていることがあるんですが、お訊きしてもいいですか？」

「何なりと」

「わたしは、言葉が分かるんです」

落人は首をかしげた。

「わたしは、そもそも言葉が違うことに気づいてなかったんです。ずっと日本語だと思っていました。理解できないのは特殊な言葉だけだったんです。それが、巧国で海客のおじいさんに会って、初めてここでは日本語でない言葉が使われているんだと知りました。言葉だって通じるんです。日本語しか喋れないのに。……これはどういうことなのでしょう」

落人は問いかけるように楽俊を見た。楽俊が肯定するように頷くと、少し考えこんだ。

「……あなたは人ではないようですね」

やはり、と陽子は思う。

「わたしはこちらに来たとき、言葉が分からずに苦労しました。たぶん中国語系統の言葉なのだと思いますが、わたしが知っていた初歩的な中国語は通じなかった。何年も筆談しかできなかったんです。かろうじて漢文だと通じたので。その漢文もずいぶん怪しげなもので、最初の一年は本当に辛かったな。ここへ来た誰もがそうです。胎果も例外ではない。わたしは個人的に海客の研究もしているのですが、過去に海客で言葉に難儀しなかった者はいません。あなたは、ただの海客ではないと思います」

陽子はそっと自分の腕を摑む。落人は続けた。

「言葉に不自由しないのは、妖族と神仙だけだと聞いたことがあります。あなたが一度も言葉の問題に気がつかなかったのなら、あなたは人ではない。妖か神仙か、それに類する者なのだと思いますよ」

「妖……にも胎果があるんでしょうか」

落人は頷く。笑みは消えていなかった。

「聞いたことはないが、ありうることです。だとすれば、あなたには解決策が残されている。帰ることができるかもしれない」

陽子は顔を上げる。

「……本当ですか」

「ええ。妖にしろ神仙にしろ、虚海を越えることができるからです。わたしは虚海を越えられない。二度と戻る方法がない。あなたは違います。延王にお目通り願いなさい」
「王にお会いすれば、助けていただけるんでしょうか」
「おそらく。簡単ではないでしょうが、少なくとも努力してみる価値はあります」
「……そうですね」
頷いてから陽子は床に視線を落とした。
「そうか、やっぱりわたしは人じゃなかったのか」
軽く笑いがもれて、楽俊が咎めるような声を出した。
「陽子」
陽子は袖をめくって右手を示す。
「おかしいとは思っていたんです。掌に傷があったはずなんです。こちらに来て妖魔に襲われた傷です。完全に刺し貫かれて、すごく深い傷だったのに、もうほとんど見えない」
楽俊は陽子が軽く掲げた掌を伸び上がるようにして覗きこんでから、髭をそよがせた。それは楽俊が手当てしてくれた傷だった。どんなに深い傷だったか、楽俊が証人になってくれるだろう。
「ほかにもたくさんあったはずなんです。でも、どれももうどこにあったのか分からない。傷自体も妖魔に襲われたにしては軽すぎました。咬みつかれても牙の痕しか残らなかった

り。何だかとても怪我をしにくい体質になったみたいで」
陽子は笑う。自分が人ではないという認識はなぜか笑いを呼び起こした。
「妖だったからなんですね。それがわたしを狙って妖魔が襲ってきていたことと関係があるんでしょうね」
「妖魔が狙う？」
落人は眉を顰める。答えたのは楽俊だった。
「どうやらそのようだったんです」
「そんな、莫迦な」
「おいらもそう思いましたが、聞けば陽子の行くところに必ず妖魔が現れている。おいらもげんに蟲離に襲われたときに居合わせました」
落人は軽く額を押さえた。
「ちかごろ巧国に妖魔が出没しているという噂は聞いていましたが……。それが彼女のせいだと？」
楽俊が憚るように陽子を見たので、陽子は頷いてみせた。楽俊の言葉を継ぐ。
「だと思います。わたしがこちらに来たのも、そもそも蟲離に襲われて逃げてきたからなんです」
「蟲離に襲われて逃げてきた？　あちらから、こちらへ？」

「はい。ケイキという人が……彼もきっと妖魔だったんでしょうけど、彼が身を守るためにはこちらへ来るしかないのだと言って。それでわたしをこちらへ連れてきたんです」
「……彼は今？」
「分かりません。こちらに来てすぐ妖魔に待ち伏せされて、それではぐれてしまったんです。あれきり会えないので、ひょっとしたらもう生きていないのかもしれません」
落人は長いこと額に手を当てて考えこんでいた。
「……ありえない。考えられないことです」
「楽俊にもそう言われました」
「妖魔というのは猛獣と一緒です。群れて人を狩ることはあっても、特定の誰かを狙って行動することは考えられない。ましてやわざわざ虚海を渡って、それからもあなたを狙っているという。そんなことをする生き物ではない。虎がそんなことをしないのと同じです」
「誰かが虎を手懐けて利用することはできるんじゃないでしょうか」
「妖魔に対してそんなことができるはずがない。これは大変なことです、陽子さん」
「……そうなんですか？」
「妖魔の側に、何らかの変化か事情があってあなたを狙ったのだとしても、あるいは誰かが妖魔を操る術を見つけたのだとしても、どちらにしてもこれを放置しておけば最悪、国が滅ぶ」

言って落人は陽子を見る。
「もしもあなたが妖だとすれば、少しは話が簡単なのですがね。妖族どうしの仲間割れというのは聞いたことがないが、妖族は飢えれば共食いさえする生き物です。しかし……」
「陽子はどう見ても妖魔には見えない」
楽俊が言うと、落人も頷く。
「人に化ける妖魔はいるが、こうも完璧に化けられるとも思えない。しかも、本人に妖魔の自覚がないなんて」
「ないわけではありません」
陽子が苦笑すると落人は首を振る。
「いいえ。あなたは違います。妖魔ではない。――ありえません」
言って落人は立ち上がった。
「王にお会いなさい。わたしから役人に言ってもいいが、それよりは直接関弓へ行ったほうが話が早い。まっすぐに玄英宮を訪ねて、今の話をしてごらんなさい。あなたはこの事態の鍵だ。きっと王はお会いくださるでしょう」
陽子もまた立ち上がる。深く頭を下げた。
「ありがとうございました」
「今から出れば夕刻までに次の街へ着けます。荷物は宿に？」

「いえ、ここにあります」
「では城門までお送りしましょう」
落人は城門までの道のりを一緒に歩いて送ってくれた。
「微力ながら、わたしも訴状を書いて動いておきます。何が起こっているのか分かるまでは、あなたも身動きできないかもしれませんが、事が片づけばきっと王が帰してくださるでしょう」
陽子は落人を見る。
「あなたは？」
「え？」
「先生は帰りたいと、王様にお願いしてみないんですか？」
陽子が訊くと落人は苦笑した。
「わたしは王にお会いできるような身分の者ではありません。ごく当たり前の、一介の海客にお会いできるほど王はたやすい相手ではない」
「でも」
「いや……真実願えばお会いできたのかもしれませんが、わたしにはさほどの興味がなかったのです」
「興味がない？」

「わたしは時代に疲れていたので、新天地に来たことが嬉しかった。わたしは故国に帰ることを熱望していない。王にお会いすれば帰してもらうなり、何か解決策が見いだせるかもしれないと分かったときには、こちらに慣れて帰ることなどどうでもよくなっていた」
「わたしは……帰りたい」
陽子は呟く。帰りたい、と言った瞬間、何かがひどく寂しい気がした。
「……無事、王にお会いできるよう、祈っています」
「せめて門まで、日本の話をしましょうか？」
「必要ありません」
落人は笑った。
「そこはわたしが革命に失敗して逃げ出してきた国です」

七章

1

ほとんど小走りに街道を歩いて、門が閉まるぎりぎりの時間に次の街へ転がりこんだ。翌日は開門と同時に街を出る。陽子にはいまひとつ、ことの重大さが理解できなかったが、落人や楽俊が血相を変えるのだからよほどのことだろうと納得していた。

「本当に延王に会えるのかな」

歩きながら訊くと、楽俊は髭をそよがせる。

「さてな。おいらも王にお目通りを願ったことはねえから分からねえ。いきなり王に会おうとしても無理だろうなぁ」

「じゃあ？」

「関弓へ行けば郷も県もあるが——まずはタイホにお目通りを願ってみるかい」

「タイホ？」
楽俊は頷いて前肢の先で宙に文字を書く。
「台輔。宰輔をこうお呼びするんだ。ええと、一種の尊称かな。関弓があるのは靖州、靖州の州侯は台輔だからな」
陽子はじっとその文字が書かれた場所を見つめた。
「……聞いたことがある」
どこかで、タイホという音を聞いた。
「そりゃあ、あるだろうさ」
「違う。たぶん、向こうで」
ずいぶん昔に聞いた音だ。そう考えて、タイホと呼んだ声を思い出した。
「ああ、そうか。ケイキがそう呼ばれていたんだ」
楽俊は真っ黒な目をぱちくりさせる。
「台輔？　ケイキ？」
「うん。わたしをこちらに連れてきた人。この剣をくれて……」
陽子は少し笑った。
「わたしの使用人らしいよ。わたしを主だって言ってたから。そのわりに、態度は横柄だったけど」

「……ちょっと待ちな」
楽俊が慌てたように手を挙げた。尻尾までが陽子を押し留めるように上がる。
「ケイキ、だって？　そいつが台輔と呼ばれていた？」
「だけど。知り合い？」
陽子が訊くと、楽俊はおそろしい勢いで首を横に振る。それから思い悩むように髭を何度か上下させた。
「陽子がケイキの主……」
本当にずいぶん前のことだ。陽子はそう思う。
アルバムをめくるようにさまざまのことが思い出されて、陽子はしばらく押し黙っていた。ふと息をついて我に返ると、楽俊が二、三歩離れたところでじっと陽子を見上げている。ひどく途方に暮れたように見えた。
「どうかした？」
「……した」
首をかしげる陽子を見上げたまま楽俊は呟く。
「ケイキってのが台輔と呼ばれていたんなら、そいつは、ケイ台輔だ……」
「それが？」
呆然としたように見える楽俊の様子が不思議だった。

「ケイキがケイ台輔で、それで何か不都合でも？」
楽俊は道端に腰を下ろして陽子を手招きする。隣に腰を下ろした陽子を、それでもしばらくじっと見上げた。
「ケイキが何か？　あの人はなに？」
「……これは大変なことだ、陽子」
「分からない」
「ゆっくり説明する。落ち着いて聞きな」
ゆるやかに不安が這いのぼってきた。陽子はただ頷いて楽俊を見返す。
「台輔、ってのをもっと早く言ってくれりゃあ、驚くほど事態は簡単にすんだんだ。たぶん陽子はこんなに苦労することはなかった」
「楽俊、よく分からない」
「台輔と呼ばれるのは宰輔だけだ。ましてやそいつの名前はケイキだという。だとしたら、それはケイ台輔のことだ。それしかありえない」
「うん。それで？」
楽俊は髭をそよがせる。小さな前肢を伸ばして陽子の手に触れそうになり、思い留まったようにそれを止めた。
「だったら、そいつは人じゃない。妖でもない。……キリンだ」

「キリン？」
「麒麟。麒麟は最高位の霊獣だ。普段は人の形をしている。台輔は人じゃねえ。必ず麒麟だと決まっている。ケイキは景麒、と書く。名前じゃねえ、号だ。慶東国の麒麟を意味する」
「うん……」
「慶国は青海の東岸、ちょうど雁国と巧国に挟まれる場所にある。気候の穏やかな、いい国だった」
「今は国が乱れている？」
楽俊は頷く。
「去年王が亡くなられて、新王が践祚なさっていない。王は妖魔を治めて怪異を鎮め、災異から国を守る。だから、王がいないと国は乱れる」
「……うん」
「景麒がお前を主と言うなら、お前は景王だ」
「え？」
「慶東国王、景」
陽子はしばらくぽかんとする。あまりに隔たりのある言葉にうまく反応することができなかった。
「お前は……慶国の新しい王だ」

「待って。わたしは……たんなる女子高生だったんだよ？　確かに胎果かもしれないけど、そんな大層な人間じゃない」

「王というのは玉座に就くまではたんなる人だ。王は家系で決まらない。極端を言えば、本人の性格とも外見とも関係がない。ただ、麒麟が選ぶかどうか、それだけなんだ」

「でも……！」

楽俊は首を振った。

「麒麟は王を選ぶ。景麒が選んだのがお前なら、景王はお前だ。麒麟はどんな者にも従わない。麒麟に主と呼ばせることができるのは王だけだ」

「莫迦な……」

「天は王に枝を渡した。三つの実は土地と国と玉座を示す。土地は地籍と戸籍のことだ。国は律と法のことだ。そして玉座は王の徳目である仁道、――すなわち麒麟を意味する」

言いながら、なおも楽俊は途方にくれたように見えた。

「陽子が人とも、たんなる胎果とも違うわけも分かった。……景麒と契約を交わしただろう」

「なに？」

「契約が何だかは、おいらも知らねえ。ただ、王は神で人ではねえ。麒麟と契約を交わした瞬間から、王は人でなくなる」

陽子は記憶を探る。しばらく記憶をつまぐって、許す、と言った一言を思い出した。
「……景麒が何かを言って、許す、と言ったことがある。そうだ、あのとき景麒が妙なことをして、そのあとすごく変な感じが……」
何かが自分の中を駆け抜けていった、あの感じ。その直後に、職員室の窓ガラスが割れて、大勢の教師が怪我をした中で陽子だけが無傷だった。
「妙なこと？」
「わたしの前に膝をついて頭を下げたんだ。……というか、わたしの足に額を当てて……」
「それだな」
楽俊は断言する。
「麒麟は孤高不恭の生き物だ。王以外には従わず、決して王以外の前で膝を折らない」
「でも……」
「詳しいことは、おいらに訊いても分からねえ。延王にお訊きしな。おいらは一介の半獣だ。神の世界のことは分からない」
そう硬い声で言って楽俊は陽子を見上げる。じっと見つめて髭をしおしおとそよがせた。
「陽子は遠い人だったんだな……」
「わたしは」
「本当なら、おいらなんかが口をきける方じゃねえ。陽子、なんて呼び捨てにも、もうでき

ねえなぁ」

言って立ち上がる。

「そうとなれば、一刻も早く延王にお会いするのがいい。関弓へ向かうよりも近くの役所に届け出たほうが早い。事は国の大事だからな」

背を見せたまま言ってから、改めて振り返り、陽子を見上げた。

「遠路のことでお疲れとは存じますが、ここからならばまっすぐ関弓に向かわれるよりも官に保護をお求めになるほうが早い。延王のご裁可があるまで宿にご逗留願わねばなりませんが、ご寛恕ください」

深々と頭を下げた姿が悲しかった。

「わたしは、わたしだ」

「そういうわけには」

「わたしは」

ひどく憤ろしくて声が震えた。

「わたしでしかない。一度だってわたし自身でなかったことなんかなかった。王であるとか、海客であるとか、そんなことはわたし自身には関係ない。わたしが、楽俊とここまで歩いてきたんだ」

楽俊はただ俯いている。丸い背が、今は悲しい。

「どこが違う。何が変わったの。わたしは楽俊を友達なのだと思ってた。友達に豹変(ひょうへん)されるような地位が王座なんだったら、そんなもの、わたしはいらない」

小さな友人の返答はない。

「そういうのは差別っていう。楽俊はわたしを海客だからといって差別しなかった。なのに王だと差別するのか」

「……陽子」

「わたしが遠くなったんじゃない。楽俊の気持ちが、遠ざかったんだ。わたしと楽俊の間にはたかだか二歩の距離しかないじゃないか」

陽子は自分の足元から楽俊の足元までに横たわった、わずかな距離を示した。

楽俊は陽子を見上げる。前肢が所在なげに胸のあたりの毛並みをさまよって、絹糸のような髭がそよいだ。

「楽俊、違う?」

「……おいらには三歩だ」

陽子は微笑(わら)う。

「……これは、失礼」

楽俊の前肢が伸びて陽子の手にちょこんと触れた。

「ごめんな」

「ううん。こっちこそごめん。変なことに巻きこんで」
陽子は追われている。楽俊が王だと言うのなら、本当にそうなのかもしれない。だとしたら追われる理由もそれに何か関係があるのだろう。
楽俊は真っ黒な目で笑った。
「おいらが雁国に来たのは自分のためだ。だから陽子が気にすることはねえ」
「わたしは、楽俊にたくさん迷惑をかけた」
「迷惑じゃねえよ。迷惑だと思ったら最初から蹴いてきてねえ。嫌だと思ったところで家に帰ってるさ」
「……怪我までさせて」
「ややこしかったり危険だったりするのは承知のうえだ。それでも、蹴いてくることが自分のために値打ちがあると思ったから蹴いてきた」
「お人好しなんだ、楽俊は」
「そうかもな。だとしても陽子を見捨てて危険じゃないところにいるより、陽子と一緒に危険なところに行くほうが自分にとって値打ちのあることだと思ったんだ」
「まさか、こんなに危険だと思ってなかったでしょう？」
「だとしたら、おいらの見込みが甘かったんだ。それはおいらのせいで、陽子のせいじゃねえ」

それ以上は言葉を見つけられなかったので陽子はただ頷いた。
小さな手を握って、そうしたら申しわけない気分でいっぱいになった。
海客を匿ったりすれば罪になったりはしないのだろうか。追っ手の妖魔たちが陽子が出たあとになって楽俊の家を襲ったりしてはいないだろうか。家を出るとき彼が母親に言った、「母ちゃんはしっかり者だから、ひとりでもだいじょうぶだな」という言葉は暗に、追っ手やそのほかの困難が彼女を襲う可能性のあることを告げてはいなかっただろうか。
陽子は腕を伸ばす。ふかふかした毛皮を抱きしめた。わわわ、と奇声を上げる楽俊を無視して灰茶の毛皮に顔を埋める。想像どおり、ひどく柔らかい感触がした。
「本当に巻きこんでごめん。ありがとう」
「陽子ぉ」
狼狽したふうの楽俊を放す。
「ごめん。ちょっと……感動した」
「いいけど」
楽俊はきまり悪そうに毛並みを両手で撫でつける。
「お前、もうちょっと慎みを持ったほうがいいぞ」
「え？」
訊くと楽俊は髭を垂れる。

「でなきゃ、もっとこっちのことを勉強しろ。な？」
困ったように言われて、陽子は釈然としないまま頷いた。
「うん」

2

楽俊は次の街に入るなり、宿を取った。その宿で文書をしたためると、本当に役所へ駆けこむ。
提出したその文書が受けつけられれば宿へ何らかの応答があるだろうと、楽俊は言う。陽子には事の重大さが呑みこめないままだった。ましてや自分が王である自覚など逆さに振っても出てこない。だからといって楽俊の行動をあえて妨げる気にもなれず、言われるままにおとなしく構えていた。
「どれくらいかかるの？」
「さてなぁ。とにかく事情を書いて宰輔に謁見を願い出たが、どれくらいで宰輔の手元に届くかなぁ。これぱっかりは経験がねえから分からねえ」
「役人を捕まえて頼みこむわけにはいかないの？」
陽子が訊くと楽俊は笑う。

「そんなことをしても叩き出されるのが落ちだ」
「もしも、無視されたら？」
「呼び出してもらえるまで、根気よく書状を提出に行くんだな」
「本当にそんな面倒なことをやるの？」
「ほかに方法がねえもん」
「けっこう、まどろっこしいんだ」
「相手が偉すぎる。仕方ねえさ」
「ふぅん」
自分がその大事の渦中にいるというのは、何とも奇妙な気分がした。
役所――ここにあるのは党の役所だった――を出ると、楽俊が宿の方向ではなく広場のほうを示した。
「なに？」
「いいものを見せてやるよ。陽子にはきっと珍しいと思う」
役所は街の奥にある広場に面して建っている。広場を横切る楽俊のあとを首をかしげながら蹤いていくと、楽俊はまっすぐ正面にある白い建物に向かった。白い石造りの壁には金と極彩色のレリーフが施してある。屋根瓦の青い釉薬が美しかった。街の名前は容昌、建物の門には「容昌祠」と扁額が掲げられている。これまで通った街にも必ずあった、街の中心を

なす施設だった。
「ここ？」
「ここだ」
「祠、って書いてあるってことは、神様を祀ってあるんだ。——天帝？」
「見れば分かる」
楽俊はニンマリ笑って、門を入る。門には衛士がいて、楽俊が見学したい旨を言うと身分証明書の提示を求められた。
門を入ると狭い庭で、さらにその奥に大きな建物がある。繊細な細工を施した扉を抜けて中に入ると、奥行きのある広間のような部屋だった。
建物の中は静謐な空気に包まれていた。奥行きの深い広間の、正面の壁には大きな窓のように四角い穴があいている。その向こうには中庭が見えた。
窓の四方を覆うようにして祭壇めいたものが設けられている。そこには沢山の花や灯火や、供え物があげられていた。四、五人の男女が窓に向かって熱心に何かを祈っている。
祭壇の中央には祈る対象があるはず。なのに、そこにあるのは窓でしかない。それとも窓から見える景色だろうか。窓からは中庭と、中庭の中央にある一本の木が見える。
「あれは……」
楽俊は軽く祭壇に向かって手を合わせ、すぐに陽子の手を右に引く。祭壇のある正面の壁

の左右に、さらに奥へ向かう広い回廊があった。回廊に入ると白い砂利を敷きつめた中庭が見える。そこにあるものを見て陽子はしばらくぼかんとした。

白い樹だった。陽子が山の中を放浪しているときにたびたび休息を求めた、あの不思議な樹。山で見たものよりも大きいが、高さには変わりがない。枝を広げたその直径が二十メートル程度、枝の最高部が二メートル前後で最低部は地につくほど。白い枝ばかりで葉も花もなく、ところどころにリボンのような細帯が結びつけられていて、そこには黄色の木の実がいくつか生っている。山で見た木の実は小さかったが、ここにある実はひとかかえほどもあった。

「楽俊、これは……」

「これが里木だ」

「里木？　あの、卵果が生るという？」

「そうだ。あの黄色い実の中に子供が入っている」

「へえ……」

陽子は呆然とその樹を見守った。道理で故国では見たことがないはずだ、と思った。

「陽子はああして生ってるときに蝕が起こって倭へ流されたんだな」

「何だか嘘みたい……」

枝も木の実も、金属のような光沢がある。

「子供が欲しい夫婦者は揃って祠へやってくる。供え物をあげて、子供を授けてくれるように願って枝に帯を結ぶんだ。天帝がそれを聞き届けると、帯を結んだ枝に実が生る。実は十月で熟す。親がもぎに行くと、落ちる。もいだ卵果を一晩おいておくと実が割れて子供が生まれるんだ」

「じゃあ、実が勝手にできるわけじゃないんだね。両親が願って初めてできるんだ」

「そうだ。いくら願ってもできない親もいるし、すぐに実を授かる親もいる。天がちゃんと親の資格があるかどうか見定めるんだな」

「わたしもそうなの？　わたしの枝に帯をつけてくれた親がいたんだ」

「そうだ。卵果を失ってさぞかしガッカリしたろうなぁ」

「その人を捜す方法はあるかな」

「どうだろうな。暦を見れば分かるかもしれねえが。陽子の流された時を逆算して、ちょうどそのころに蝕が起こった場所を探して、流された卵果の数を調べて――。それでも、難しいだろうなぁ」

「そうだね」

捜せるものならば、どんな人たちだったのか会ってみたい気がした。自分の誕生を願ってくれた人がこちらにもいたのだというそのことが、ようやく陽子に自分の出自を納得させた。陽子は本当ならばこちらで生まれたはずだったのだ。虚海に抱かれた、この世界のどこ

かで。
「子供は親に似てるのかな」
「子が親に似る？　何でだ？」
本当に不思議そうに訊かれて陽子は苦笑した。人の形をした女の子供がネズミの形をしているくらいだ、子と親の間には何の遺伝的つながりもないのだろう。
「あっちじゃ、親と子は似てるものなんだ」
「へぇ、変わってるなぁ。何か、それって気持ち悪くないか？」
「悪いかな。どうだろう」
「同じ家の中に似た奴がいたら気味が悪くねえのかなぁ」
「考えてみると、そうかもね」
陽子が見ている目の前で、若い男女が中庭に入った。何を相談しているのか、枝を示しては耳打ちをし合い、しばらく迷って選んだ枝に綺麗な細帯を結んだ。
「あの帯は、必ず夫婦が自分たちで模様を刺すんだ。生まれてくる子供のことを考えながら、おめでたい模様を選んで、図案を工夫して刺繍する」
「……そう」
それはひどく温かい風習のように思われた。
「わたし、山の中でもこの樹を見たな……」

楽俊が陽子を振り仰いだ。
「野木か」
「野木って言うのか、あれ。あれにも実が生ってたよ」
「野木にはふたつある。草や木が生るやつと、獣が生るやつと」
陽子は目を丸くして楽俊を振り返った。
「草や木も、動物も木に生るの？」
楽俊は頷く。
「あたりまえだろうが。木に生らずにどうやって生えるんだ」
「……ええと」
子供が木に生るものなら、確かに動物も植物も木に生らなければつじつまが合わないかもしれない。
「家畜は里木になる。飼い主がここへ願いにくるんだ。家畜を願う特別な日と方法があるんだけどな。草や木や山の獣は勝手になる。勝手に熟れて、草や木なら種が、鳥なら雛が、獣なら子供が生まれる」
「種はともかく、雛や子供が勝手に生って危なくないの？　鳥の雛なんて、すぐにほかの動物に食べられちゃいそうだけど」
「親が迎えにいく生き物もあるけどな。それ以外のは自分で生きられるまで木の下で暮ら

す。だから木にはほかの獣は寄ってこねえようになってる。敵どうしの獣は、同じ時期に生まれないし、どんな獰猛な獣どうしでも木の下にいる間は戦いをしねえ。それで、夕方街に入りそびれた連中は山に入って野木を探すんだ。野木の下は安全だからな」

「……なるほど」

「反対に、どんなに危険な獣の子でも、木が見える場所で捕まえたり殺したりしちゃならない。それが絶対の掟だ」

「そうだったのか……。じゃ、鶏の卵から雛が孵ったりしないんだね」

楽俊は何とも嫌な顔をした。

「子供が入ってたら、喰えないじゃないか」

陽子はかすかに笑う。

「……うん。確かにそれはそうかも」

「なぁんか、陽子の話を聞いてると、あっちは気味の悪いところみたいだなぁ」

「そうかもな。——妖魔は？　やっぱり妖魔が生る木があるの？」

「だろう、当然。もっとも妖魔の生る木を見た奴はいねえけどな。どこかに妖魔の巣があるって話だし、きっとそこにあるんだろうなぁ」

「へぇ……」

陽子は頷き、ふとした疑問を感じたが、あまりにはしたない質問なので尋ねるのは思いと

どまった。遊廓があったりするのだから、まあ、そういうことなのだろう。
「どうした？」
「何でもない。連れてきてくれてありがとう。何だか嬉しかった」
陽子が笑うと楽俊も破顔する。
「そいつはよかった」
中庭にいる若い夫婦は、まだ枝に向かって手を合わせていた。

3

楽俊はちゃんとした宿を取るべきだと主張したが、陽子はそんな無駄をすることはないと主張した。
「仮にも景王をこんな安宿に泊められるかい」
「わたしが景王だなんて、楽俊がひとりで言ってることだ。楽俊は友達だからいちおう言い分を信じるけれど、確かにそうだと決まったわけじゃない」
「確かにそうだと決まってら」
「だとしても、関係ない」
「……なあ、陽子」

「わたしが持ってる路銀じゃ、このくらいの宿が分相応だ。役所から呼び出しが来るまでどれだけの日数がかかるか分からないんだし、高い宿に移って日数が延びたら、宿代を払えない」

「お前は景王なんだから、払えないはずがねえだろう。だいいち、王から宿代をとる亭主がいるもんかい」

「だったら、なおさらここでいい。泊まって代金を払わないなんてフェアじゃない。ましてや、最初からそれをあてにするのは嫌だ」

そんな口論のすえに選んだ宿は、格で言うなら下の上だった。四畳程度の小部屋だが、ちゃんと寝台がふたつある。中庭に面して窓があり、窓の下には小さなテーブルまで据えてある。そんな部屋に自分の金で泊まれるのだから、陽子にとってこれ以上贅沢なことはない。

祠から帰るとすでに夕刻で、とりあえず部屋で湯を使い、服を着がえてそれまで着ていたものを洗濯する。毎日湯を使って、着がえられるのだから、本当にこれ以上の贅沢はなかった。

食堂に降りて、そこで待っていた楽俊と食事を摂った。立ったまま屋台で食べるのではなく、ちゃんとした食堂で食べられるのだから、これだってかなりの贅沢だと思う。ゆっくりお茶を飲んで、そろそろ部屋へ戻ろうかと言っていた矢先だった。

——宿の表で悲鳴が聞こえたのは。

尋常でない悲鳴に陽子はとっさに剣を握る。かたときも剣をそばから離さない癖だけは、どうしても身にしみついて落ちなかった。柄を握って表に飛び出すと、通りの向こうがざわめいてる。遠くの角で道を行く人々が慌てふためいて逃げるのが見えた。

「――陽子」

「まさか、ここまで」

何とはなしに妖魔は雁国にまでは追ってこない気がしていた。よく考えてみれば確たる根拠があったわけではない。

そもそも雁国には妖魔が少ない。夜には宿を取り、昼間だけ歩く旅だから妖魔に会わないのは当然だが、陽子の敵は夜に山の中で出合う妖魔ばかりではなかったはずだ。ひょっとしたら今日まで襲撃を受けずにすんだのは、おそろしく好運なことかもしれなかった。

「楽俊は宿の中にいて」

「けど、陽子」

逃げる人々の悲鳴の色に陽子は聞き覚えがある。最大級の悲鳴。それは命を危険に曝された者の上げる声だ。悲鳴に混じって赤ん坊が泣き叫ぶような声が聞こえた。これは必ず妖魔の声だと、陽子はそう学んでいる。

手に提げた剣を抜いて、鞘を楽俊に押しつけた。

「楽俊、退ってて。お願い」

返答はなく、ただ傍にいた楽俊の気配が離れるのを感じた。

どっと人の波が押し寄せて、陽子はその向こうに小山のような黒い影を見た。おそろしく大きな虎に似ている。バフク、と誰かが叫ぶのが聞こえた。

陽子は握った剣の切っ先を下げたまま軽く構える。刀身が左右の店の明かりを受けて煌めいた。駆けてきた人々がぎょっとしたように左右に割れる。

人々を薙ぎ倒しながら駆けてくる巨大な虎。その背後に、大きな牛に似た生き物が見える。

「二頭……」

少し身体が緊張する。久しぶりの感覚に恐怖よりも奇妙な高揚感がある。

路地を逃げ惑う人々が左右の店に転がりこんで、敵との間が空いた。軽く走って勢いをつけ、剣を構える。

最初は虎だった。跳躍するようにして飛びこんでくる巨体をぎりぎりで躱して、切っ先を大きな頭のうしろに突き立てる。抜きざま構えなおして、さらに突っこんでくる青い牛に振り被った。

身体が大きいので止めを刺すのに手間がかかるが、数は少ないので造作はない。余裕をもって二頭を相手にしているところに突然楽俊の声が響いた。

「陽子、キンゲン！」

ふと顔を上げると、鵜大の鳥が群れを作って飛んでくるところだった。十か、二十か、実数は分からない。

「刺されるな、毒がある！」

楽俊に言われて陽子は軽く舌打ちをする。小さく、速く、数がある。やっかいなことになった。

鳥の尾は鋭利な小刀の形をしている。二羽を斬り落とし、虎に止めを刺した。

足を取られないよう、死体の脇を駆けぬけて宿屋を背に足場を探す。二太刀を受けた青牛は狂ったように暴れている。足元の石畳は妖魔の血で滑りやすい。

狭い、明かりの乏しい路地、しかもまだ群れをなしている鳥。左右の店からもれる灯火しか、頼りにするものがない。なまじ明かりがあるから、かえって暗がりの闇が深かった。鳥は気がつけば間近にいる。暗闇から降って湧いてくるように思われた。

頭を突き上げてくる青牛を躱し、さらに一羽の鳥を落としたところで、錆びた金属が軋むような奇声が無数に入り乱れて近づいてくるのが聞こえた。

「まだいるのか……っ」

背筋に汗が浮いた。

鳥に気を取られて即座に止めを刺せなかった青牛は、厄介な相手と化している。路地の入り口から流れこむように猿の群れがやってくるのが見えた。

それに一瞬気を取られた。気がついたときには目の前に鳥の鋭利な尾があった。よけることしかできずに身を躱して、構えを失ったところに次の一羽が来た。その尾はまっすぐ陽子の目を示していた。

これは避けられないという確信があった。

――毒。どの程度の毒だろうか。

――それより目が。

――見えなくては、戦えない。

――腕で庇っても間に合わない。

一瞬にも満たない間の思考。本当に瞬きする間もありはしない。

――だめだ。刺される。

目を閉じようとしたときに、突然向かってきていた鳥が消失した。

誰かが横から鳥を叩き落としたのだった。

それが誰だか確認する間もなかった。

さらに襲ってきた鳥を斬り捨て、突進してきた青牛を躱す。躱したその牛の後頭部を誰かが鮮やかな手つきで突き通した。あまりの鮮やかさに気をとられた陽子に突っこんできた鳥を、その誰かが引き抜いた剣で薙ぎ払う。

陽子よりは頭ひとつはゆうに大きい男だった。

「気を散じるな」
男は言って最後の鳥を無造作に斬り捨てる。
頷くと同時に、襲いかかってきた猿を叩きつけるように斬り捨て、そのうしろから飛び出してきた次の一頭を突き通し、陽子は速やかに戦闘の中に没頭していく。
男の腕は陽子よりも数段確かで、しかも腕力が桁違いだった。群れの数は多かったが、路地が死体で埋まり静まりかえるまで、いくらの時間もかからなかったように思えた。

4

「良い腕をしている」
血糊を払って剣を収めた男が言った。少しも息を乱していない。体軀は大きいが巨漢という印象はなかった。堂々たる偉丈夫とはこういう人間のことを言うのだろう。陽子は肩で息をしながら黙って男を見上げる。男はただ笑った。
「これを訊くのは無礼かもしれんが。——無事か」
黙って頷くと軽く片眉を上げる。
「喋る体力も尽きたか？」
「……どうも、ありがとう、ございました」

「礼を言われる筋合いのことではないな」
「助けていただきましたから」
「妖魔がうろついていては迷惑だ。何もお前を助けようとばかり思ったわけではない」
返答に窮していると、背後から上着を摑まれた。
「――陽子、だいじょうぶか？」
楽俊だった。楽俊は問いながら、足元の死体を気味悪そうに見やった。その楽俊から鞘を受け取り、露を払った剣を収める。
「だいじょうぶ。楽俊こそ怪我はない？」
「おいらはだいじょうぶだ。――その人は？」
さあ、と陽子は肩を竦めてみせた。男はただ笑っただけで、陽子の背後の建物に視線を向ける。
「その宿に泊まっているのか」
「――ええ」
そうか、と呟いてから男は周囲を見わたす。
「人が集まってきた。お前、酒は飲めるか」
「いえ……」
「お前は」

男は楽俊を見る。楽俊は困惑したように髭をそよがせながら頷いた。
「では、付き合え。役人と話をするのは面倒だ」
言うなり背を向けて歩き出す。陽子は楽俊と顔を見合わせ、どちらからともなく頷いてそのあとを追った。

男は集まってくる群衆の間を掻き分けて道を歩いていく。特にあてがある様子ではなかった。ちらちらとあたりに視線を向けながら雑踏を歩いて、気が向いたように一軒の宿に入っていった。華やかな店構えの大きな宿だった。あとを蹤いていく陽子と楽俊には目もくれず、男は宿の入り口をくぐる。それを見ながら、陽子は楽俊を振り返った。
「……どうする？」
「どうするって、ここまで来たもんを」
「そうじゃなくて。わたしは彼と話をしてみたい。楽俊は宿に帰ってる？　ちょっと用心しといたほうがいいかもしれない」
「構うもんか。行こう」
石段を上がってドアを入っていく楽俊のあとを陽子も追う。店の中では男が店員と階段の下で待っていた。陽子たちを認めると、軽く笑って階段を昇っていく。
店員が男を案内したのは、三階の部屋だった。ふた間続きで、中庭に面してベランダがあ

る。部屋は広く、贅沢な造りで、内装も凝っていた。据えられた家具までが贅を凝らしたもので、陽子は若干気後れを隠せない。かつて陽子が足を踏み入れたどんな宿より格段に高級な店だった。

男は店員に酒肴を命じるなりソファ風の椅子に腰を下ろす。こういった格式の店になれている風情があった。無数に点された蠟燭のせいで明るい部屋の中で見ると、着ているものもかなり高価なものであることが分かる。

「あの……」

入り口で立ち尽くす陽子に男は笑う。

「座ってはどうだ？」

「……失礼します」

陽子は楽俊と顔を見合わせ、頷き合って腰を下ろした。どうにも落ち着かない感じだった。男はそんな様子を仄かに笑って見ているばかり、特に何を言うでもない。対応に困って部屋の中を見まわしていると、店員が酒肴を調えて運んできた。

「旦那様、ほかにご用は」

訊いてくる店員を手を振って退らせる。店員が部屋を出るときドアを閉めるよう命じた。

「飲んでみるか？」

問われて陽子は首を横に振る。楽俊もまた首を横に振った。

「あの……」
何を話しかけていいのか分からないなりに、とにかく会話をもちかけようとした陽子の言葉を男が遮った。
「見事な剣を持っているな」
陽子の右手に視線を向けて男が手を差し出す。何となく抗いがたいものを感じて、陽子は剣を手渡した。男は軽く柄を握って引く。難なく抜けた。
そんな、と声を上げた陽子には構わず、男は鞘と剣とを検分する。
「――鞘が死んでいるな」
「鞘が、死んで？」
「妙な幻を見なかったか」
訊かれて陽子は眉を顰めた。
「……なに」
緊張した陽子を笑って、男は刀身を鞘に収める。丁寧な手つきで陽子に剣を差し出した。陽子はそれを受け取って軽く柄を握りしめる。
「どういうことです」
「言葉どおりの意味だが。それがどういう代物だか知らないのか」
「どういう代物、って」

男は勝手に水差しのようなガラス瓶から液体を杯に満たす。少しも構えたところのない動作だった。

「それは水禺刀という。水をして剣を成さしめ、禺をして鞘を成さしめ、よって水禺刀というそうだ。剣としても傑物だが、それ以外の力も持っている。刃に燐光を生じ、水鏡を覗くようにして幻を見せるそうだ。うまく操る術を覚えれば過去未来、千里の彼方のことでも映し出すという。気を抜けば、のべつまくなし幻を見せる。それで鞘をもって封じるとか」

軽く杯を傾けて陽子を見る。

「鞘は変じて禺を現す。禺は人の心の裏を読むが、これもまた気を抜けば主人の心を読んで惑わす。ゆえに剣をもって封じると聞いた。慶国秘蔵の宝重だ」

陽子は思わず腰を浮かせた。

「しかし、この鞘は死んでいるな。鞘の封印をなくして、さぞかし幻が暴れたろう」

「……あなたは」

「党に書状を出したろうが。——用件を聞こう」

「まさか、延台輔でいらっしゃいますか」

男は人の悪い笑みを浮かべた。

「台輔は留守だ。用件ならば俺が聞く」

陽子は落胆を抑えきれない。やはり台輔その人ではないらしい。

「用件なら書状に書きました」
「書いてあったな。景王とか」
「わたしは海客です。こちらのことはよく分かりません。ただ」
陽子は楽俊を見た。
「この楽俊が、わたしを景王だと」
「どうやらそのようだな」
男はあっさり頷いた。
「信じるんですか」
「信じるもなにも。水禺刀は慶国の宝重、そもそも、魔力甚大な妖魔を滅ぼす代わりに封じ、剣と鞘に変じて支配下に押さえこみ、宝重となしたものだ。ゆえにそれは正当な所有者にしか使えん。すなわち、景王でなくてはな。封じこんだのが何代か前の景王だから、そういうことになる」
「――でも」
「互いに互いを封じるゆえ、本来ならば主人にしか抜けぬ。今は鞘が死んでいるので俺にも抜けたが。たとえ抜き身の剣を握ったところで藁一本、斬れん。ましてや幻を引き出すことは断じてできんな」
陽子は男をまっすぐに見る。

「あなた、何者」
——只者ではない。これほど慶国の事情に明るいからには。
「先に名乗る気はないか？」
「中嶋、陽子です」
男は視線を楽俊に向けた。
「では書状を出した張清とはお前か」
はい、と楽俊が慌てて居住まいを正した。
「字は」
「楽俊です」
「——で？　あなたは」
陽子は睨んだが、男を威圧することはできなかった。
「俺は小松尚隆という」
まったく構える様子を見せずに答えた男を、陽子はまじまじと見返した。
「……海客？」
「胎果だな。ショウリュウと音に読む者が多い。多いといってもたかがしれているが」
「……で？」
「で？」

「あなたは何者？　台輔の護衛か何か？」
ああ、と男は笑った。
「称号でいうなら俺は延王だ。――雁州国王、延」

5

陽子はしばらく身動きができなかったし、楽俊にいたっては髭も尻尾も立てたままで硬直してしまった。
まじまじと見つめられたほうは笑う。彼がこの状況を楽しんでいるのは明らかだった。
「……延王？」
「そうだが。台輔が留守で申しわけないが、俺でも役に立つだろうと思って参じた。それとも台輔でなくてはならんか」
いえ、と言ったきり陽子は二の句が継げない。彼は薄く笑って、それから杯の中に指を浸した。
「そもそもの話から始めよう。――一年前、慶国の景女王が崩御なされた。予王と申しあげる。これは知っているか」
「いえ」

陽子が言うと延は頷く。

「舒覚、というのが実際の名だ。これの妹に舒栄という女がいる。これが何を思ったか、勝手に景王を名乗った」

「勝手に……？」

「王には麒麟がいる。王は麒麟が選ぶ。聞いたか？」

「はい」

「予王は麒麟を残した。これが景麒だ。景麒のことは？」

「一度、会いました。彼がわたしをこちらへ連れてきたんです」

延は再び頷く。

「予王がみまかり、慶国の玉座は空になった。すぐに景麒は王の選定に入った。慶国から景王践祚の報が入ったのは予王が崩御なされて二月のことだ。……ところがこれがギオウだとしか思えぬ」

「ギオウ」

頷いて、延は酒に浸した指でテーブルの上に「偽王」と書く。

「王は麒麟が選ぶものだ。麒麟の選定なしに王を名乗れば偽王と呼ばれる。王の践祚にはそれに際して様々な祥瑞がある。ところが、舒栄にはそれがない。それどころか、妖魔はうろつく、蝗害は起こる、どう考えても王だとは思えぬ」

「よく……」

分からない、と訊きかけた陽子を延は手を挙げて留める。

「これは偽王だろうということになった。調べてみれば景王を名乗ったのは予王の妹で舒栄という女。予王の妹とはいえ、ただの女だ。王宮には入れず、従って国を動かすこともできぬ。大事はあるまいと思ったのだがな」

よく把握はできなかったが、とにかく陽子は耳を澄ませていた。

「ところがこれが、州侯の城に陣を構え、そこから景王即位の報を流させた。国民には真偽を判定する方法がない。言われれば疑う理由があるまいというわけで、あっさり信じた。そうしておいて、諸侯が共謀し、城を封鎖して王たる自分を中に入れぬと言い出した。国民は信じて諸侯を責める。舒栄があえて立って奸臣と戦うと宣じ、新たに官吏を募り、兵を募ると志願者が殺到した」

言って延は少し渋い表情をする。

「もともと予王の即位までが長く、予王の在位は短かった。国は混乱から立ち直ることができぬまま、諸侯に対する百姓の恨みが深い。九州のうち、すでに二州が偽王の勢力圏、さらに三州が偽王軍によって落とされた」

「反論する人はいなかったんですか？」

「いたな。だが、麒麟がおらぬと言えば、景麒は諸侯が隠したと言い張る。そのうち、本当

に景麒を差し出したから堪らない。敵中に捕らわれた景麒を助け出したのだと言って、獣形の麒麟を出されては疑うほうが難しい。これで残った四州のうち、半数の二州が偽王側に寝返った」

「景麒を差し出した……。では、景麒は」

「捕らわれたようだな」

陽子を捜しにこれなかったはずだ。最悪の事態ではないが、最悪に近い事態が起こっていたのだと分かった。

「では、その舒栄って女が陽子に死客を送ってるんですね」

楽俊が言うと、

「それが、そうもいかんのだ。妖魔が人を襲うという。これはよくあることだ。しかし特定の誰かを追いまわして襲うなどということはありえぬ。シレイならば別だがな」

「シレイ？」

「王は宝重の呪力を使い、麒麟は使令を遣かう。妖魔を使って誰かを襲わせることができる者がいるとしたら、それは麒麟でしかありえんのだ」

では景麒のまわりにいた妖魔は景麒の使令なのだ、と陽子はただ納得したが、楽俊は明らかに狼狽した。

「まさか！」

延は重い仕草で頷く。
「ありえぬことだが、ほかに考えられん。景王を襲ったのは麒麟の使令、使令によって召集された山野の妖魔だろう」
「そんな……。じゃあ」
「よくよく考えれば、舒栄が軍を維持できるほどの手づるや金を持っているはずがない。背後で誰かが大量の軍資金を流していると考えるべきだろう。そこへ使令が出てきたとなれば、裏にいるのはどこかの王」
陽子は延と楽俊を見比べる。
「……どういう？」
これには延が答えた。
「麒麟がどういう生き物だか知っているか」
「霊獣で、王を選ぶ……」
「そのとおりだ。麒麟は妖であって妖ではない。むしろ神に近い。本性は獣だが、常には人の形をしている。性向は仁で慈愛の深い生き物だ。孤高不恭の者だが、争いを厭う。特に血を恐れて、血の穢れによって病むことさえある。決して剣を持って戦うことはできぬゆえに、身を守るのには使令を遣かう。使令は妖魔だが、麒麟と契約を交わして僕としたものをいう。どう転んでも自らの意志で人を襲わせることのできる生き物ではない。それは麒麟の

本性に悖る」

「それなのに？」

「それなのに、だ。王は麒麟の主人だ。麒麟は決して王には背かぬ。麒麟は断じて人に害意を抱くことのできぬ生き物だが、王が命じれば話は異なる。使令がお前を襲ったからには、王が麒麟にそれを命じたからに他ならぬ。それ以外はおよそありえん」

「その……舒栄という人が麒麟を飼っているということは？」

「ないな。麒麟は一国に一と決まっている。王を主人に持っているか、王を捜しているか、それ以外はない」

では、本当にどこかの国の王が陽子の命を狙っていたのだ。

思って陽子は思い出した。

山道で会った、あの女――。

妖魔の死を悼んでいるように見えた。それはあの妖魔が彼女の使令だったからではなかったか。オウムに陽子を殺せと命じられて、泣きながらそれでも逆らえずに刀を振った。もしもあのオウムが王であり、あの女が麒麟だとしたら、全てのつじつまが合いはしないか。

「でも、どこの」

――いったいどの国の王が。

延はあらぬ方向を見た。

「じきに答えが出る」
「でも」
「景王が我々の手の内にある限り、もはや一指も触れさせぬ。問題は景麒だが、仮にも麒麟だ、そうたやすく殺されはすまい。だとしたら、そのうち景王暗殺を命じた王は明らかになるだろうよ。天が見過ごすはずがないからな」
「よく、分かりません」
「放っておけばいい。国が傾くゆえ、誰が命じたのか分かる」
ただ、と延は言って太く笑った。
「慶国に景麒が捕らわれている。あれだけは何としても救い出さねばならん。そのためにも御身を守るためにも、景王には安全な場所に来てもらう必要がある。出発できるか」
「今すぐ、ですか」
「可能ならばすぐに。宿に荷物があるなら、取りに戻る暇ぐらいはある。俺の住処まで来てもらいたい」
陽子は楽俊を見る。楽俊は頷いた。
「行ったほうがいい、陽子。それが何より安全だからな」
「でも」
「おいらのことは気にするな。行け」

楽俊の言葉に延は声を上げて笑った。
「客人がひとり増えたからといって困りはせんぞ。何しろ古いが、部屋だけは腐るほどあるからな」
「と、とんでもない」
「不調法者揃いだが、それを気にせぬというなら来るがいい。景王もそのほうが気安かろう」
住処とは関弓にある玄英宮のことだろう。それをどこかの古屋のように言う延に内心呆れながら、陽子は楽俊を見る。
「行こう。残していくのは何だか不安だ」
楽俊はぎこちなく頷いた。

6

延は街の外れに行くと、高く指笛を鳴らした。
関弓までは歩いてあと一月はかかる。そうして、夜には街の出入りができない。いったいどうやって街を出、関弓に行くつもりなのだろうかと陽子が考えていると、指笛に応えたように隔壁の上に影が現れた。淡く輝いているように見える虎が二頭、毛並みは黒い縞に光線

の加減によって色の変わる白、真珠に例えるほど淡くなく、油膜に例えるほど濃くもない。ブラック・オパールのような目が印象的で、素晴らしく尾が長かった。

そもそも最初に虚海を渡った夜のように、その虎に騎乗し、半月の浮かんだ夜空を駆けて陽子たちは関弓へ向かった。

ひどく懐かしかった。振り返ってみれば、どれほど長い時間が流れたことだろう。ヒョウキと呼ばれた景麒の使令に騎乗して海に向かったのはまだ寒がったころ。あのころの陽子は何ひとつ分かっていなかった。景麒のことも、自分のことも。

そしていま、世界は夏。夜気に熱気がこもって、虎の周囲に風がないのが寂しい。

宙を駆ける獣の足元には、虚海を越えた夜と同じように夜景が広がっている。雁国の夜は明るい。里が廬が、小さな星団を作って虚海のようだった。

「陽子、あれが関弓だ」

背中にしがみついた楽俊が、小さな前肢で前方を指さしたのは騎乗して二時間もしたころだったろうか。

楽俊が示した方向には何も見えなかった。街の明かりも見えず、ただ深い闇だけがある。どこに、と問い返そうとして、陽子は自分が見るべきものを誤解していたのを悟った。楽俊

は闇の中の何かを示したのではなく、闇そのものを示したのだ。

「……嘘だ……」

半月の光を浴びて下界は深い海の色、森の輪郭がわずかに白い。まるで波のようだった。

そして、点在する無数の灯火。——その夜景を黒々と切り取った深い穴。

いや。穴ではない。半月を背後にいただいて、それは黒いシルエットだった。夜景を切り取り、穴のように見えるが穴ではない。むしろそれは隆起で——。

「……山」

——こんな山があるものか。

里が点にしか見えないほどの高空にいて、それはなお仰向くほどに高い。

——天に届く山、とかつて楽俊は言った。

だがしかし、本当に天に届くほどの山があろうとは。

一瞬、自分がおそろしく小さな生き物になった気がした。

屹立し、天地を貫く柱のようなその山。ゆるやかな山地の間から空に向かって伸びた姿は、長さの違う筆を束ねて立てたようにも見える。細く険しい山頂はほとんどが雲をまとわりつかせていて、その形状を隠していた。

その影になった岩肌が。——まるで巨大な壁のようだった。

「……あれが、関弓？　あの山が？」

足元と山までを見比べると、まだ信じられないほどの距離があるのが分かる。なのに、あの巨大さ。

「そうだ。あれが関弓山。王宮のある山はどこの国でもあんなふうだ。あの山の頂上に玄英宮がある」

わずかに月光を浴びた崖の線が白い。それは垂直に近いほど鋭かった。城の姿を探したが、頂は雲に隠れて定かではない。麓にひとつ、ふたつ光が見えた。

「あの光が関弓の街だ」

首都ならば烏号より大きな街だろう。それが光ひとつにしか見えないほど遠い。

しばらく陽子は呆然としていた。

こんなに近く見えるのに空飛ぶ獣の足をもってしても、関弓は逃げているように近くならない。やがて細い山が近づいてきて、首を動かさなくては山全体を視野におさめることができなくなり、ついには完全に上を向いても頂上を見ることができなくなって、それでようやく関弓の街の輪郭が見えた。

関弓は途方もなく高い山の麓に盛り上がった、なだらかな丘陵地帯に弧を描いて広がっていた。これだけ巨大な山が背後にひかえていれば、夜はおそろしく長いだろう。

そう楽俊に訊くと、そうだと言う。

「巧国の傲霜に行ったことがあるが、そんな感じだったなぁ。傲霜は山の東にあるから、黄

昏がうんと長いんだ」

「……そうか」

上空から見れば、関弓は巨大な街だった。足元一面に光の海が広がる。そして目の前には見わたすかぎりの崖。垂直に細い山が幾重にも重なってできた岩肌は、樹木の一本も見えずただ夜目にも白い。

先を行く延が山の高いところ、断崖に張り出した岩場に舞い降りた。

岩場の広さは小さな体育館ほどの面積で、ちょうど大きな岩のかたまりを平坦に削ったように見えた。延に続いて陽子たちを乗せた虎が岩場に降り立つ。先に降り立った延が振り返って笑顔を見せた。

「どうやら落ちずに蹤いてきたな」

揺れもしなければ風を切る感触もない獣の背からどうやれば落ちるのだろうと思っていると、思考を読んだように延は笑う。

「高さに目を回す者やら、心地好すぎてうたた寝をする者やらいるからな」

なるほど、と陽子は苦笑する。

岩場の白い石は平坦に削られ、滑り止めだろうか、深く細かい模様が彫りこまれている。岩場の周囲に手摺りはなく、ちょっと端に寄ってみる気にはなれない。地上からここまでど

れほどの高さがあるのか、陽子には想像もつかない。

岩場に続く崖には大きな両開きの扉があった。延は踵を返してその扉に向かう。そこへ辿り着く前に扉が内側へ開いた。

身の丈の倍はある一枚の白い石でできているらしい、どう見ても重そうに見える扉を開いたのはふたりの兵士だった。本当に兵士なのかどうかは知らない。厚い革の胸当てを身に着けているので、兵士だろうかと思っただけの話だ。

彼らに頷いてから、延は陽子たちを振り返る。自らも中に踏みこみながら、入ってくるよう視線で促した。陽子と楽俊が扉をくぐると、ふたりの兵士は軽く頭を下げ、そのまま外に出ていく。岩場の上に休んでいる二頭の虎に駆け寄った。ひょっとしたら馬のようにこれから水と餌をもらって、ブラシでもかけてもらうのかもしれない。

「――どうした？　こちらだ」

延は陽子を見る。慌てて延のあとを追うと、中は広い廊下だった。

上にシャンデリアのような灯火があって昼のように明るい。楽俊が驚いたように髭をそよがせて天井を見上げていたから、やはり珍しいものなのだろう。

長くはない廊下を抜けるとちょっとした広間で、そこからトンネルのようなアーチの中を白い石の階段が上へ昇っていた。楽俊がその階段を見上げてしおしおと髭をそよがせる。先に足をかけた延が振り返った。

「どうした。遠慮ならいらんぞ」
「いえ」
楽俊の顔は少しひきつっている。その気分が陽子にはよく分かった。
「なあ、陽子」
声をひそめて楽俊が言ってくる。
「やっぱりこれを昇るのかな」
「じゃないかな」
答えながら、陽子も少々ウンザリしている。降り立った岩場は山のずいぶんと高いところにあったが、それでもなお頂上までは超高層ビルに匹敵する高さを残している。その距離を昇るのだとしたら、これはたいへんな苦行かもしれない。
それでも不満の言いようがなく、陽子は黙って階段に足をかける。何となく楽俊の手を引いた。段差は低いが階段自体は長い。延のあとに蹤いてそれを昇り、昇りきったところにある大きな踊り場で九十度方向を変え、もう一度階段を昇ると小さな広間に出た。広間の奥には見事な彫刻を施した木製の扉がある。
厚い木に鮮やかな浮き彫りを施したその扉を出たとたん、ゆるやかな風が吹きつけてきた。濃く潮の匂いがした。
「……あ」

思わず陽子は声を上げる。扉の前は広いテラス、そうしてそこが、もはや雲の上だった。どんな不思議かは知らないが、たったあれだけの階段を昇っただけで、すでにあの高さを上昇していたらしい。白い石で床を張り、同じく白い石で手摺りを設けたテラスの下に白く雲の波が打ち寄せている。

——いや、本当に白い波が打ち寄せていて陽子は目を見開いた。

「楽俊、海がある……！」

思わず声を上げて手摺りに駆け寄った。崖に張り出したテラスの足元に波が高く打ち寄せている。見わたせばここは海の上、潮の匂いがする道理だった。

「あるさ、空の上だもん」

楽俊に言われて陽子は振り返る。

「空の上に海があるのか？」

「海がなかったら雲海とは言わねえだろ？」

海上には濃く潮の匂いを含んだ風が吹き渡っている。見わたすかぎりの暗い海、テラスの下まで打ち寄せる波。手摺りから乗り出すようにして覗きこんだ海の底には光が見える。虚海のようだが、その光がはるか下方にある関弓の明かりだと分かった。

「不思議だ……。どうして水が落ちないんだろう」

「雲海の水が落ちたらみんな困るじゃないか」

くつくつと笑ったのは延だった。
「気に入ったのなら、景王には露台のある部屋を用意させてもらおう」
「あの……」
何と呼んでいいのか分からずに陽子はそう声をかけた。
「その景王、っていうのやめていただけませんか」
延は面白そうに片眉を上げた。
「なぜ？」
「何となく……。他人ごとみたいで」
言うと延は軽く笑った。何かを言いかけてふと空を見上げる。視線を追っていくと白く細い光が流れるのが見えた。
「台輔が戻ったな。——では、陽子」
言って延は背を向ける。露台の左奥に上へ昇る短い石段がある。先を行く男に倣って足をかけ、そこで陽子は呆然と前方を見上げた。
中央に険しい山を配した島のような地形の、月光を受けて白い断崖に、無数の建物が配されていた。水墨画に見るような山には奇岩が続き、岩肌には樹木が枝を張り出し、細い滝が幾つも見える。
その山の崖に、あるものは塔を形作り、あるものは楼閣をなし、それらの建物を縦横に回

廊がつないでひとつの建築物を造っている。

まるで山を取りこんだ巨大な城のような、それが雁国の中心、延王の居宮である玄英宮だった。

7

建物に入って男女の召し使いらしい人間に取り囲まれた陽子たちは、延と引き離されて奥まった部屋に押しこまれてしまった。

「あの……」

「ええと」

狼狽する陽子と楽俊に女官が無感動な顔を向ける。

「こちらで、お召し替えを。今お湯をお持ちします」

どうやら汚い恰好で宮内をうろつくなということらしい。困惑しながらも頷いて、運ばれた桶で身体を洗う。楽俊と交互に衝立の陰で湯を使って次の部屋に行くと、広い部屋の広いテーブルの上に新しい着物が用意されていた。

「これを着るのか……？」

嫌な顔をして摘み上げた華やかな織地の着物を楽俊が検分する。

「こりゃ男物だなぁ。陽子が男だと思ったのか、女だと分かってて延王が命じたんなら洒落た方だな」

「楽俊の分もあるみたいだな」

陽子が言うと楽俊は肩を落とす。

「いまさらとも思うけど、貴人に会うのにこのナリじゃ失礼だろうなぁ」

そりゃあ、いわば裸だもんね、と思いながら陽子は着がえを渡す。街道で出会った獣の姿が目に甦った。服を着た獣の数は少なくなかった。楽俊は嫌そうだが、想像すると微笑ましい。

肩を落とし、尻尾を引きずって衝立の陰に入った楽俊を見送って、陽子も用意されたものに着がえた。寛い柔らかな薄布のズボン、薄いブラウスと同じく薄い着物、鮮やかな模様を織りこんだ長い上着で一揃いだった。

素材は全部絹だろう、なめらかな感触が粗末な服に慣れた肌にはくすぐったい。刺繍のある帯を結んだところに扉を開けて老人が姿を現した。

「お召し替えはおすみですか」

「わたしは。……連れは」

もう少し、と言いかけたところに衝立が動いた。

「だいじょうぶだ。すんだ」

答えた声が低い。陽子はぽかんとする。衝立の陰から現れた姿を見て、しばらく声が出なかった。

「どうした」

「……楽俊……だよね」

「そうだ」

頷いてから、彼は破顔する。

「ああ、この恰好は初めてか。おいらは間違いなく楽俊だ」

陽子は頭を抱えた。以前楽俊を抱きしめたとき、慎みがないと言われたわけがようやく分かった。

「ここが、常識を越えたところだって忘れてた」

「そのようだな」

彼は笑った。歳のころなら二十と少しの、立派な人間の若者だった。中背でどちらかというと痩せぎすだが、いかにも健康そうな身体つきの男。「正丁」とはそういえば、成年男子の意味だった。

「ただの獣なら喋るかい。半獣だと言っただろうが」

「……確かに」

顔から火が出るとはこのことだ。半獣だ、正丁だと何度も言われたにもかかわらず、抱き

ついただけでなく、宿だって同室だった。はるか昔に寝間着に着がえさせてもらったこともあったような気がする。

「陽子はしっかりしてるようで、ウカツだなぁ」

「自分でもそう思う。……どうしていつも人間形でいないわけ」

思わず恨みをこめて言うと、楽俊は溜息をつく。

「こっちよりもあっちのほうが楽なんだよ」

言って楽俊は朱の着物を着た肩を落とした。

「着飾っているようで、肩が凝る。おまけに本当に着飾らされた日にゃ……」

ぶつぶつ言う声が本当に情けなさそうで、陽子は軽く笑った。

老人に連れられて長い廊下を歩かされ、ようやく陽子たちは広い部屋に案内された。潮の匂いがするのはフランス窓が開いているからだ。海に面したテラスにいた延が振り返った。彼もまた着るものを改めていたが、陽子たちが着ている袍と大差がない。陽子たちの着物が良すぎるということはないだろうから、延の服装が粗末なのだろう。よほど気取らない性分なのだと思われた。

延は部屋に入ってきながら苦笑する。

「着がえがすんだか。うちの家人は格式張るのが好きでな。鬱陶しいがおとなしく言うこと

をきかないとやかましい。すまないな」

延が、くだけ過ぎているのではないかと思ったが、口調が微笑ましかったので陽子は笑うに留めた。

「楽俊、そんなもの脱いでも構わんぞ」

そう言われて楽俊である若者は、ひきつった笑いを浮かべる。

「お気遣いなく。――台輔（たいほ）は」

「もう来るだろう」

言ったところに扉が開いた。風が通って潮の匂いが部屋に満ちる。

「戻ったな」

扉の内側には必ず衝立がある。その陰から姿を現したのは金の髪をした十二、三の少年だった。

「どうだった」

「さすがに王宮へまでは登れてねえみたい。……珍しいな、客か」

「俺の客ではない。お前の客だ」

「おれの？　知らねえ顔だな」

少年は顔を蹙（しか）めて陽子たちに目を向ける。

「そんで？　あんた、何者だ」

「その品のない言葉づかいを改めよ」
「よけいなお世話って言葉を知ってるか？」
「お前が後悔するのだぞ」
「へぇ。あんたもついに嫁さんをもらう気になったか」
「冗談ではない」
「……んじゃ、あんたのかーちゃんか？」
「お前は俺の妻か母でなければ礼儀を思い出せんのか」
溜息混じりに言ってから、延は呆気にとられている陽子を振り返る。
「礼儀を知らぬ奴で申しわけない。これが延麒だ。六太、こちらは景女王でいらっしゃる」
「げ」
一声言うなりその場を飛び退いて、少年は陽子を見上げる。我慢がならずに陽子は噴き出した。声を上げて笑ったのは虚海を渡ってから初めてのことかもしれない。
「早く言えよ。ったく、根性が悪いな」
「お前に言われたくはないな。お隣が楽俊殿」
軽く笑ってから延は表情を引きしめる。
「で、慶国の様子は」
問われて少年のほうも顔を引きしめた。

「キ州がさらに落ちたようだな」
紀州、と楽俊が文字を書いてくれた。勝手に翻訳がなされるので、筆談はどうしてもやめられない。しゃべるぶんには翻訳に任せて問題がないが、それでは文字を読むことができなくなる。
「これで残ったのは北の麦州だけだ。舒栄は相変わらず征州にいる。軍は膨らんで、あれじゃ王の軍は太刀打ちできない」
王師、と楽俊は書いた。「王の軍」のことだろう。
「すでに偽王軍が麦州に向かってる。麦侯の軍が三千、とうてい対抗できないだろうな。たぶん時間の問題だ」
言ってテーブルの上に座り、そこにあった木の実を噛る。
「――で、どこで景王を見つけてきた」
延がかいつまんで事情を話す。延麒は黙って耳を傾け、渋い顔をした。
「痴れ者が。麒麟に人を襲わせたな」
「黒幕のほうは放っておいても問題がない。ただ、景麒だけは返してもらわねばならぬ」
延麒がそれに頷いた。
「急いだほうがいいぜ。景王がこっちにいることを悟られたら殺されかねない」
「あの」

と、陽子は口を挟んだ。

「わたしにはよく理解できません」

延はただ片眉を上げてみせた。

「わたしは何ひとつ分からないまま、こちらへ連れてこられました。延王がわたしを景王だというのならそうなんだろうし、どこかの王がわたしを狙っているのだというのなら、そうなんでしょう。ただ、わたしは景王になんかなりたいとは思いません。景王だと認めてほしくて連絡を取ったわけじゃないんです。妖魔に追われるのが嫌で、巧国の兵士に追われるのが嫌で、倭に帰る方法を知りたくて延王に助力をお願いしたかっただけなんです」

延と延麒は顔を見合わせた。少しの間、沈黙が降りる。口を開いたのは延だった。

「陽子、かけなさい」

「わたしは」

「座りなさい。そなたには長い話を聞いてもらわなくてはならない」

8

何から話したらよいのか、と言って延はしばらくあらぬほうを眺めた。

「人がいて、国がある。国を束ねる者が必要になる。そうだな？」

「はい」
「こちらでは王をおく。国主は政を行なう。政を行なうのは国主だから、その施政が必ずしも民の望みにかなっているとは限らない。むしろ権は人を傲らせる。往々にして国主とは民を虐げる者だ。国主ばかりが悪いとは言わん。国主は権を握ったときから民ではない。民の気持ちは分からなくなる」
「延王は希代の名君だと聞きました」
延は苦笑した。
「そんなことが言いたいのではない。急くな。――国主は民を虐げる。では、民はどうすれば救われるのか？」
「そのひとつの形がミンシュシュギとかいうやつだろう」
言ったのは延麒だった。
「民が自分たちの都合で王を選び、都合に合わなくなればやめさせる」
「そうですね」
延が再び語る。
「ここではもっと別の方法が行なわれている。国主が民を虐げるというのなら、民を虐げない者を国主にすえればよい。そこであるのが麒麟だ」
「麒麟が民を代弁して王を選ぶ……？」

「そう考えても誤りではない。ここには天意というものがある。天帝がいずこにかおわし、地を造り国を造り世の理を定めたという。麒麟は天意によって王を選ぶ。天命の下った、それが王だ」

「天命……」

「王は国を守り、百姓を救って安寧をもたらすべきだという。それを可能にする者を麒麟が選ぶ。選ばれたそれが玉座に就く。天が麒麟を介して名君を玉座にすえるというわけだ。俺を名君などと呼ぶ輩もいるが、それは嘘だ。王は全て名君たる資質を持っている」

陽子には相づちの打ちようがなかった。それで黙っている。

「しかしながら、倭にも漢にも名君などというものはいくらでもいた。それでも総じて国が安らがなかったのはなぜだと思う？」

陽子は少し首を傾ける。

「名君と言われた人でも、何かのはずみで道を踏み外すことがあります。たとえそれがなくても、どんな名君でもいつかは死ぬ。死んだあとを継ぐ者が名君だとは限らない。——だからじゃないでしょうか」

「そのとおりだ。では、名君が死なぬよう、これを神に据えればいい。そうすれば問題の半分が解決する。たとえ死んでも、子に玉座を継がせず、必ず麒麟に選ばせればよい。道を踏み外すことがないよう監視すればいい。——違うか」

「それは……そうですが」

何に対してか、延はひとつ頷く。

「俺はいま、この雁州国を任されている。俺を王に選んだのは延麒だ。誰がどのように望もうと、どれほど努力しようと、麒麟に選ばれなければ王にはなれん。麒麟は王を直感で選ぶ。男が女を選ぶのに似ている。あるいは、女が男を選ぶのにな。俺は胎果だ。こちらで育った人間ではない。そんな俺やお前のように王の何たるかを知らずとも、麒麟に選ばれればそれが王だ。天命は下った。これを変えることはできん」

「わたしも……？　帰るわけにはいかないんですか？」

「帰りたくば、帰るがいい。それでもお前が慶東国の王だ。それだけは否定することはできぬ」

陽子はただ俯いた。

「麒麟は自らが選んだ王と盟約を交わす。決してそばを離れず、命に背かぬという誓約だ。王が玉座に就いたあとは、王のそばに控えて宰相を務める」

「延麒も？　宰相なの？」

陽子がテーブルの上に胡座をかいている延麒を見ると、延は微かに笑った。

「こう見えてもな。しかも延麒を見たあとでは得心がいかぬだろうが、麒麟は本来慈悲の生き物だ。麒麟は正義と慈悲とでできている」

延麒は顔を蹙めた。それに主人は苦笑して、
「台輔の進言することは、正義と慈悲の言葉ばかりだ。だが、正義と慈悲だけでは国は治まらん。延麒が止せと言うのを無視して無慈悲な真似をすることもある。国の正義のためにはやむをえぬ。延麒の言うままになっていては国が滅ぶからな」
「……そう……でしょうか」
「例えばここに罪人がいる。金を目当てに殺生をした罪人だ。罪人には飢えた妻子がいたとする。すると延麒は助けろと言う。だが、罪人を見逃しては国が成りたたん。哀れには思うが罪人は断罪せねばならん」
「……はい」
「もし俺が仮に罪人を殺すよう延麒に命じたとする。麒麟はそれをできぬ生き物だが、けっきょく奴は文句を言いながらも罪人を殺してくるだろう。麒麟は王の言葉には絶対に服従する。絶対に、だ。麒麟は王の言葉に逆らうことができぬ。たとえ死ねという命令でも、真実命じれば逆らわぬ」
「じゃ、選ぶだけ選んでもらって、選ばれたあとは勝手にやってもいいんですか？」
「難しいのはそこだな。正義と慈悲は天の意志だ。天は正義と慈悲によって国を治めてもらいたいと思っている。それを代弁するのが麒麟だろう。だが、正義と慈悲だけでは国は治まらぬ。不正だ、無慈悲だと思いながらもやらねばならぬことがある。ただ、それが度を越す

と天命を失う」

陽子はただ延を見る。

「国のために無慈悲な真似もするが、無慈悲が過ぎると王の資格を失う。しょせん王は天から玉座を借り受けているにすぎん。王が道を見誤り、天命を失うと麒麟が病む。この病を失道という」

延が宙に書いた文字を陽子は目の中に取りこんだ。

「王が道を失ったために麒麟が罹る病だ。王が性根を入れ換えればよし、さもなくば麒麟の病は治らぬ。だが、問題が性根ではな、入れ換えようと思うて入れ換えられるものでもない。麒麟が失道に罹って、王が治してやった例は少ない」

「治らないとどうなる……？」

「そのままでいれば死ぬな。そうして、麒麟が死ねば王も死ぬ」

「……死ぬ」

「人の命は短いな。王が死にもせず、年老いることもないのは、神籍に入っているからだ。王は神だ。だから死なぬ。王を神にしたのは麒麟だ。だから、麒麟が死ねば王も死ぬ」

陽子は頷く。

「麒麟を治す方法が、性根を入れ換えることのほかにもうひとつある」

「それは？」

「それは、麒麟を手放してやることだ。最も簡単なやり方は王が自ら死んでやればよい。王が死んでも麒麟は死なぬ」
「すると、麒麟は助かる？」
「助かるな。……景麒がそれだ」
言って延は軽く息をつく。
「慶国の先王は予王という女王だ。王といえども本性は人、資質はともかく決して道を誤らぬわけではない。予王は景麒に恋着した。景麒の傍に女を寄せぬ。女房を気取って悋気を見せる。果ては度を越して、城から女を追放し、国から女を追放しようとした。景麒が庇うのでさらに度を越す。国に残った女を殺そうとして景麒が病んだ」
「それで……？」
「女王が道を失ったのは景麒恋しさの故だ。景麒を死なせて嬉しいはずがなかろう。少なくともそれほど度は失ってなかったということだな。予王は蓬山に登った。登って退位を申し出た。天はこれを許し、景麒は予王から解放された。そういうことだ」
「その人は……？」
「王になるということは死んで神に生まれ直すということだ。王でなくば生き続けることができぬ」
それでは、慶国の先王はそのことによって死んだのだ。

「お前はすでに景麒によって王に選ばれた。玉座に就くには蓬山に登って天勅をいただかねばならんが、契約を交わしてある以上、玉座に就いたと大差がない。天命は下った。お前が景王だ。これだけはどうあっても変えることができぬ。……分かるか」

陽子は頷いた。

「王には国を治める義務がある。お前が国を見捨てて倭に帰るは勝手だが、王を失った国は荒れる。国が荒れれば間違いなく天はお前を見捨てるだろう」

「すると、景麒が失道にかかる。そうしてわたしは死ぬわけですね」

「おそらくな。ただ、綺麗事を言えばそれだけではない。問題は慶国の民なのだ。王は統治するだけではない。災異を鎮め、妖魔を鎮める役目を担っているのだからな。妖魔が出没する。嵐が起こり、日照り、水が荒れる。疫病が流行り、人心は惑う。国土は荒廃して民は苦吟を舐めることになるだろう」

「国が滅ぶ……？」

「そうだ。景麒はなかなか予王を見つけられず、長く空位の時代があった。その間に国土は荒れ人民は疲弊している。やっと王を見つけて玉座に据えたが、これの治世は六年しか続かなかった。しかも末の何年かは失道で国の安寧を失っている。そこでまたこの騒ぎだ。雁国や巧国に近い者は国を捨てて逃げてきたが、慶国には未だ大多数の民が残っている。こうしている間にも妖魔と災異によって苦しんでいるだろう。救う方法はひとつしかない」

「一刻も早く正当な王が玉座に就くこと……？」
「そのとおりだ」
陽子は首を振った。
「とても無理です」
「なぜだ？　お前はまさしく王気を具えていると思う」
「まさか……」
「お前はお前自身の王であり、己自身であることの責任を知っている。それが分からぬ者に王者の責任を説いたところで虚しいだけだし、自らを統治できない者に国土を統治できようはずもない」
「わたしは……駄目です」
「しかし」
「尚隆」
と、延麒が咎める声を出した。
「無理強いをするな。景王が慶国をどうするか、それは王の勝手だ。行なったことの責任を取る覚悟さえあれば、好きにしていいんだ」
延は溜息をついた。
「そのとおりだ。——だが、これだけは景王にお願いする。慶国の民を可能な限り救おうと

心がけてはきたが、雁の国庫も無尽蔵ではない。王の国を救っていただきたい」
「……考えさせてください」
陽子は俯いた。今は到底顔を上げていることができなかった。
「失礼ですが」
口をはさんだのは楽俊だった。
「陽子を狙っている王が誰だか、それはお分かりなんですか」
延は延麒を見、延麒は視線を逸らした。
「……誰だと思う」
「何となく……。おいらは塙王じゃねえかという気がしています」
陽子は楽俊を見た。難しい顔をした若者は一拍おかないと気のいいネズミに結びつかない。
「どうして？」
「確証があるわけじゃないけどな。陽子は山を走りまわってボロボロになってたろう。襲ってきた妖魔の全部が麒麟の使令だとは思えねえ。かといって山に住む妖魔があんなにいてたまるもんかい。半分を使令だと考えても多すぎる。おいらには巧国が傾いている気がしてならねえんだ」
楽俊が言うと、延は頷く。

「だろう。実は巧国から雁へ逃げこんだ海客を渡すように塙王から強い要請があった。巧国はああいう国だから、逃げ出してきた海客が過去にもいなかったわけではない。だが、こんなことは初めてだ。これはおかしいと延麒に調べさせると、どうやら舒栄に金を運んでいるのは巧国の誰か、しかも巧国は荒れている様子。これはいよいよ塙王が怪しいと目算をつけたところに、昨日、塙麟失道の報が入った」

「塙麟、失道」

楽俊は呟く。若い闊達な顔に苦いものがよぎった。

「……では、巧国は終わりだ……」

「何とかすることはできないんですか」

陽子が言うと三人は暗い顔をした。答えたのはやはり延だった。

「塙王に知人として忠告することは簡単だが、当の塙王が面会に応じない。たとえ会えても塙王が己の非を自覚しなければどうしようもできぬ。唯一方法があるとすれば、正当な景王が天命を受けて空の玉座を埋めることだ。何を思って塙王が慶国に干渉を始めたかは分からぬが、傀儡の王を立て、慶国を牛耳ることが目的ならば、それで野望ついえて愚かな真似をやめるやもしれん」

言外の言葉を含ませた視線を向けられて陽子は俯いた。

「……時間をください」

八章

1

陽子が与えられたのは、天井の高い豪奢な部屋だった。内装はもちろんのこと、家具からテーブルの上に揃えられた水差しやグラスに至るまで、贅を凝らした風情がある。部屋は広く、ガラスの入った窓は大きい。花が生けられ、香が焚かれて、巧国の辺境に住む農夫なら目を回しそうだ。

貧しい旅に慣れた陽子も同様で、どうにも落ち着かない。部屋に退がってひとりになって、少し考えごとをしてみたかったが、錦張りのふかふかした椅子は座りづらいし、漆に螺鈿を施したテーブルは、触ればくっきり指紋がついて頬杖をつくのも憚られる。

部屋を見まわすと、一方に四畳半ほどの小部屋が見えた。そこなら落ち着けるだろうかと近づいて、陽子は軽く溜息を落とした。

間仕切りの、繊細な透かし彫りの入った細い扉は折り畳まれている。中は一歩入ったところが高くなって、そこには絹のカーテンが下がっていた。そのカーテンも半分が開けてあって、台の上には錦の布団が敷かれているのが見てとれる。四畳半ほどもあるこの大きな台が寝台だというのなら、これは悪い冗談だとしか思えない。ここで横になっても、ものを考えることはできそうになかったし、ましてや眠れるとも思えなかった。

所在なくて陽子は大きな窓を開ける。フランス窓は床から天井までの高さがある。幾何学模様の桟に色ガラスを入れた窓の外は広い露台だった。

延は予告どおり、陽子に雲海に張り出したテラスに面した部屋を与えたのだ。

窓を開けると潮の匂いが通った。香の匂いよりもよほどいい。陽子は外に踏み出した。白い石を敷かれたテラスは建物の周囲を巡って、ちょっとした庭ほども広さがある。

陽子はテラスを歩き、手摺りに凭れてぼんやり雲海を見た。月は大きく傾いて天上の海に沈もうとしている。

じっと足元の岩場に波が打ち寄せるのを見ていると、背後でほたほたと足音がした。振り返ると灰茶の毛並みをした生き物がやってくるところだった。

「散歩？」

声をかけると、楽俊は苦笑する。

「まあな。——寝られねえか？」

「うん。楽俊も？」
「あんな部屋で寝られるかい。宿屋に残ってりゃよかったと、ほとほと後悔してる」
「同感」
陽子が言うと、ネズミは声を上げて笑った。
「おめえがそんなことを言ってどうする。陽子にもこんな王宮があるんだぞ」
楽俊に言われて陽子の顔から笑みが引いた。
「……やっぱり、あるんだろうね」
楽俊は横に来て並ぶ。陽子と同じように海を見下ろした。
「慶国の王宮は瑛州、堯天にある。金波宮っていうな」
あまり興味を誘われなかったので、陽子は気のない相づちを打った。楽俊はちょっとの間、黙りこむ。
「――なぁ、陽子」
「うん……」
「景麒は舒栄とかいう偽王に捕まっているだろう」
「らしいね」
「もしも塙王が絶対に陽子を玉座に就けまいと思ったら、ひとつ有効な方法がある」
「景麒を殺すこと、だね」

「そうだ。景麒が死ねばお前も死ぬ。蓬山に登って天勅を受けたわけではねえから、実際にどうなるかは分からねえが、どっちかというとそうなりそうだな」

陽子は頷いた。

「そう思う。景麒と契約を交わしてしまったせいで、わたしは人ではなくなったんだから。怪我をしにくくなったのもそのせいだろうし、言葉が分かったのも、剣が使えたのも、そもそも虚海を一緒に渡れたのも、ぜんぶそのせいなんだろう」

「たぶんな。景麒は敵の手の中だ。身を守るためには――」

「聞きたくない」

陽子は遮る。

「陽子」

「違う。駄々をこねてるんじゃない。王がどういうものか、麒麟がどういうものか、よく分かった。だから、自分の命を守るためだとか、そんなことで決断をしたくない」

「でもな」

「自棄で言ってると思ってほしくないんだけど」

陽子は微笑う。

「わたしはこちらに来て、いつ死んでもおかしくない状況だったんだ。何とか生きてこられたけど、それは運がよかったんだと思う。こちらに来たときになかったも同然の命だから、

そんなに惜しい気がしない。すくなくとも、そういう惜しみ方をしたくない」

楽俊はきゅうぅ、と喉を鳴らした。

「だから命を惜しんで軽はずみな選択をしたくない。みんながわたしに期待してるのは分かってる。でもここでみんなの都合に負けて自分の生き方を決めたら、わたしはその責任を負えない。だから、ちゃんと考えたい。そう、思ってる」

楽俊の真っ黒な目が見上げてきた。

「おいらには、どうして陽子がそんなに迷うのかよく分からない」

「わたしにはできない」

「何でだ？」

「わたしは、自分がどれだけ醜い人間か知ってる。王の器じゃない。そんな大層な人間じゃない」

「そんなことは」

「楽俊が半獣だというなら、わたしも半獣だ。一見して人間のようだけれど、内実は獣でしかない」

「陽子……」

陽子は露台の手摺りを握る。華奢な石の感触がいかにも繊細で美しい。眼下には透明な水、それを透かして見る関弓の明かりは夜光虫のようだ。波がゆるやかに打ち寄せて穏やか

な音を立てていた。見事に美しい景観だが、自分がそれにそぐわない。堯天にあるという金波宮も同じように美しい城だろう。そこにいる自分を思うと気後れよりもおぞましさを感じた。

そう言うと、楽俊は溜息をつく。

「王は麒麟に選ばれるまではただの人だ」

「わたしは麒麟に選ばれても、そんな人間でしかいられなかった。盗もうとした、脅そうとした、実際に生きるために人を脅した。人を疑った、命を惜しんで楽俊を見捨てた、殺そうとした」

「延王はお前にならできると言ったろう」

「延王はわたしがどれだけ浅ましく生きてきたか知らない」

「お前ならできる。止めを刺されそうになったおいらが言うんだから間違いねえ」

陽子は楽俊を見下ろした。陽子の鳩尾のあたりまでしか背丈のないネズミは、手摺りの間から顔を出してじっと空の上にある海を見つめている。

「わたしには、できない……」

雲海を見ながら呟いた声に返答はない。小さな手が陽子の腕を軽く叩いて、それに振り返るとすでに灰茶の毛並みは背中を向けていた。

「楽俊」

「おいらでも迷うだろうから、迷うのが悪いとは言わねえ。よく、考えな」
ネズミは背中を向けて遠ざかりながら手を挙げた。そのまま振り返りもしない影を陽子は見守る。
「……楽俊だって、全部を知ってるわけじゃない……」
低く呟いたときだった。
――わたしは知っている。
それは陽子の独白ではなかった。弾かれたように顔を上げて周囲を見わたしたが、耳が聞いた声でもない。
――あなたはずっとひとりではなかった。わたしは全部を知っています。
「……ジョウユウ……？」
――王座を望みなさい。あなたになら、できるでしょう。
陽子には返答ができない。話しかけられたことに驚いたせいでもあるし、話しかけられた内容のせいでもある。
――あえて主命に背きました。お許しを。
主命、という言葉に、いつか景麒が言った「ないものとしてふるまえ」という言葉を思い出した。それで今日まで一度も会話に応じてくれなかったのか。
――化物と呼び、取ってくれと駄々をこねた。そのせいなのだから、これは陽子の落ち度

だ。

「わたしは、本当に愚かだ……」

呟いた声にはもう返答がなかった。

2

翌日、女官に起こされて朝食の席に行った陽子は、問うような視線に首を横に振って答えた。今日はネズミのままの楽俊は、ただ俯いて髭をそよがせる。延も延麒もわずかに落胆した表情を見せた。

「お前の国と国民のことだ。好きにすればいいが……」

延は苦笑混じりに言う。

「何にしても景麒だけは迎えに行かせてもらいたい。王が玉座を捨てると言うなら、なおのことだ。せめて宰輔だけでも、国のために残してやってほしい。——どうだ?」

延の言葉に陽子は頷く。

「まだ、結論を出したわけじゃないし、景麒を取り戻すことには異存ありません。——でも、どうやって?」

「力でもぎとるしかないだろう。景麒は征州にいるらしい。偽王軍の真ん中だからな」

「景麒を取り戻すことができれば、わたしは帰れますか？　これはたんなる疑問ですけど」

延は頷く。

「麒麟は蝕を起こすことができる。お前は虚海を渡れる身体になったのだから、造作はない。もしもお前が是が非でも帰りたいのなら、景麒が否と言っても延麒に送らせると約束しよう」

フェアな人物だ、と陽子は思う。王にならないのなら帰さないと脅迫することもできるのに。

「おれは、やだからな。そのときはちゃんと景麒を説得してくれよ」

延麒が声を上げて、延は少年をねめつけた。

「六太」

「知らないようだから、知っておいてもらいたい。蝕が起これば災害になる。麒麟だけならちょっと風が吹く程度だけど、王が一緒だとなると大災害になる。あちらにだって被害は出るんだからな」

「倭にも？」

「そう。あっちとこっちは、本来交ざってはいけないもんだからな。あんたがこっちにきたときの蝕で巧国にずいぶん被害があったらしいが、王が虚海を渡ったにしちゃ、たいしたことがなかったうちだ。今度はそうはいかないだろう。おれはそういうことに手を貸すのは嫌

だからな」
「もしも帰ることになっても、延麒には迷惑をかけないようにする」
「くれぐれも、よろしく」
苦笑ぎみに頷くと、今度は延が硬い声を出した。
「だが、陽子。あちらに帰ったからといって安全になるわけではない」
「――分かっています」
塙王が諦めないかぎり、あちらにも妖魔はやってくるだろう。帰るときには災害を起こし、戻れば妖魔の襲撃で巻きぞえを食う人間がきっと出る。陽子は疫病神だ。こちらにとってもあちらにとっても、陽子の帰国は迷惑な話だが、それを分かっても、決心はつかない。
「わたしがあちらに帰る前に、塙王を討っておくというのは？」
「それはできん。少なくとも俺は協力しない」
「できないんですか？」
延は頷く。
「これだけは覚えておけ。王には決して犯してはならぬ罪が三つある。ひとつは、天命に逆らって仁道に悖ること、いまひとつは天命を容れずに自ら死を選ぶこと。そうして最後のひとつが、たとえ内乱を治める為であろうと、他国に侵入すること」
陽子は頷き、

「でも、あなたたちは？　慶国に景麒を奪取に行くのは？」
「景女王が先頭に立つのであれば、親征だな。我らは景王の請願に従って助力をするだけ」
「なるほど」
延は太い笑みを浮かべた。
「景麒奪取のために、わが雁国の王師をお貸ししてもいいが、いかがなされる」
陽子は苦笑して頭を下げた。
「よろしくお願いします。――失望させるようなことばかり言って申しわけありません」
延麒は顔を蹙めて笑った。
「尚隆は胎果の王に増えてほしいんだ。気にしてやることはない。何しろ、いままでひとりだったからな」
「いま現在、ひとり？」
「いま現在、ひとりだな。過去に何人かいたようだけど、そんなに数は多くない」
「延麒も胎果なんでしょう？」
「そう。おれと尚隆と泰麒と。陽子で四人目だな」
「泰麒、ということは、戴国の麒麟？」
「そう。戴極国の雛さ」
「雛、って」

「成獣じゃなかった」
「延麒は？」
「おれは成獣だよ。麒麟は成獣すると外見の成長が止まる」
「と、いうことは、延麒のほうが景麒よりも早く成長したんだ」
「そういうこと」
何だか得意そうに言うのがおかしかった。延はただ苦笑している。
「泰麒は成獣じゃなかった？」
「そう」
「過去形？」
陽子が訊くと、延麒は難しい顔をして延と顔を見合わせる。
「――泰麒は死んだ。少なくとも死んだと伝えられてる。いま戴国は争乱の渦中だ。泰麒も泰王も行方が知れない」
陽子は溜息をついた。
「大変なんだね、こちらも」
「人がいるとややこしい。そういうものさ。――名を高里……何といったかな。歳のころならあんたと同じぐらいだろう」
「男の子？」

「麒というのは雄のことだな。綺麗な黒麒麟だった」
「黒麒麟？」
「麒麟を見たことがあるか？」
「人の形なら」
「毛並みは雌黄、背が五色、鬣は金が普通だな」
「延麒の髪みたいに？」
「そう。どうやらこれは髪じゃない。鬣だ」
そうだったのか、と陽子は思う。
「泰麒は黒だ。磨きあげた鋼の色をしてた。毛並みは漆黒、背が銀……というのか、少し変わった感じの五色だな」
「珍しい？」
「珍しいな。歴史の中でも黒麒麟はめったにない。赤麒麟というのも、白麒麟というのもいたらしいが、おれはお目にかかったことがない」
「へぇ……」
「泰麒が死んだのだったら、泰王も生きてないはずだ。だったら蓬山に泰果――泰麒の果実――が実っていいはずだが、その様子がないんだな」
「泰果？」

「麒麟の生る樹は蓬山にある。麒麟が死ぬと、同時に次の麒麟が入った卵果が生る。泰麒が死ねば、次の泰麒だな。雌なら泰麟。その卵果に国氏を冠して泰果と言う。——しかし、まだ蓬山に泰果がない。ということは、生きているはずなんだが」

「麒麟に親はいないの？」

「いない。胎果ならともかく、だから麒麟には名前がない。号だけだ」

「景麒も？」

延麒は頷く。それは何だか悲しいことに思えた。陽子の思考を読んだように、延麒はわざとらしい渋面を作ってみせた。

「麒麟てのは哀れな生き物さ。王のために生まれてきて、親もなければ兄弟もない。名前さえなくて、王を選べばこき使われる。そのあげく、死ぬときは王のせいだからな。そのはてに、墓もない、と」

延麒がちらと延に視線を向けると、彼の主人はそっぽを向いた。延麒は顔を蹙めて溜息をつく。

「お墓がない？」

陽子が問い返すと、延麒はしまったというように視線を逸らした。

「墓を作ってもらえない？」

延が苦笑して答えた。

「墓がないわけではない。王と一緒に合葬されるな。ただし死体はない」
「……どうして」
不可思議な生き物だから、死体を残さないのだろうか。
「よせって」
「隠すことでもないだろう。――麒麟は妖魔を僕（しもべ）としてつかう。妖魔に契約を持ちかけるのだな。契約を交わした妖魔は麒麟に服従し使役される。その代わりに麒麟が死んだあとは、その死体を喰っていい」
陽子は目を上げて延を見、それから延麒を見た。延麒は肩を竦める。
「そういうこと。うまいそうだぞ、麒麟は。まあ、死んだあとだからどうでもいいけどさ。……哀れに思うなら、景麒を大事にしてやれ。奴を失望させないでくれ」
陽子には答えられなかった。代わりにふと、
「塙王は塙麟（こうりん）を失望させることが怖くなかったんだろうか……」
さてな、と延は苦笑した。
「塙王が何を考えているのかは分からん」
延麒もまた肩を竦めた。
「他国に干渉すれば天命を失うことになるのは確実だろうな。それが分かっていても、塙王は莫迦をやらずにおれなかった。それほどの理由があったんだろうな」

「そうかな」
「莫迦やって、それが自分の損になるだけだと分かってても、人はあえて罪に踏みこむことがある。人は愚かだ。苦しければなお愚かになるってことだな」
陽子はふと胸を衝かれ、それでただ頷いた。
「……怖いな」
「怖いか？」
「うん。わたしにはとうていできないという気がする」
延が微かに笑った。
「麒麟は王に背かぬ。だからといって、何を申しつけても嫌な顔ひとつせぬというわけではない。自分が愚かな人間だということを忘れぬことだ。そうすればお前の半身が助けてくれる」
「……半身？」
「お前の麒麟がな」
陽子はただ頷き、それから自分の右隣の席を見た。
そこには一振りの剣が置かれている。
――水禺刀は過去未来、千里の彼方のことでも映し出す。
延はそう言わなかったか。だとしたら水禺刀を支配できれば、塙王が何を考えたのか知る

ことができるのではないだろうか？

3

国には二軍ある。ひとつは州侯に委ねられ、各地に配置されている州侯師、もうひとつが王が直接掌握する王師。

慶国征州の州都である維龍まで騎兵が到達するのに一月がかかる。景麒救命を考えると一月では心許ない。それで、特に天馬その他を使って宙を駆けることができる者を掻き集めて百二十騎の精鋭部隊を作り、これで維龍を急襲することになった。

延も延麒も、その準備に出ていったきり昼食にも夕食にも戻ってこない。

陽子は所在なげな楽俊を残して部屋に戻った。剣をテーブルにおいてその前に座る。

陽子は剣の主人だ。理屈としてはできるはずだが、王であることに迷いがある。難しいとは思うが、迷っているからなおのことやってみる価値はあるように思えた。

意識的に幻を引き出す方法は分からない。きっと、ただ幻を引き出すだけなら難しいことではないと思う。

陽子はこちらに来る前、長い間、水の音のする夢を見たが、その話を延にしたらそれはこの剣の見せた幻に違いないと言われた。おそらく剣が敵襲のあることを予見して、主人であ

る陽子に警告を発していたのだろうと。

しかしながらあのときの陽子は、まだケイキに会っていなかったし、契約も交わしてはいなかった。それでも剣は陽子を主人だと知っていたのだ。

――天命が先か、選定が先か。

陽子は延にそう訊いた。

陽子は天命を担って生まれてきたのだろうか。それとも、景麒が選んだから王座を背負うはめになったのだろうか。

分からない、と言ったのは延麒自身だった。

「俺にも、どうしてこんな奴を選んだのか、さっぱり理由が分からない。ただ、何となく、こいつだろうなと思ったんだ」

王を選ぶことは、麒麟の本能なのだろうと延麒は言う。

いずれにしても、陽子にとって剣と意思を通じることはそんなに難しいことではないはずだと思う。

陽子は明かりを消した部屋の中で剣を抜き、刀身を見つめる。

――塙王を。

剣はこれまでずっと故国の幻ばかりを見せ続けてきたが、それは陽子が帰ることだけを考えていたからなのではないかと、そういう気がする。

――塙王の真意が知りたい。

まだ決心がつかないから、愚かな王のことを知っておきたい。

刀身が淡く燐光を浮かべ始めた。光の中に薄い影が浮かぶ。水の滴る音が聞こえ始めた。じっと影を見つめて、それが形を成すのを待つ。

白い壁が見えた。ガラスの入った窓と、そこから見えている庭。その庭には見覚えがある。陽子の家の庭だった。

――違う。これじゃない。

強く念じると幻が消える。目の前に光を失った刀身が見えて、陽子は失敗したのを知った。

「一度でできるはずがない」

声に出して自分に言い聞かせて、もう一度、刀身を見つめる。一夜に何度も幻を見たことはなかったが、思いのほか簡単に刀身が再び光を浮かべ始めた。

だがしかし、次に見えたのもやはり陽子の家の庭で、軽い落胆を抑えきれない。意識を幻から離さないように注意して、これではないと念じると水面を乱したように幻が揺らいだ。次いで見えたのは陽子の部屋だった。

――違う。

その次は学校。

——違う。

何度試しても見えるのはあちらの世界ばかりだった。家を、学校を、友達の家の風景まで見せておきながら、剣はこちらの世界を映さない。

まるで鞘のようだ、と陽子は思った。鞘の蒼猿のように御しがたい。

同時にこれは故国へのこだわりを捨てきれない陽子のせいだ。それを分かっているから、諦めない。

辛抱強くくりかえして、陽子はやっと幻の中にこちらの街を見つけた。

やった、と喜ぶ間もなくそれがどこかの街の門前で、そこに沢山の人間が倒れているのが分かる。

門へ向かった街道は血を吸ってぬかるんでいる。倒れた人々と、苦しげな呻き声、その中に立って暗い目つきをしている少年。

——いや、陽子自身。

「……よせ！」

慌てて幻を切り放した。

あれは午寮だ。あそこで陽子は楽俊を見捨てた。

自分のことながら愕然とした。あんなに陰惨な顔をしていたのか。

陽子は剣を放り出す。まるで剣を恐れたような自分の仕草に気がついて、自嘲の笑みがも

れた。

――本当のことじゃないか。

蒼猿が生きてたら、きっとそう言うだろう。

それはまったくの事実だ。目を逸らす資格はない。むしろちゃんと直視しなければいけない。愚かな自分から目を逸らしたら、きっとどこまでも愚かになる。

改めて柄を握った。息を整えて刀身を覗きこむ。すぐに目の前に午寮の門前が見えた。

幻の中の陽子は本当に暗い目をしていた。荒んだ色が一目で分かる。陽子はその目で楽俊を見ている。

（戻って止めを刺すべきか迷った……）

午寮の街から人が駆け出してきて、幻の中の陽子は慌てたようにその場を逃げた。逃げだした後ろ姿が揺らいで、今度は山道が現れる。陽子はじっと自分が親切な母子に背を向けるのを見ていた。

達姐がいて、海客の老人がいた。陽子を護送しようとして命を落とした男たちの家族が泣くのも見えた。海客のせいで、と恨む声を陽子はじっと聞いていた。

河西の街の、妖魔に襲われたあとの惨状が映った。午寮の街で、広場に寝かされた死体の列を見た。どこかの街の外壁の下でうずくまる慶国の難民たちの姿も見える。

陽子はそれらの幻をただ見つめた。見つめながら、幻を拒絶すればかえって暴れるのだと

悟った。ただ受け入れて見つめていれば、幻は陽子の見たいものに近づいていく。

王宮が見えた。そこには痩せこけた女がいる。

「尭天に女はいらないのです」

「ですが」

異論を唱えようとしたのは景麒で、その女が死んだ先帝、予王だろうと想像がついた。

「勅命に背いて残ったのは罪人、罪人を裁くのに躊躇する必要があるのですか？」

言い放った予王の双眸だけが生気を宿していた。肌は死人のよう、削げた頬にも筋の浮き出た首筋にも病的な色があらわだった。彼女の苦吟が見えた気がする。あんなに痩せてしまうほど彼女は苦しかった。苦しくて苦しくて、愚かなことと分かっていながら罪を犯さざるをえなかったのだ。

荒廃した慶国が見えた。巧国も貧しかったが、慶国の貧しさは巧国よりさらにひどい。妖魔に襲われる里が見え、戦乱に焼ける廬が見える。蝗や鼠に襲われて荒れ地になった田、氾濫した川から押し寄せた水で泥濘と化した田には死体が幾つも浮いている。

――王を失っただけで、こんなに国が荒れるのか。

何度も聞いた「国が滅ぶ」という言葉が実感を伴って甦ってきた。故国で暮らしていれば現実感のない言葉が、ここで盛んに言われるわけが分かった気がした。

そして次に見えたのが、どこかの山道だった。

4

道にいたのはふたりで、一方は死に神のように暗い色の布を被っている。もう一方は金の髪をしていた。周囲に何頭かの獣が見える。

「お許しを」

言って顔を覆ったのは金の髪をしたほうで、そしてそれはいつか山道で会った女だった。

（やはり、あれが塙麟……）

「それはもちろん、儂に対して言っておるのだろうな」

死に神のような人物が、頭に被った布を落とした。現れたのは老けた男の顔だった。皺は深いが、身体が大きいので老人という言葉はそぐわない。その肩には色鮮やかなオウムが留まっている。

「無力そうな娘だ。殺しそびれたのは口惜しいが、山に迷いこんでしまえばそうそう長生きができるとも思えん。――だが、すでに契約を交わしていたとは誤算であったな」

男はそう淡々と言う。ひどく感情の欠落した声だった。

「まあ、良い。そのうち山で野垂れ死ぬか、里に紛れこんで捕まるだろう。いずれにしても、台輔」

「はい」

「次にはこんなことでは困る。儂のために、是が非でもあの娘を仕留めてもらう」

男が言っている「あの娘」とは、おそらく陽子のことだろう。だとしたら、この男は。

（……塙王……）

「しかし、気の弱そうな小娘だの。たいした王の器量とも思えぬ。わざわざ蓬莱まで出向いたが、あんな主人しか見つからなんだか」

そう言って、男が無表情に振り返ったのは一頭の獣だった。

外見は鹿に似ていたが、角は額に一本だけ。強いて言えば一角獣に近いかもしれない。鬣は濃い金、毛並みは落ち着いた黄色、背中に鹿のように模様があって、そこが不思議な色に薄く輝いて見える。

「よくよく主運がないと見える。のう、景台輔」

（景台輔……ということは、あれが景麒……）

あれが麒麟という生き物なのか。

これは配浪から護送される途中、山の中での風景だろう。すると陽子が景麒だと思ったのは塙麟、ジョウユウは景麒であるこの獣を見て「台輔」と呼んだのだ。

「小娘とおっしゃるのなら、捨て置けばよろしいのではありませんか」

言ったのは塙麟だった。

「巧の民がふたり、死にました。どうか、こんなことはおやめください」
涙をこぼして塙王を見上げる顔は、いつか山道でみた表情と同じものだ。
「人というのは死ぬものだ」
対する主人の言葉にはどこまでも感情が窺えなかった。
「天はお許しにならないでしょう。きっと巧は報いを受けます。主上とて例外ではないのですよ」
「すでに報いを受けるだけのことはした。いまさら言うても始まらぬ。儂の命運は尽きた。巧は沈む。ならば慶にも沈んでもらう。必ず景王には同行してもらうぞ」
「そこまで胎果が憎いのですか」
塙王は軽く笑う。
「憎くはないが、嫌いではある。あちらでは子供は女の腹から生まれるのだぞ。知っておるか」
「知っております。それが何だというのです」
「汚らわしいとは思わぬか」
「思いません」
「儂は思うな。女の腹から生まれた以上、胎果はすでにこちらの人間ではない。こちらにいるべきではないのだ」

「天はそのように思ってはおられません。だから胎果の王がいるのではないのですか。天の意志に背くことこそ、汚らわしいことです」

塙王はしのび笑う。

「儂とお前は気が合わんようだの」

「そのようです」

「だが、お前の主は儂だ。儂の命には従ってもらう。小娘を追って必ず仕留めよ。生かして巧から逃がしてはならん。——そうだ、慶との国境に王師を置かねばな。きっと小娘は慶に戻ろうとするであろう」

「汚らわしい小娘など、捨て置けばよろしいではありませんか。小娘と言い、たいした器量ではないと言いながら、どうして殺してまでも玉座から遠ざけようとなさるのです」

「胎果の王は巧の周囲には要らぬ」

そっけなく言われて塙麟は深い溜息を落とした。

「……それで、景台輔をどうなさるおつもりです」

「景麒は舒栄にくれてやる。麒麟がおれば諸侯も異論なかろう」

「当座はそれで騙されても、必ずじきに怪しみます。角を封じられて景台輔は人の姿になれない。喋ることさえできません。そんな宰輔がどこにおります。もうおやめなさいませ。天がこのような過ちを見逃すはずがございません」

「見逃してくれとは言わぬよ」
「見事なお覚悟ですが、主上は民のことをお忘れです」
「巧の民は運がなかったのだ。儂が死ねば、次に賢帝が立つやもしれん。そのほうが長い目で見れば民のためかもしれんぞ」
「何ということをおっしゃる……」
塙麟は再び顔を覆った。
「儂は王の器量ではなかったのだろうよ」
塙王は淡々と言う。情感の欠落した声は、ひょっとしたら彼が全てを諦めているからなのかもしれない。
「お前も天も王を選びそこねたのだ」
「そんなことはございません」
「そういうことだ。儂の在位は五十年で終わる。雁が五百年、奏が六百年近く。雁と奏に比べればほんの短い治世だが、儂にはこれが限界だった」
「今からでもお心を変えられれば、もっと長くなりましょう」
「もう遅い、台輔」
塙麟は深く俯く。
「儂はこの大役につまずいたのだ。地方の衛士で終わるはずだった儂が法外の好運に恵まれ

たものだが、儂にはそれをうけとるだけの器量がなかった。たかだか五十年しか持ち堪えられなんだ」

「たかだかなどとおっしゃらないでください。短命の王はいくらでもおります」

「おるな。例えば予王だ。予王に限らず慶は常に波乱の国、巧より国も数段、貧しい。不心得な民は雁や奏と比べて、巧は貧しいなどと言うが、ものの分かる者は慶に比べればましだと言う」

「雁国や奏国とて、最初から豊かだったわけではございません」

「分かっておるよ。そう思うて儂とてできる限りのことはした。だが、儂が進んだだけ延も宗も先に進む。それで誰もがいつまでも言うのだ、巧は雁よりも奏よりも貧しい、とな。これは言いかえれば、儂が延や宗に及ばぬということだ」

「そんなことは、決して」

「延や宗にいまさら張り合おうとも思わぬよ。だが、慶は別だ。慶は巧よりも貧しい。これで新王が践祚して、巧よりも豊かな国になったらどうする。巧だけが貧しいままで、儂だけが愚帝と言われることになったら」

「それで天命を失うほど愚かなことをなさるのですか」

塙王は塙麟の問いに返答しなかった。

「倭は豊かな国、それは海客の話を聞けば分かる。そして倭より帰還した延の国もまた豊か

だ。胎果は儂たちこちらで生まれた者とは違う。その胎果の延の国があそこまで豊かで、どうして景王を恐れずにいられようか。胎果は何か国を治める秘訣を知っておるのかもしれん。だとしたら、どこまでも儂だけが」

「何という愚かなことをおっしゃるのです」

塙王は仄かに苦笑する。

「まったくだ。愚かなことよな。――だが、もういまさらあとには退けぬ。いまさら退いたところで、巧の命運は変えられまいよ。どうせ巧は滅び、儂は死ぬ。ならば、慶の胎果にも同行してもらう」

――莫迦な。

「何て、愚かな」

思わず声を上げて、はたと幻が途切れた。

陽子は力なく剣を下ろす。

「……莫迦なことを」

自分だけが取り残されたくはないから、でも自分が周囲に合わせるよりは、周囲を引き留めたほうが楽だから。よくあることだ。本当によくある。だけど。

「仮にも一国の主が国民の辛苦も顧みず、そんな愚かなことのために犯してはならない罪を犯したのか」

どれだけの人が巻きぞえになって命を失ったか。これで巧国が滅べば、被害はその比ではないだろう。

——人は愚かだ。苦しければ、なお、愚かになる。

延麒の声が甦った。

雁国と奏国に挟まれて。延王を宗王を意識して。たかだか五十年と彼は言ったが、彼にとってはどれほどにか長い歳月だったのだろう。

そしてこれは陽子がいつ踏みこんでもおかしくない道だ。雁国と奏国に挟まれたのは慶国も同じ。塙王と同じことを陽子が考えないと言えるのか。

「……怖いな」

陽子は呟いた。

「本当に怖い……」

5

夜風を吸いにテラスに出ると、そこには先客がいた。

「楽俊」

声をかけると雲海を見ていたネズミが振り返る。軽く尻尾を上げてみせた。

「また、寝られない？」
「いろいろと考えることがあってな」
「考えること？」
訊くと楽俊は大きく頷く。
「どうやって陽子の気を変えようか、とか」
陽子はただ苦笑した。
昨夜と同じように楽俊の隣に並ぶ。手摺りに凭れて雲海を見下ろした。
「ひとつ、訊いてもいい？」
「何だ？」
「なぜ、わたしを王にしたい？」
「王にしたいんじゃねえぞ。陽子は王だ。もう麒麟に選ばれてるんだからな。なのに玉座を捨てようとしてる。だから止めたいと思ってるだけだ。王が国を見捨てると、民も王も不幸になる」
「わたしが王になったら、もっと不幸になるかもしれない」
「そんなことはない」
「なぜ？」
「陽子にならできると思うからだな」

「……できない」
「できる」
短く言ってから楽俊は溜息をつく。
「どうしていまさらそんなに卑屈になるんだ」
「自分ひとりのことじゃないから」
陽子はただ打ち寄せる波を見下ろす。
「自分ひとりのことならやってみる。自分で責任の取れることなら。失敗してもわたしが死ぬだけならいい。でも、そうじゃないだろう」
「慶国の連中は国に帰れる日を待ってんだぞ」
「そう。豊かな、平和な国にね。わたしがそれを与えてあげられるとは思えない」
「麒麟に選ばれた以上、誰でも名君の資質があると、延王は言ったろう」
「本当にそうなら、どうして慶国が荒れる？　どうして巧国が荒れるわけ？　たとえ資質はあっても、資質を生かしていくことが難しいからじゃないか」
「陽子ならだいじょうぶだ」
「根拠のない自信は傲りというんだ」
きゅうう、と楽俊は俯いた。
「卑屈になってるんじゃない。根拠のない不信なら卑屈と言われてもしかたないけど、わた

しの不信には根拠がないわけじゃない。わたしはこちらで、たくさんのことを学んだ。その最たるものが、平たく言えば、わたしは莫迦だということだ」

「陽子」

「自分を卑下して満足してるんじゃない。わたしは本当に愚かだった。そんな自分を分かって、やっと愚かでない自分を探そうとしてる。これからなんだ、楽俊。これから少しずつ努力して、少しでも、ましな人間になれたらいいと思っている。ましな人間であることの証明が麒麟に選ばれて王になることなら、それを目指してみるのもいいかもしれない。でも、それは、いまのことじゃない。もっとずっと先の、せめてもう少し愚かでない人間になってからのことだ」

そうか、と楽俊は呟いて手摺りを離れた。ほたほたと広い露台を歩きまわる。

「陽子は怖いんだ」

「怖いよ」

「大きな責任が肩にかかってきて、それで竦んでる」

「……そう」

「早く景麒を取り戻しに行け、陽子」

陽子が振り返ると、楽俊はひとりで自分の影を踏んでいる。

「お前ひとりでやるんじゃねえぞ。何のために麒麟がいるんだ。天が麒麟を王にしなかった

のはなぜだ。お前は自分を醜いと言う。浅ましいと言う。自分で言うんならそうなんだろうさ。だがな、景麒がお前を選んだ以上、景麒にはお前の醜さや浅ましさが必要なんだ」

「そんなこと」

「足したらちょうどよくなるんだろうさ。お前だけでも足りねえ、景麒だけでも足りねえ。だから王と麒麟と、ふたつで生きるように作られてるんじゃねえのかい。麒麟もいわば半獣だ。半獣の陽子と、半獣の麒麟と、それでちょうどいいんだろうさ。きっと延王と延麒もそうなんだと思う」

陽子はただ俯いた。

「王になるってんで有頂天になる人間だっているだろう。民のことを考えて怖じ気づく分別があるだけでも、お前は玉座につく資格があるよ」

「そんなことじゃない」

「景麒を信じろ」

「でも」

「もっと自分を信じてやれ。五年あとに王の器になれるなら、今から王でもいいじゃねえか。ここで竦む必要がどこにある？」

「でも……」

「景麒はもうお前を王に選んでるんだぞ。いまこの地上に陽子以上に景王に向いた人間はい

ねえ。天意は民意だ。いまこの地上に、陽子以上に慶国の民を幸せにできる王はいねえってことなんだ。もっと呑んでかかっちゃどうだ。慶国の民はお前のものだ。お前が慶国のものであるのとおんなじにな」

「だけど」

「ましな人間になりたいんだったら、玉座に就いて、ましな王になれ。それがひいては、ましな人間になるってことなんじゃねえのかい。王の責任は確かに重い。いいじゃねぇか。重い責任で締め上げられりゃ、さっさとましな人間になれるさ」

「なれなかったら？」

「ましになる気があれば、嫌でもなれる。麒麟と民がお前の教師だからな。それだけの数の教師がいて、莫迦でいられるはずがねえ」

陽子は長いこと黙って海を見ていた。

「……王様になったら帰れないね」

「帰りたいか？」

「分からない」

「分からないのか？」

陽子は頷いた。

「正直に言うと、あちらがそんなにいいところだったとは思えない。こちらも前ほど嫌じゃ

ない」
「うん」
「でも、こちらに来てからずっと、帰ることだけを考えてきた」
「……それは、分かる」
「両親がいるの。家があって友達がいるの。本当に絶対いい両親でいい友達だったか訊かれると困るけど、それはあの人たちだけの責任じゃない。わたしは貧しい人間で、だから貧しい人間関係しか作ってこられなかった。でもここで帰ったら、もっとちゃんとやれると思う。ぜんぶ一からやり直して、自分が生まれた世界に自分の居場所を作れると思う。愚かだった自分が本当に悔しいから、あそこでちゃんとやり直してみたい」
手摺りを握りしめた手に滴がこぼれた。
「たとえやり直すことなんかできなくても、あそこはもうわたしのいるべき世界じゃないのだとしても、それでもやっぱり懐かしい。わたし、別れの言葉も言ってこなかった。前もって心の準備をする暇があってちゃんとお別れができていたら、こんなに苦しくなかったかもしれない。でも、何の準備もなくて、何もかも放り出したままで」
「……そうだな」
「それでなくても、今日までずっと帰りたいって、ぜったいに帰るんだって、それだけで頑張ってきたことを諦めるのはすごく辛い……」

「うん」
「ここで帰ったら、きっと後悔すると思うけど、帰らなくてもきっと後悔すると思う。どっちにいても絶対に片方が懐かしい。どっちも取りたいけど片方しか選べない」
そっと暖かいものが頬に触れた。それが頬を伝ったものを拭ってくれる。
「……楽俊」
「振り向くなよ。今ちょっと障りがあるからな」
笑みがこぼれて、それと一緒に涙がこぼれた。
「笑うな。しかたねえだろ。ネズミのまんまじゃ手がとどかねえんだから」
「……うん」
「あのなぁ、陽子。どっちを選んでいいか分からないときは、自分がやるべきほうを選んでおくんだ。そういうときはどっちを選んでも必ずあとで後悔する。同じ後悔するなら、少しでも軽いほうがいいだろ」
「うん」
「やるべきことを選んでおけば、やるべきことを放棄しなかったぶんだけ、後悔が軽くてすむ」
「うん……」
頬を軽く叩いてくれる掌が温かい。

「おいらは陽子がどんな国を造るのか見てみたい」
「……うん。ありがとう……」

6

維龍襲撃のその日、陽子が騎馬に借りたのは吉量という生き物だった。吉量は白い縞のある赤い鬣の馬、金の目が美しい。乗馬の方法はジョウユウが知っている。
「陽子は関弓にいてもいいのだぞ」
延は言ったが陽子は頷かなかった。維龍を守る兵は六千あまり、一騎でも多いほうがいいのは分かっている。ましてやことが景麒のことで、ひいてはそれが慶国のことで、陽子が隠れていていいはずがない。
五百年もの長い間、一国を支え続けた延と延麒に向かって、やってみますと発声するのにはおそろしいほどの勇気がいった。こちらの世界の全てを知っているわけではない。国の仕組みも政治の仕組みも知らない。王を名乗る器量もないと分かっている。
だからもう、自分にやれることを、とにかくがむしゃらにやってみるしかなかった。いま戦うことが必要だから戦う。とにかくそこから取りかかるしかないから、玄英宮に隠れているわけにはいかないのだ。

陽子のほかにもうひとり隠れていることを拒んだ者がいる。楽俊だった。楽俊には関弓に残るよう強く言ったが、彼は承服しなかった。ならば手伝えと延麒が言って、彼に伴われて出ていった。麒麟は血を厭うので、戦場には連れていけない。彼は楽俊と共に慶国各地で偽王軍に下った州侯を説得するために慶国へ向かっている。

百と二十の獣が雲海の上を駆ける。偽王軍は二万あまり。そのうち五千が征州に結集している。百二十騎で戦える相手ではもとよりないと延は言う。

「目的は景麒だけだ。景麒さえ奪還できればとりあえず時間をかせげる。さらに、偽王軍の連中に、自分たちが後生大事に守っているのが偽王ではないかと疑わせることができれば上々。州侯の三人ばかりが目を覚ませば、一気に形勢は逆転する」

景麒を取り戻すことは第一歩にすぎない。

「百二十で勝算はあるのか？」

陽子が訊くと、延は笑う。

「いちおう、一騎当千とはいかずとも、一騎当十程度の者を集めたつもりだ。しかも雲海の上は守りが薄い。空の上に昇れる者には限りがあるからな。連中はまだ景王が我々のところにあることを知らないはずだ。知られぬよう、わざわざ俺が迎えに出向いたのだから」

それで延がたったひとりで容昌まで迎えにきたのか、と思う。

「まあ、景王がどんな人物だか興味もあったのだがな。——だから、舒栄もまさか雁が出てくるとは思っておるまい。わずか百二十騎にしろ、雲海からやってくるとは思ってもみないはずだが。——あとは景王次第か」

「——わたし？」

「お前が偽王軍を威圧できれば、話はもっと早いな。偽王のために戦う民などおらんからな。お前が間違いなく王だと分かれば、兵のほうから景麒を差し出すだろう」

それができれば、と陽子は溜息をつく。

「迷うなよ。お前が王だ。それを忘れるな。王など体のいい下男のようなものだが、それを民に気取られるな。自分がいちばん偉いのだという顔をすることだ」

「どうすれば、そういう気分になれるんだろう」

陽子はふたたび溜息をつく。

「自信があればできるだろうけど、自信の持ちようがない」

「そんなもの」

延は笑う。

「麒麟が選んだのだから、文句があれば麒麟に言え、と思うことだな」

陽子は少し呆れた気分で延を見返す。

「それが名君になるコツ？」

「そうだろう、きっと。少なくとも俺はこれでやってきたからな。文句があれば延麒に言え。それでも不服なら自分でやってみろ、と」

「……なるほど。覚えておこう」

実際に自分の目で見た慶国は、剣の幻以上に荒れていた。雲海の透明な水を透かして見ても荒廃のほどが分かる。すでに田は穂が見えていなければならない時季だが、耕作を諦めたように放置されたものが多かった。廬も里も、死に絶えたかのように静まり返って道を歩く者の姿は見えない。本当に焼け落ち、黒々とした焼け跡だけが残っているところもあった。

巧国を貧しいと思ったが、慶国の貧しさはその比ではない。城壁の下に身を寄せ合った難民の姿と重なって胸が痛い。きっとみんな家に帰りたいだろう。眠る家を持たない苦しさは身にしみて知っている。

雲海越し、眼下に地上を見て飛行すること半日で、陽子たちは征州都維龍に到着した。維龍もまた雲海の上に頂上を突き出した高い山だった。頂上にある建物が州侯の城、この城のどこかに景麒がいるはずだった。

遠目に州城を見たところで鳥が飛び立つように黒い影が城から飛び立つのが見えた。城を守る空行騎兵の集団だろう。

戦うということは、人を殺すということだ。これまで人を斬ったことだけはなかったが、

それは人の死を心に背負う勇気を持てなかったからだった。一緒に行くと言ったときに覚悟は決めた。大義のために人の命を軽んじようというわけではない。斬った相手とその数は必ず忘れず覚えておく。それが陽子にできる最大限のことだと、そう納得していた。

「だいじょうぶか？」

延に訊かれて陽子は頷いた。

「迷うなよ。せっかくその気になってくれた景王をここで失っては、目もあてられぬからな」

「そう簡単に死にはしないと思う。わたしは往生際が悪いから」

陽子が答えると延は怪訝そうにした。それに目線で笑ってみせる。

駆けつけてくる騎兵に向かって陽子は剣を鞘走らせた。吉量は躊躇せず空を駆ける。城から飛び立った騎兵の群れに陽子は突っこんでいった。

7

——城の奥深く、厚い包囲網の内側にあったその部屋に捕らわれていたのは、一頭の獣だった。

「……麒麟」

これが、麒麟なのか。

雌黄の毛並みの一角獣。鹿の類ならではの、ほっそりとした脚には、鉄の鎖が巻かれていた。麒麟は深い色の眼で陽子を見る。傍に寄ると少しまろい形の鼻先を陽子の腕に当てた。

「……景麒？」

言うと、まっすぐに陽子を見上げる。四肢を折って陽子の足元に体軀を伏せた。屈みこんで手を伸ばしても逃げない。金の鬣を撫でると目を閉じた。

――これが私の半身なのか。

陽子をこの運命に投げこんだ、あちらでは伝説にしか棲まない獣。

「捜した」

陽子が言うと、麒麟は陽子の膝に頤を寄せる。何度も、まるでお辞儀するようにして擦りつけた。

もう一度鬣を撫でると、足元で硬い音がした。獣を縛めた鎖が鳴った音だった。

「待って。いま放してあげる」

陽子は立ち上がり、鎖に向かう。剣の切っ先を鎖に当てて真上から突いて断ち切った。麒麟は立ち上がる。体重を感じさせない動きだった。そうして何度も陽子の腕に頭を擦りつける。正確には、その角を。

「……どうした？」

角を覗きこんで、陽子はそこに妙な模様があるのに気がついた。掌ほどの長さのそれに赤褐色の文字。それはひどく乾いた血の色に似ていた。

「これが、どうか？」

麒麟はただ角を擦りつける。そのじれたような仕草に陽子は異常に気づいた。半獣の楽俊が喋る。妖でさえ人語を操るこの地で、最高位の霊獣と呼ばれる麒麟が喋れないはずがあるだろうか？

そういえば剣の幻の中で「角を封じたので人の姿になれず、喋れない」と言っていなかったか。

軽く角を擦ると、麒麟はおとなしくされるままになっている。服の裾で強くぬぐうと少しだけ掠れたが、それ以上の変化はない。訝しんでよくよく見ると、細かな文字が角に彫りこまれているのだと分かった。

傷ならば役に立つかもしれない、と陽子は珠を懐から取り出した。そっと当てながら拭うと明らかに文字が薄くなる。何度かくりかえしてごく薄くなったとき、突然腕の中で声が響いた。

「ありがたい」

声は懐かしい音をしていた。

「……景麒？」

麒麟はわずかに眼を細めて陽子を見上げる。
「いかにも。ご苦労をおかけしたようで申しわけございません」
陽子は微笑う。少しも悪びれない口調がただ懐かしかった。
「おひとりか？」
「延王がご助力くださった。雁国の王師が外で偽王軍を留めている」
「なるほど」
頷いて麒麟は強い声を上げた。
「ヒョウキ、ジュウサク」
壁からすべり出てくるようにして、二頭の獣が姿を現す。
「ここに」
「行って延王をご助勢申しあげよ」
深々と一礼して、二頭の獣の姿が消え失せた。
「無事だったんだ」
「無論」
麒麟は頷いてみせる。その本当に悪びれない声がおかしかった。
「角を封じられると、使令も封じられる？」
麒麟が気まずそうに小さく唸った。

「ずいぶんと学ばれたようだ。……そのとおりです。ご迷惑をおかけして申しわけない」
「ジョウユウは封じられずにすんだから、わたしには影響がない。カイコとハンキョは？」
「ここにおります。お呼びしますか」
「いや。みんな無事ならいい。あとでゆっくり会えるから」
「はい」
「ああ、そうだ。お願いがあるんだけど」
「何なりと」
「ジョウユウにした命令を解いてほしい。まだ離れてもらっては困るけど」
麒麟は陽子を見つめて二、三度瞬きをする。
「ずいぶんとお変わりになった」
「うん。景麒にもお礼を。賓満をありがとう。ジョウユウには本当に助けてもらった。お礼も言いたいし、訊きたいこともあるから」
「お訊きになりたいこと？」
「そう。ジョウユウって、どういう字を書くのか」
獣は目を見開いた。
「――おかしなことをおっしゃる」
「そうかな。でもずっと本当の名前を聞いてないみたいで、気になっていたから」

陽子がそう言ったときに、ふいにぞろりとした感触が手を伝った。
指があるかなしかに動いて宙に文字を描く。
――冗祐。
陽子は軽く微笑んだ。
「ありがとう、冗祐」
――使令は麒麟に仕え、ひいては王に仕える。礼を言っていただくにはおよびません。
陽子はただ微笑った。そんな陽子を見ていた麒麟は目を細める。
「本当にお変わりになった」
「うん。たくさん勉強をさせてもらった」
「正直申しあげて、もう一度お目にかかれるとは思っておりませんでした」
陽子は頷く。
「わたしもだ。――人の形にはならないの？」
「裸で御前には、まかりかねる」
その憮然とした声がおかしくて、陽子は小さく笑った。
「では着るものを調達に、とりあえず帰ろう。金波宮に戻れるまでは、しばらく玄英宮に居候だけど」
陽子が笑うと麒麟はもう一度目を瞬いて、その場に身を伏せる。動きにつれて背が不思議

な光沢を放った。

「天命をもって主上にお迎えする」

首を垂れてその角を陽子の足に当てる。

「御前を離れず、詔命に背かず、忠誠を誓うと、誓約申しあげる」

陽子は薄く微笑んだ。

「――許す」

これが陽子にとっての、物語の始まりである。

予青六年、春、宰輔景麒失道、疾甚だし。堯天に大火疫癘続く。政、節無く、苞苴讒夫昌んなり。民憂えて歌う、天将に慶を亡さんとす、と。

五月、上、蓬山に赴き許されて位を退く。上、蓬山に崩し、泉陵に葬る。景王たること六年、諡して予王と曰う。

予王崩じて舒栄立つ。偽して自ら景王を号して堯天に入る。国大いに乱れる。

七年七月、慶主景王陽子立つ。

景王陽子、姓は中嶋、字は赤子、胎果の生まれなり。七年三月、蓬萊国より帰り、七月末、乱を救い、雁国延王尚隆に請うて偽王舒栄を伐たしむ。

八月、蓬山に天勅を承く。神籍に入りて景王を号す。堯天に予王を祀り、六官諸侯を新たに任じて政を正し、元を赤楽と改め、赤王朝を開けり。

『慶史赤書』

解説

堺　三保

本書は、小野不由美が一躍その筆名を上げた傑作異世界ファンタジィ《十二国記》シリーズ第一作の講談社文庫版である。先に出版された講談社X文庫版では、主要対象読者を考慮してかなに開かれた文字を、漢字に戻すなどの若干の修正がある。

もし、あなたが小野不由美の熱烈なファンなら、すでにX文庫版で読んでおられるだろうが、「若干の修正」がいかなるものか、とても気にかかるだろうから、間違いなく本書を手に取ることだろう。

もし、あなたが日本の寒村に吸血鬼を持ち込んだホラー大作『屍鬼』で小野不由美を知り、その圧倒的な筆力に感嘆したのであれば、次は本書を手に取っていただきたい。

もし、あなたがまだ小野不由美という作家とその作品を知らないのであれば、迷わず本書

を手に取るべきだ。

本書は、それだけの魅力にあふれているのだから。

物語は、平凡な女子高校生である陽子の日常から始まる。突然、目の前に現れた見知らぬ男に連れ去られ、この世ならぬ異邦の地へとたどり着く。そこは十二人の王と十二頭の麒麟によって治められる十二の不思議な国だった。

一見のどかで牧歌的なその世界で、陽子は次々と襲いくる異形の獣たちに追われ、そして巡りあう人々の薄情さに絶望しつつ、さすらいを始める。なぜ彼女はこの世界に呼ばれたのか。なぜ襲われなければいけないのか。答えを探し求めて。

現実への敵視や乖離感は、主人公が現実の世界から異世界へと行ってしまうタイプの異世界ファンタジィにおいては、たいていは備え持っているものだ。

このタイプのファンタジィにおいては、主人公が異世界での経験を通じて癒され、本来の自分を見いだすというのが典型的な展開である。

本書もまた、大枠においては同様の構造を持っている。陽子は、家では口答え一つしないおとなしい少女で、学校でも目立たない存在だが、どちらにおいてもどこか周囲から浮いてしまっている。そして、自分でもそのことに気づいており、かすかないらだちを周囲にも自

分自身にも感じている。

こうした感覚は、若い頃なら誰もが一度は感じた覚えがあるものだろう。自己のアイデンティティを何を以て確立すればよいのか、決めるどころか、何をどう選択したらよいのかさえわからない、若い日々のつらい記憶である。それは、感受性が強い人ほど強烈に感じてしまう想いかもしれない。

この想いから逃れたい。顔のない無名の存在ではなく「何者か」でありたい。異世界ファンタジイを読むとき、読者は自身のそういった想いを主人公に重ね合わせて、自らを慰め得るものだ。

ただし、本書における陽子の試練は実にシビアで、とうていそういった逃避とはなりえない。作者の批判の矢は、現実の世界の人間だけでなく、異世界の人々にも、さらには陽子自身にも容赦なく向けられているからだ。

陽子は、すべてにおいて受動的である。何に関しても自分から一歩身を退いて、距離を取っている。周囲に対する違和感の原因の半分は彼女自身の態度にもあるのだ。

そんな陽子も、十二国に着いてからは、生きるため、他人と積極的にコミュニケートせざるを得なくなる。そこで彼女は何度も手痛い裏切りにあって人間不信に陥り、そんな自分を嫌悪するようになっていくが、やがて気の良い半獣に出会うことで、他人への信頼を取り戻していく。このとき陽子は、他人に一方的におぶさるのではなく、自分が他者に何かをする

ことで、互いに関与しあえるのだということを悟っていくのだ。何かを行うためには、自分に何ができて何ができないかをはっきりとさせることであり、それこそがすなわちアイデンティティの確立につながる。つまり、異世界における冒険で、陽子は今までなおざりにしてきた近代的自我に目覚めるのである。この構造によって、本書は類い希なビルドゥングス・ロマンとして成立していると言っていいだろう。

それにしても、十二国は実に不思議な世界である。

それは虚海の彼方、神々が住まう五山を戴く黄海の地を、ぐるりと取り囲むように存在している。慶、奏、範、柳、雁、恭、才、巧、戴、舜、芳、漣。それぞれの国には、その国を治める王と、それを補佐する麒麟がおり、霊獣である麒麟が天啓によって王を見いだし、玉座に据える。そしてその王は、天啓ある限り不老不死となって国を治め続ける。

システムだけを見れば、まさにおとぎ話の世界である。

だが矛盾したことに、作者には十二国を夢の国として描く気などさらさらないのも明らかなのだ。

小野不由美は近代的な意味での個人主義者であり、民主主義者である。したがって、絶対的な王による絶対的な政権の正当性など、微塵も信じてはいない。

実はその主張は、十二国記のどの作品にも通奏低音として流れている。陽子のように蓬莱

から渡ってきた人間をはじめとして、さまざまな人々が、ことあるごとに王制に対する疑念を表明し、民主主義について語っているのである。

また、王が失道しない限り平和を享受できるという十二国の国々で、次から次へと過ちを犯してしまう王が現れ、民衆が王に反抗してるというのもおかしな話だ。

たしかに、一方に主人公側の清廉潔白な王たちもいるにはいる。だが、陽子たち十二国記の主人公たちは、正しいから主人公なのではない。この奇妙な世界の常識に捉らわれず、正しさを自分で模索し続けているからこそ主人公たりえているのだ。そこに天啓の入り込む隙間は、実はない。

だいたいが、天啓を受けたという絶対的な宿命を担っているはずの存在である王に、出来不出来があるというところが、すでにこの世界の矛盾を如実に表している。世界を律する正しいはずの絶対的なシステムが、きちんと機能していないのである。

だとすれば、この世界の在り方自体に最初から問題があるのではないだろうか。そもそも、この世界の有り様の妙に人工的なところも気にかかるではないか。中国の神話・伝説を切り張りしたような世界観も、見事に幾何学的な模様じみた地形も、そう考えればやたらと不自然である。

十二国の世界そのものこそが、本シリーズ最大の謎なのである。

ところで、少し先走るが、本シリーズにはそれ以外にも大きな謎が一つ存在している。それは、戴国で何が起こっているのかということだ。

本シリーズおよび本シリーズの外伝である『魔性の子』は、各巻ごとに主人公も時代も異なっており、執筆順と作品世界内での年代順は一致していない。今まで発表された作品を作品世界内の年代順に並べると以下のようになる（カッコ内は主人公）。

『東の海神　西の滄海』（尚隆）
『図南の翼』（珠晶）
『風の海　迷宮の岸』（泰麒）
『月の影　影の海』（陽子）
『風の万里　黎明の空』（陽子）
『魔性の子』（泰麒）

この順に読み直すと、『風の海　迷宮の岸』のラストでは前途洋々だったはずの戴国から、陽子が十二国に渡った時には、すでに泰麒の姿が消えており、何やら暗い影がちらついているのがわかる。そして外伝の『魔性の子』では、蓬萊、つまりこちら側の世界に泰麒が流されてしまっており、その同じ時期にどうやら十二国側では大事件が起こっていることも推測

できる。戴国で何が起こったのか。また、それが陽子たちの未来にいかなる影を落とすことになるのか。続きが気になってしかたがないところだ。

著者の小野不由美は一九六〇年、大分県生まれ。大谷大学仏教学科に在学中、京都大学推理小説研究会に所属、やはり後に作家となる綾辻行人、法月綸太郎、我孫子武丸らとミステリ談義に花を咲かせる日々を送ったという、かなり強面の本格推理マニアである。常に超自然的な事柄を扱いつつも、その作品中にがっちりとした論理性をもたせているあたりは、このミステリ好きなところからきているのだろう。

作家デビューは八八年の『バースデイ・イブは眠れない』で、以降少女向け小説のジャンルに本格的なホラーを持ち込んだ作品を次々に発表、一躍人気を得る。そして、九一年の『魔性の子』に続き、九二年の本作を皮切りに《十二国記》の執筆を開始し、少女たちのみならず広く一般の読者に圧倒的な支持を得るようになる。

九五年以降、執筆スピードが衰えたように見えて、ファンをやきもきさせたが、それも三年の歳月をかけた超大作『屍鬼』執筆のためだったわけで、今後はもう少し早いサイクルでの新作発表を期待できるかもしれない。いや、我々ファンは皆首を長くして待っているのだから、ぜひともそうであって欲しいものだ（先に挙げた戴国の謎の件もあるし）。

さて、次巻『風の海　迷宮の岸』では時代が若干さかのぼり、蓬萊すなわち日本に流されていた戴国の麒麟、泰麒を主人公にして、王選びを麒麟の側から描いていく。続けて本文庫に収録される予定なので、ご期待いただきたい。

小野不由美著作リスト

1　『バースデイ・イブは眠れない』（１９８８）講談社Ｘ文庫ティーンズハート
2　『メフィストとワルツ！』（１９８８）講談社Ｘ文庫ティーンズハート
3　『悪霊なんかこわくない』（１９８９）講談社Ｘ文庫ティーンズハート
4　『悪霊がいっぱい』（１９８９）講談社Ｘ文庫ティーンズハート《ゴーストハント》
5　『悪霊がほんとにいっぱい！』（１９８９）講談社Ｘ文庫ティーンズハート《ゴーストハント》
6　『悪霊がいっぱいで眠れない』（１９９０）講談社Ｘ文庫ティーンズハート《ゴーストハント》
7　『呪われた十七歳』（１９９０）朝日ソノラマパンプキン文庫
8　『悪霊はひとりぼっち』（１９９０）講談社Ｘ文庫ティーンズハート《ゴーストハント》

9 『グリーンホームの亡霊たち』（１９９０）朝日ソノラマパンプキン文庫
10 『悪霊になりたくない！』（１９９１）講談社Ｘ文庫ティーンズハート《ゴーストハント》
11 『魔性の子』（１９９１）新潮文庫ファンタジーノベル・シリーズ《十二国記》外伝
12 『悪霊とよばないで』（１９９１）講談社Ｘ文庫ティーンズハート《ゴーストハント》
13 『月の影　影の海』（１９９２）講談社Ｘ文庫ホワイトハート《十二国記》
14 『悪霊だってへイキ！』（１９９２）講談社Ｘ文庫ティーンズハート《ゴーストハント》
15 『風の海　迷宮の岸』（１９９３）講談社Ｘ文庫ホワイトハート《十二国記》
16 『悪夢の棲む家』（１９９４）講談社Ｘ文庫ホワイトハート《ゴーストハント》
17 『東京異聞』（１９９４）新潮社
18 『東の海神　西の滄海』（１９９４）講談社Ｘ文庫ホワイトハート《十二国記》
19 『風の万里　黎明の空』（１９９４）講談社Ｘ文庫ホワイトハート《十二国記》
20 『過ぎる十七の春』（１９９５）講談社Ｘ文庫ホワイトハート（『呪われた十七歳』改訂版）

21 『図南の翼』（1996）講談社X文庫ホワイトハート　《十二国記》
22 『ゲームマシンはデイジーデイジーの歌をうたうか』（1996）ソフトバンク（水玉蛍之丞とのゲームエッセイ集）
23 『緑の我が家 Home, Green Home』（1997）講談社X文庫ホワイトハート（『グリーンホームの亡霊たち』改訂版）
24 『屍鬼』（1998）新潮社
25 『月の影　影の海』（1999）講談社文庫版　《十二国記》　本書

本書は一九九二年七月、講談社X文庫ホワイトハートより刊行。
加筆訂正の上、講談社文庫としてあらためて刊行するものです。

著者|小野不由美　大分県生まれ。大谷大学在学中に京都大学推理小説研究会に在籍。講談社X文庫ティーンズハートでデビュー。『東京異聞』が第5回日本ファンタジーノベル大賞の最終候補作に。著書に本書を含む『十二国記』シリーズ、『悪夢の棲む家』『過ぎる十七の春』『緑の我が家』(以上、講談社X文庫)、『魔性の子』『東京異聞』『屍鬼』(以上、新潮社)などがある。

月の影 影の海(下) 十二国記

小野不由美

© Fuyumi Ono 2000

2001年1月15日第1刷発行
2003年3月7日第10刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-5817
業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社書籍業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-264774-5

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

大下英治　一を以って貫く〈小沢一郎〉
大下英治　激録！総理への道〈後藤田正晴から森喜朗まで〉
大下英治　手塚治虫〈ロマン大宇宙〉
大橋巨泉出発点
大橋巨泉岐路
太田忠司僕の殺人
太田忠司美奈の殺人
太田忠司刑事失格
太田忠司新宿少年探偵団
太田忠司怪人大鴉博士〈新宿少年探偵団〉
太田忠司摩天楼の悪夢〈新宿少年探偵団〉
太田忠司紅蛾〈新宿少年探偵団〉
おおつきひろスペインの食卓から
大竹昭子バリの魂、バリの夢
大久保智弘岩水最後の闘い〈福島正則〉
尾崎秀樹編徹底検証〈忠臣蔵〉の謎
小川洋子密やかな結晶
小野不由美月の影　影の海（上）（下）〈十二国記〉
小野不由美迷宮の岸〈十二国記〉
小野不由美風の海　迷宮の岸〈十二国記〉
小野不由美東の海神　西の滄海〈十二国記〉
小野不由美風の万里　黎明の空（上）（下）〈十二国記〉
小野不由美図南の翼〈十二国記〉
小野不由美黄昏の岸　暁の天〈十二国記〉
小野不由美華胥の幽夢〈十二国記〉
乙川優三郎霧の橋
乙川優三郎喜知次烏
乙川優三郎屋
奥田英朗ウランバーナの森
奥田英朗最悪
乙武洋匡五体不満足〈完全版〉
小野一光セックス・ワーカー〈女たちの「東京」重生活〉
大石静ねこの恋
大崎善生聖の青春
恩田陸三月は深き紅の淵を
海音寺潮五郎孫子
勝目梓悪女軍団
勝目梓殺し屋
勝目梓肉狩り
勝目梓引き裂かれた夏
勝目梓炸裂
勝目梓はみだし者
勝目梓女豹たちの宴
勝目梓狼たちの宴
勝目梓禁断の宴
勝目梓火刑の朝
勝目梓蒼い牙
勝目梓淫夜
勝目梓濡れる殺意
勝目梓逃亡
勝目梓あやしい叢
勝目梓滴り
勝目梓歯科医
勝目梓耽溺
勝目梓暗黒の狩人
勝目梓悪党図鑑
勝目梓闇に光る肌
勝目梓処刑猟区

勝目　梓　獣たちの熱い眠り
勝目　梓　昏き処刑台
勝目　梓　眠れない
勝目　梓　処刑賛歌
勝目　梓　生花祭
勝目　梓　幻　けもの道に罠を張れ
勝目　梓　あられもなく
勝目　梓　復讐回廊
勝目　梓　剝がし屋
勝目　梓　娼婦の朝
勝目　梓　地獄の狩人
勝目　梓　夢追い肌
鎌田　慧　自動車絶望工場〈ある季節工の日記〉
鎌田　慧　日本の兵器工場
鎌田　慧　「東大経済卒」の十八年
鎌田　慧　トヨタと日産〈自動車王国の暗闘〉
鎌田　慧　ルポ大事故！その傷痕
鎌田　慧　六ヶ所村の記録〈核燃料サイクル基地の素顔〉
鎌田　慧　いじめ社会の子どもたち
鎌田　慧　壊滅日本〈17の致命傷〉
鎌田　慧　家族が自殺に追い込まれるとき
桂　米朝　米朝ばなし〈上方落語地図〉
門田泰明　暗闇館くらやみやかた
河原敏明　美智子さまのおことば〈愛の喜び・苦悩の日々〉
加藤　仁　人生を楽しむ〈50歳からがゴールを決める〉
川田弥一郎　白く長い廊下
加来耕三　国志の謎〈諸葛孔明の真実〉徹底検証
加来耕三　信長の謎〈徹底検証〉
加来耕三　龍馬の謎〈徹底検証〉
加来耕三　武蔵の謎〈徹底検証〉
門野晴子　老親を棄てられますか
神田憲行　ハノイの純情、サイゴンの夢
加納喜光　知ってるようで知らない日本語辞典〈自信から鱗が落ちる言葉の羅薈〉
河上和雄　知らないと恥をかく犯罪捜査と裁判基礎知識
河上和雄　好き嫌いで決めろ
加藤万里　ガーデン・ダイアリー〈カリフォルニア花と暮らす12ヵ月〉
香納諒一　雨のなかの犬
香納諒一　梟の拳
笠井　潔　三匹の猿〈私立探偵飛鳥井の事件簿〉
笠井　潔　巣の巨なる黄昏
笠井　潔　群衆の悪魔〈デュパン第四の事件〉
笠井　潔　熾天使の夏
鏡リュウジ　2000年運命の占術
鏡リュウジ　占いはなぜ当たるのですか
神崎京介　女薫の旅
神崎京介　女薫の旅　灼熱つづく
神崎京介　女薫の旅　激情たぎる
神崎京介　女薫の旅　奔流あふれ
神崎京介　女薫の旅　陶酔めぐる
神崎京介　女薫の旅　衝動はぜて
神崎京介　女薫の旅　放心とろり
神崎京介　滴
神崎京介　インドロ
神崎京介　イントロもっとやさしく
神崎京介　愛技
金谷多一郎　金谷多一郎のバーディコーナーグラグ

金丸弘美　産地直送おいしいものガイド
加納朋子　ガラスの麒麟
勝谷誠彦　いつか旅するひとへ
河原まり子　利岡裕子　犬から学ぶ心のレッスン
川上信定　本当にうまい朝めしの素
金井美恵子　軽いめまい
金田一春彦　安西愛子　編　日本の唱歌全三冊
岸本英夫　死を見つめる心〈がんとたたかった十年間〉
北方謙三　君に訣別の時を
北方謙三　鎖
北方謙三　烈日
北方謙三　われらが時の輝き
北方謙三　魂の岸辺
北方謙三　夜の終り
北方謙三　帰路
北方謙三　火焔樹
北方謙三　秋ホテル
北方謙三　遠い港
北方謙三　錆びた浮標
北方謙三　いつか光は匂いて
北方謙三　汚名の広場
北方謙三　活路
北方謙三　余燼（上）（下）
北方謙三　夜の眼
北方謙三　逆光の女
菊地秀行　魔闘学園
菊地秀行　ブルー・マン　神を食った男
菊地秀行　邪神聖宴〈ブルー・マン2〉
菊地秀行　闇の旅人〈ブルー・マン3〉
菊地秀行　魔神降臨〈ブルー・マン4〉
菊地秀行　鬼花人〈ブルー・マン5〉
菊地秀行　魔界医師メフィスト〈黄泉姫〉
菊地秀行　魔界医師メフィスト〈影斬士〉
菊地秀行　魔界医師メフィスト〈海妖美姫〉
菊地秀行　魔界医師メフィスト〈夢盗人〉
菊地秀行　ちょっとエッチな
菊地秀行　懐かしいあなたへ
北原亞以子　深川澪通り木戸番小屋
北原亞以子　深川澪通り燈ともし頃
北原亞以子　新地橋〈深川澪通り木戸番小屋〉
北原亞以子　降りしきる
北原亞以子　風よ聞け〈雲の巻〉
北原亞以子　贋作天保六花撰
北原亞以子　花冷え
北原亞以子　それでもしたい?!　結婚
岸本葉子　よい旅を、アジア
岸本葉子　アジア発、東へ西へ
岸本葉子　旅はお肌の曲がり角
岸本葉子　三十過ぎたら楽しくなった!
岸本葉子　炊飯器とキーボード〈エッセイストの12ヵ月〉
岸本葉子　家もいけど旅も好き
桐野夏生　顔に降りかかる雨
桐野夏生　天使に見捨てられた夜
桐野夏生　OUT（上）（下）
岸本裕紀子　モテる女たち
岸本裕紀子　いつか王子さまが
岸本裕紀子　もっとモテる女たち

京極夏彦　文庫版　姑獲鳥の夏
京極夏彦　文庫版　魍魎の匣
京極夏彦　文庫版　狂骨の夢
京極夏彦　文庫版　鉄鼠の檻
京極夏彦　文庫版　絡新婦の理
北森　鴻　狐罠
北森　鴻　メビウス・レター
北森　鴻　花の下にて春死なむ
北上秋彦　クラッシュ・ゲーム
キム・ミョンガン　恋愛の基礎
北村　薫　盤上の敵
木村　剛　小説ペイオフ〈通貨が堕落するとき〉
綾辻行人　どんどん橋、落ちた
黒岩重吾　明日なき巡礼たち
黒岩重吾　古代史への旅
黒岩重吾　磐舟の光芒(上)(下)
黒岩重吾　天風の彩王(上)(下)〈物部守屋と蘇我馬子〉〈藤原不比等〉
黒岩重吾　別の時の訣れ
黒岩重吾　雨の葬送
栗本　薫　ぼくらの時代
栗本　薫　優しい密室
栗本　薫　女狐
栗本　薫　鬼面の研究
栗本　薫　伊集院大介の冒険
栗本　薫　伊集院大介の私生活
栗本　薫　天狼星
栗本　薫　天狼星II
栗本　薫　天狼星III　蝶の墓
栗本　薫　新・天狼星ヴァンパイア(上)〈恐怖の章〉(下)〈異形の章〉
栗本　薫　真・天狼星ディアック全三冊
栗本　薫　伊集院大介の新冒険
栗本　薫　仮面舞踏会〈伊集院大介の帰還〉
栗本　薫　魔女のソナタ〈伊集院大介の洞察〉
栗本　薫　怒りをこめてふりかえれ
栗本　薫　タナトス・ゲーム〈伊集院大介の世紀末〉
黒柳徹子　窓ぎわのトットちゃん
久保博司　日本の警察〈警視庁vs大阪府警〉
久保博司　日本の検察
胡桃沢耕史　紫の拳銃〈弁護士&講釈師・大神田楽〉
草野　厚　国鉄解体〈JRは行政改革の手本となるのか〉
黒川博行　アニーの冷たい朝
黒川博行　燻り
軍司貞則　本田宗一郎の真実〈小況知らずのホンダを創った男〉
蔵前仁一　ホテルアジアの眠れない夜
蔵前仁一　旅ときどき沈没
蔵前仁一　旅人たちのピーコート
黒崎　緑　柩の花嫁〈聖なる血の城〉
久世光彦　触れもせで〈向田邦子との二十年〉
久世光彦　夢あたたかき〈向田邦子との二十年〉
久世光彦　ニホンゴキトク
黒田福美　ソウルマイハート
黒田福美　ソウルマイデイズ
熊谷真菜　たこやき〈大阪発おいしい粉物大研究〉
楠見千鶴子　エーゲ海ギリシア神話の旅
倉知　淳　星降り山荘の殺人
鍬本實敏　警視庁刑事〈私の仕事と人生〉
黒田信一　ルチャリブレがゆく

グループ・子どもと向き合う父親編
今野　敏　子どもに伝える父のワザ52
けらえいこ　おきらくミセスの
ハヤセクニコ　婦人くらぶ～
けらえいこ　セキララ結婚生活
今野　敏　蓬　莱
今野　敏　イ　コ　ン
今野　敏　ST　警視庁科学特捜班
今野　敏　ST　警視庁科学特捜班〈毒物殺人〉
小林道雄　〈冤罪〉のつくり方〈大分・女子短大生殺人事件〉
小杉健治　容　疑　者
小杉健治　失　跡
後藤正治　ス　カ　ウ　ト
後藤正治　奪われぬもの
幸田　文　崩　れ
幸田　文　台　所　のおと
幸田　文　季節のかたみ
幸田　文　月　の　塵
小池真理子　記憶の隠れ家
小池真理子　美　神　ミューズ
小池真理子　冬　の　伽　藍

講談社文庫編　ワールドカップ全記録
幸田真音　小説ヘッジファンド
幸田真音　マネー・ハッキング
郡山和世　噺家カミサン繁盛記
古森義久　影のアメリカ〈超大国を動かす見えない勢力〉
小森健太朗　ネヌウエンラーの密室
神坂次郎　海の伽倻琴(上)(下)
神坂次郎　〈雑賀鉄砲衆がゆく〉
神坂次郎　海の稲妻(上)(下)
神坂次郎　〈根来・種子島衆がゆく〉
神坂次郎　おれは伊平次
小松江里子　若　葉　のころ
小松江里子　Summer Snow
小松江里子　青　の　時　代
五味太郎　大　人　問　題
小峰有美子　宿　曜　占　星　術
小柴昌俊　心に夢のタマゴを持とう
佐野　洋　生きていた灰(上)(下)
佐野　洋　いつまでも昨日
佐野　洋　折々の犯罪
佐野　洋　卑劣な耳(上)(下)

佐野　洋　折々の事件
佐野　洋　動詞の考察
佐野　洋　折々の憎悪
佐野　洋　光る砂
佐野　洋　指の時代
佐野　洋　〈佐野洋短篇推理館〈文庫オリジナル最新14作〉〉
佐野　洋　推理日記V
佐野　洋　推理日記VI
斎藤　栄　ブライダル・マーダー
斎藤　栄　箱根高原殺人事件
斎藤　栄　巨人機が消えた
斎藤　栄　横浜ランドマークタワーの殺人
笹沢左保　夕暮れ〈夜明日出夫の事件簿〉
笹沢左保　一方通行〈夜明日出夫の事件簿〉
笹沢左保　死の追走次は誰か
早乙女　貢　沖田総司(上)(下)
早乙女　貢　から　す　組
早乙女　貢　会津秋々記
早乙女　貢　〈脱走人別帳〉
秘剣柳生十兵衛〈隻眼一人旅〉

早乙女　貢　江戸の夕映え
早乙女　貢　新選組・斬人剣〈小説・土方歳三〉
早乙女　貢　淀君
佐藤愛子　戦いすんで日が暮れて
佐木隆三　復讐するは我にあり(上)(下)
佐木隆三　正義の剣
佐木隆三　死刑囚永山則夫
サトウ・ハチロー　新装版詩集おかあさん(1)(2)
澤地久枝　試された女たち
澤地久枝　ベラウの生と死
澤地久枝　時のほとりで
澤地久枝　六十六の暦
沢田サタ編　泥まみれの死〈沢田教一ベトナム戦争写真集〉
佐高　信　日本官僚白書
佐高　信　銀行倒産〈ドキュメント金融恐慌〉
佐高　信　逆命利君
佐高　信　日本は誰のものか
佐高　信　人生のうた
佐高　信　青春読書ノート〈大学時代に何を読んだか〉
佐高　信　孤高を恐れず〈石橋湛山の志〉
佐高　信　官僚たちの志と死
佐高　信　官僚国家＝日本を斬る
佐高　信　社長のモラル〈日本企業の罰と罪〉
佐高　信　ニッポンの大問題
佐高　信　日本を撃つ
佐高　信　こんな日本に誰がした!
佐高信編　男の美学〈ビジネスマンの生き方20選〉
佐高信　政治家の本音　官僚に告ぐ!
佐藤雅美　影帳　半次捕物控
佐藤雅美　恵比寿屋喜兵衛手控え
佐藤雅美　無法者　アウトロー
佐藤雅美　物書同心居眠り紋蔵
佐藤雅美　隼小僧異聞〈物書同心居眠り紋蔵〉
佐藤雅美　密約〈物書同心居眠り紋蔵〉
佐藤雅美　お尋者〈物書同心居眠り紋蔵〉
佐藤雅美　開国〈恩直の宰相・堀田正睦〉
佐藤雅美　手跡指南神山慎吾　櫻ノ岸夢一定〈蜂須賀小六〉
佐藤雅美　揚羽の蝶(上)(下)〈半次捕物控〉
堺屋太一　日本とは何か
堺屋太一　「大変」な時代〈常識破壊と大競争〉
堺屋太一　時代末(上)(下)
斎藤　純凍　樹
坂本光一　白色の残像
斎藤　肇　思いがけないアンコール
斎藤　肇　新・魔法物語　竜形の少年
佐藤隆三　菊と鷲
斎藤　澪　ノサップ岬の女
佐藤泰子　春夏秋冬色物語(カラー・ストーリー)〈カラーマニュアル〉
佐々木譲　愚か者の盟約
酒見賢一　童貞
柴門ふみ　サイモンの秘訣
柴門ふみ　笑って子育てあっぷっぷ
柴門ふみ　愛さずにはいられない〈バーバーとしての私〉
佐江衆一　神州魔風伝
佐江衆一　江戸は廻灯籠
佐江衆一　からたちの記〈女剣士道場日誌〉

9784062647748

1920193005332

ISBN4-06-264774-5

C0193 ¥533E (0)

容赦なく襲いかかる妖魔に水禺刀で応え、裏切りに疲れた旅の果て、陽子は唯一の親友となる半獣の楽俊と出会う。二人は豊かな隣国、雁の国に向かい延王に謁見。そして、なぜ陽子が過酷な試練をへて異界へ旅立つことになったか、真実が明かされるのだった。地図にない国——十二国の大叙事詩が今こそ始まる。

月の影 影の海 (下)
十二国記
小野不由美
定価：本体533円(税別)

お
81
2